

日本水泳連盟  
機関紙

第 1 1 5 号  
昭和 3 2 年 6 月

# 水泳 界



No. 115

“SUIEI”

Jun. 1957

Nippon Suiei Renmei

(Amateur Swimming Federation of Japan)

# 昭和32年度主要行事日程予定

- 3月25日(日)―30日(土) 第1回シンクロ講習会……………江東室内プール
- 6月2日(日) 第29回早慶対抗水上競技大会……………神宮プール
- 6月9日(日) 第22回立・日・明・三大学対抗水上競技大会……………神宮プール
- 6月26日(水)―7月20日(土) 水泳安全指導者講習会……………全国九地区
- 7月7日(日) 第2回日大・中大対抗水上競技大会……………神宮プール
- 7月8日(土)―13日(日) 第2回シンクロ講習会……………国民体育館プール
- 7月28日(日) ヨリ8月1日(水) マデ東部水泳教室……………天理プール
- 7月23日(火) ヨリ8月27日(土) マデ西部 〃……………男子…久留米プール  
女子…瀬高町プール
- 8月3日(土)・4日(日) 北海道高等学校選手権水上競技大会……………札幌・中島アール
- 8月10日(土)・11日(日) 東北 〃……………新潟長岡プール
- 8月10日(土)・11日(日) 関東 〃……………大宮市・県営プール
- 8月10日(土)・11日(日) 中部 〃……………浜松市営元城プール
- 8月10日(土)・11日(日) 近畿 〃……………大阪市扇町プール
- 8月3日(土)・4日(日) 中国 〃……………松江市営プール
- 8月10日(土)・11日(日) 四国 〃……………香川観音寺一高プール
- 8月3日(土)・4日(日) 九州 〃……………佐世保南高プール
- 8月11日(日) 第2回日本泳法競技会……………天理プール
- 8月上旬 第2回シンクロスイミング競技会……………未定
- 8月14日(水) 15日(木) 水泳指導者検定試験……………お茶の水大学プール
- 8月16日(金)・17日(土)・18日(日) 昭和32年度日本選手権水上競技大会……………神宮プール
- 8月16日～22日 国民皆泳週間(8月20日を中心とする一週間)……………全国
- 8月23日(金)・24日(土)・25日(日) 第25回日本高等学校選手権水上競技大会…神宮プール
- 8月25日(日) 第3回全日本中学校水泳通信競技大会……………各都道府県一会場
- 8月31日(土)・9月1日(日) 第8回全国勤労者水上競技大会……………鎌倉市営プール
- 〃 〃 第30回関東学生選手権水上競技大会……………神宮プール
- 9月6日(金)・7日(土)・8日(日) 第33回日本学生選手権水上競技大会……………神宮プール
- 9月14日(土)・15日(日) アジア大会飛込予選会……………神宮プール
- 9月22日(土)・23日(日)・24日(月)・25日(火) 第12回国民体育大会水上競技大会…浜松市元城プール

目

次

連盟今後の方針 ..... 小 山 賢之助... 2

第16回オリンピック水上競技報告 ..... 5

F. I. N. A. 関係報告 ..... 安 部 輝太郎... 32

オリンピック大会水上競技総合成績表 (F. I. N. A. 公式記録) ..... 36

競技規則の改正について ..... 42

主なる大学の卒業生と新入生 ..... 51

平泳・バタフライの日本記録について ..... 栗 村 中 丸... 52

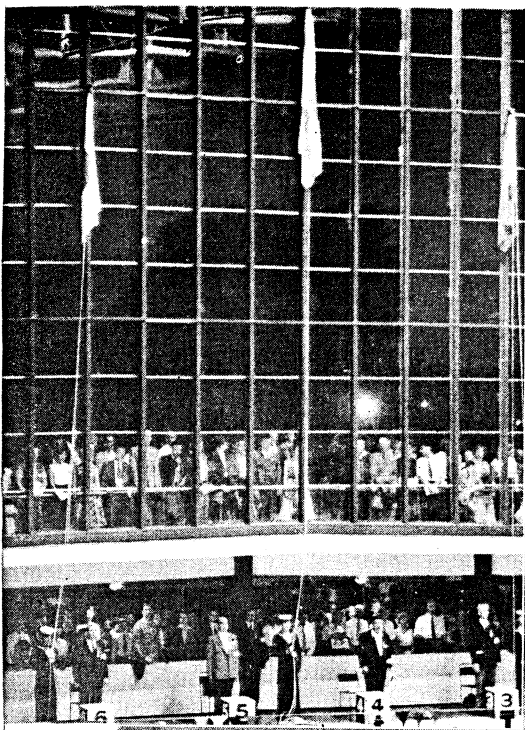
連 盟 日 誌 ..... 52

## 連 盟 新 役 員

専務理事	小山賢之助	会計理事	小出 靖彦				
常務理事	吉村伝次郎	吉田 勝平	勝村 肇	古橋広之進	吹田 大輔	須山 英伍	
	村上 勝芳	太田 光雄	志村 義久	佐藤 宏史	大渡 雅士	菊地 章	
	深谷 俊明	内藤 徹	牧野豊一郎	安部輝太郎	北村久寿雄	竹林地文雄	
	鈴木 朝治	岩佐 道雄	小川 道郎	栗村 中丸	宍道 洋一	串田 正夫	
	安永 弘	宮畑 虎彦	吉本 弘				
理 事	川田 稔	瀬川 政雄	田松長次郎	石井辰五郎	池谷 君夫	伊藤 三郎	
	神山 富雄	高橋庄之助	社本 義信	阿部壮次郎	岡山 四郎	松本 治平	
	高島 秋介	重松 利生	石田 恒信	中田 清一	鎌田 寿夫	鶴田 義行	
	中山 健介	高木 恒夫	飯田 寿平	西本 竜三	井上 融	大友洋太郎	
	森川 武文	柴田 昭士	森谷 智	平田 陽夫	藤沢 有	郷原 英夫	
	谷 貫太郎	西沢 宏	河合 守久	三原 淳雄	広崎格五郎	小山 幸雄	
	藤尾恒九郎	林 康雄	上野徳太郎	多治見祐孝	清水 治	清川 正二	
	阪本 响一	柴原 恒雄	川島 正之	鶴田 武	金子 巍	赤樫 卓爾	
	村山 修一	和田 幸一	小柳 富男	志村文一郎			
監 事	奥野 良	渡辺寛二郎					

200米平泳に古川優勝 吉村2着を占め、日本の伝統を守る

(写真 毎日提供)

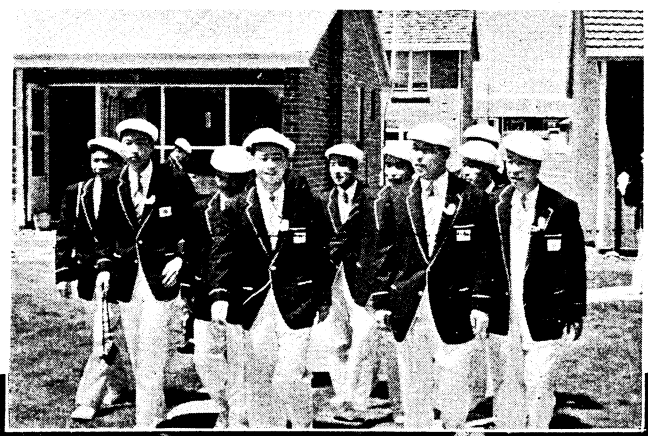




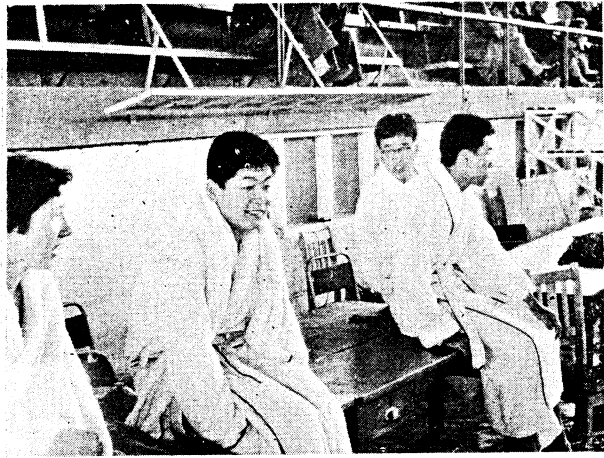


「僕等はもう年をとって駄目だ」と話し合っている 右ボアトー(仏) 左オストランド(米)の両君 (シムスポルトより)

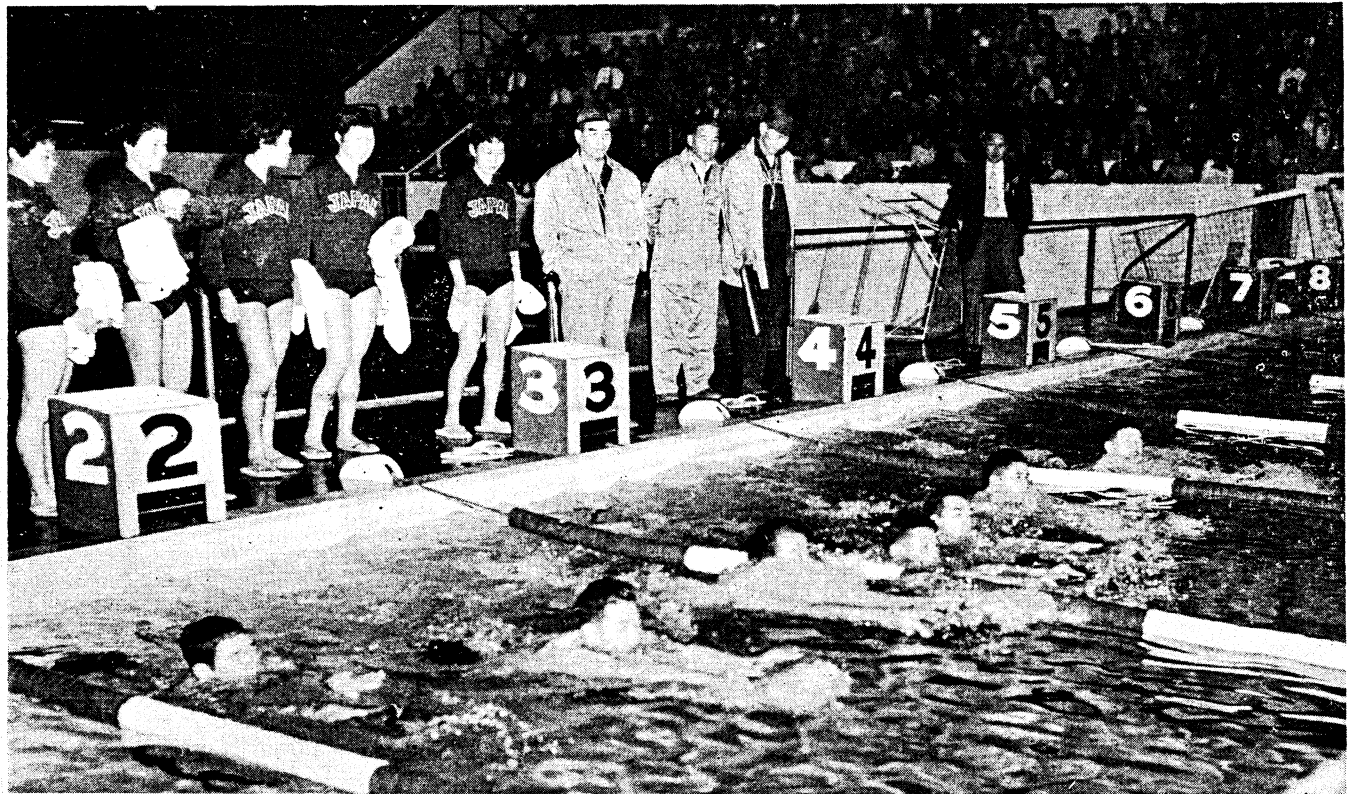
さあ！開会式だ →  
(太田氏撮影)



練習にのぞんで(毎日提供) →



プールの一小景 ↑ (太田氏撮影)  
練習中の男女選手 ↓ (毎日提供)

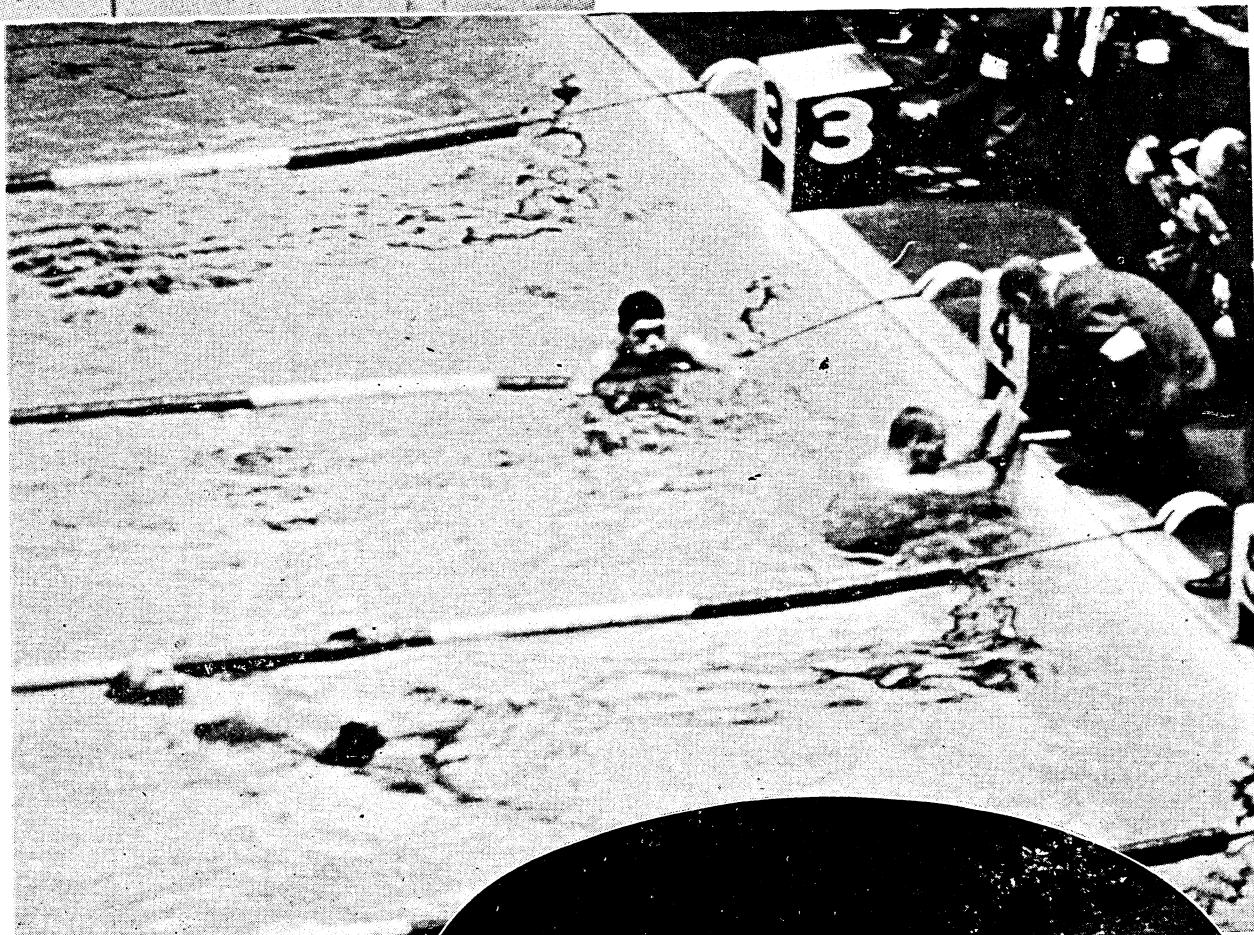




男女百米自由形に全勝した家選手たち  
 左からヘンリックス・フレイザー・デイヴ  
 イット・クラップ・チャップマン・リーチ  
 (シム・スポルトより) ←



↑ キツパス氏と古橋氏 (太田氏撮影)



1500米を終わって ↑  
 3コース 2着の山中  
 4コース 3着のグリーン  
 5コース 1着のローズ  
 (写真は毎日提供)

オリンピック村の小景  
 (太田氏撮影)  
 ↓



← 公園にて  
 根上氏と石本君  
 (太田氏撮影)

ピクニックの  
 ひととき  
 左より和田、  
 太田、小池、  
 根上の各氏  
 (鶴田氏撮影)

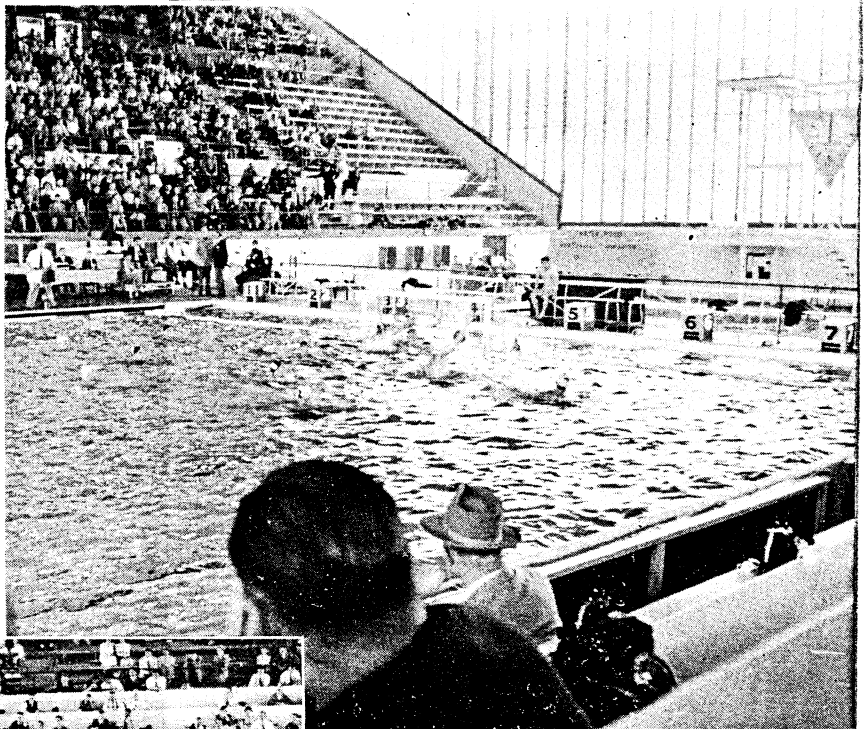
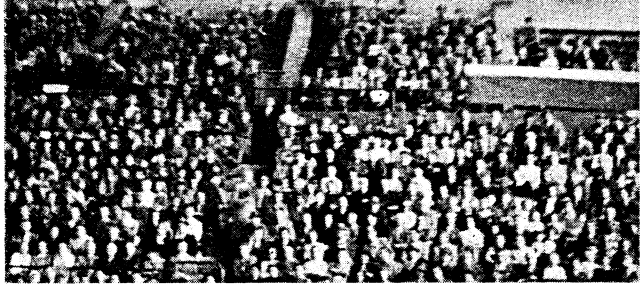
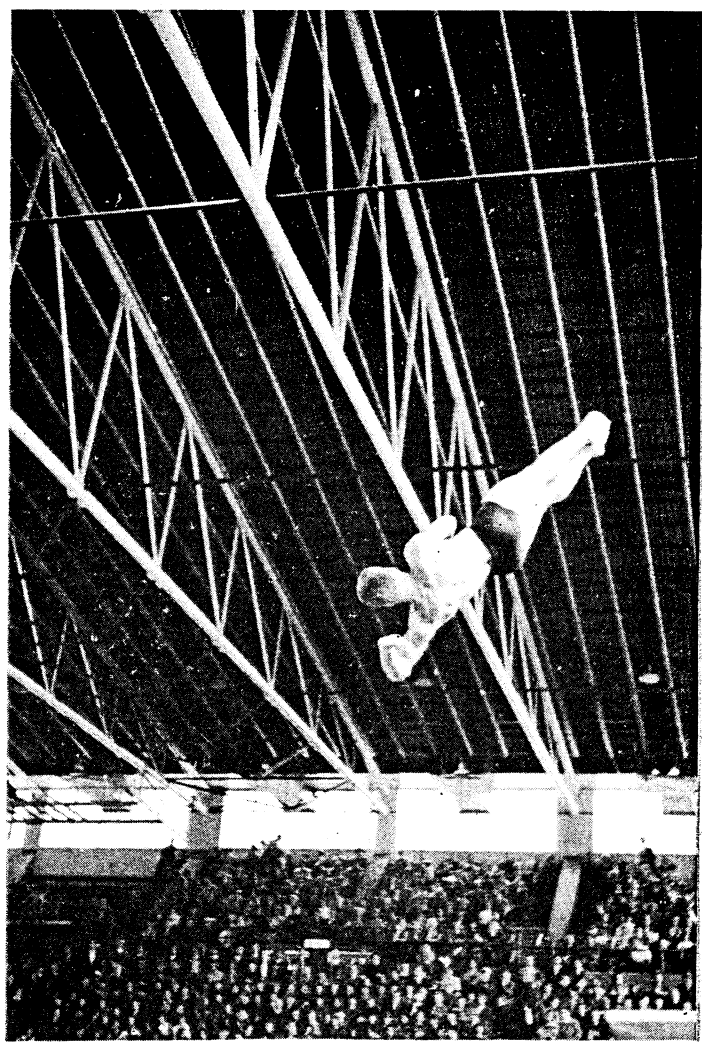
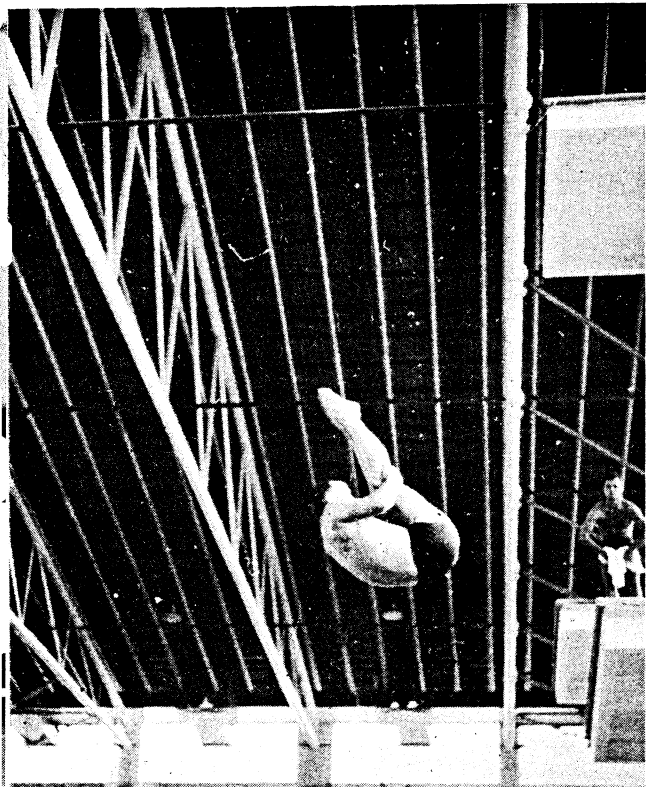




クロトワシー (米)

前1回半2回捻り

(小柳氏撮影)



ハーバー (米)

↑

後踏切前宙返り1回半 (蝦型)

(小柳氏撮影)

ハンガリーチームがマン・ツー・マンで防禦体勢をとっているところ。

ソ連 (黒) 対ハンガリー (白)

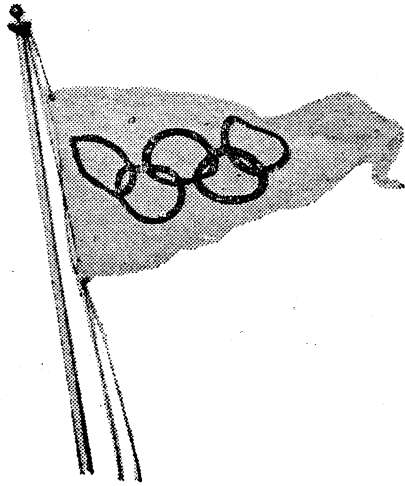
↓

(鶴田氏撮影)



↑ 豪チームがゾーンデフェンスをとっておりサイドから英がシュートしたところ  
英 (白) 対豪 (黒)

(鶴田氏撮影)



# 連盟今後の方針

小山賢之助

## 1. 戦後十年の反省

ローマは一日にして成らずとは言い古るされた言葉であるが、日本の水泳がロサンゼルス、ベルリンの両オリンピックに於いて世界制覇を遂げたその蔭には、大正10年の全国学生、同13年の日本水上競技連盟の結成以来水泳界幾多の先輩の血のにじむ様な努力が有ったのである。

ベルリンのオリンピック大会直後、当時の米国水泳チームの助監督であったステーヴ・フォルシスは米国の一流週刊誌サタデーエブニングポストに一文を投じ「ロサンゼルス、ベルリン両大会において、米国水泳チームが日本のために一敗地にまみれたのは、米国には日本の如き水泳連盟がないからである。全国的に水泳人を組織し水泳人の、水泳人による、水泳人のための組織を持たない米国は未だ水泳を始めていないのも同然であって、この組織を欠く米国が、この組織を持つ日本に敗れるのは当然である」との意見を発表した。

かくて日本の水泳の強さと共に日本水泳連盟の名は世界の水泳人の注目するところとなつて、末弘、田畑、松沢等水連幹部の名は世界に喧伝せらるるに至り、米国を始め各国はN.S.R.に倣ってその組織の充実を計り、水泳の強化に努力を傾注した。

然るに日本は昭和12年日支事変以後飛躍的な進歩は見られなかったのに反し、米国、ソ連、その他の国々は今日においては略日本に匹敵する組織を有するに至つた。又日本は敗戦によって壊滅的打撃を受け、その中においてN.S.R.は他に先駆けて復活の実を挙げ古橋、橋爪の如き泳手を出したのであるが、米国は日本及びソ連の不参加、他の諸国の戦争による打撃の回復不十分なるに乗じ、ロンドン・オリンピックにおいては完全制覇とも言うべき好成績を挙げた。又日本に古橋現わるの報を得る

や之をロサンゼルスに招いてその技術、練習方法等を研究して之を完全に自家薬籠中のものとした。

日本としても其後相当の努力はしたのであるけれどもヘルシンキにおいては、米国の堅塁を抜くこと能わず、メルボルンにおいては、ロンドン以来永年の努力を傾注した豪洲に破れたことは我々の記憶に新しいところである。

栄枯盛衰は世の常である。ましてや勝負の世界は何者にもまして厳しい。そこには一瞬一刻の油断も許されない。我々がロサンゼルス、ベルリンの勝利を得た当時我々の持っていた最善最優のものは既に諸外国によって学びとられたのである。そして豪洲は我々の持つもの以上のものを既に持ったものと見なければならぬ。豪洲に勝つには彼等の持つ凡てのものを学び取ると共に之より優れたものを我々が持たねばならないのである。日本のメルボルンにおける成果は必ずしも失敗ではなかったと思うけれども我々はこの程度を以て満足して居たのでは世界制覇は道遠しの感なきを得ない。

我々は全力を挙げて水泳日本の再建に努力せねばならない。

## 2. 泳手給供源の貧困

然らばロサンゼルス当時と現在とに如何なる差があるか、暫くこの差について考えを回らせて見よう。

過去においては北は北海道、南は台湾に至る迄一流の泳手を供給して居たものである。然るに現在一流選手を輩出する都府県は誠に限られたもので心細い限りである。かつての茨木中学、浜一中その他幾多の名門は影をひそめ、之に代る学校は数少く選手層も薄い。過去における之らの学校の先生方の活躍を今日再現する方々は誠に少くなっている。我々としてはこうした地方の人々の事業を援助しこれらの泳手供給源を培養することこそ日

本水泳連盟の職務である。現在の中学校の生徒が少くとも、かつての宮崎、牧野、小池、北村等のロサンゼルス当時の諸選手が旧制中学3年迄に出した記録を出す迄の訓練をしなければならぬ。豪洲の如きはメルボルンに備え8年前10才位の少年少女を泳がせ英才教育を行ったと伝えられるが、之を訓練する指導者を作ることこそまず第一に着手すべきである。

### 3. 技術的研究

泳法について、かくあるべしという理想型があるか否やについては一概に肯定も否定もできないと思われる。又練習についてもどの方法が最も優れているか一挙に断定することは難しいと思う。又若し泳法及び練習方法に最善のものが仮にあったとしても之を如何に表現し、之をどうして実施するか、周知せしむるか、誠に安易ならざるものがある。然しながらメルボルン・オリンピックに行ったコーチマネージャー等の話を総合すると、現在豪洲選手の持っている自由形背泳等のフォームは現在の処最善のものと考えてもよいと思われる。又練習方法にしても基礎練習は日に8,000米乃至12,000米を泳ぐという事は古橋によって創始せられ、現在のトップスイマーは大体これ位の練習量を持っていると考えられるが、豪洲選手がオリンピックの直前2週間位にとった練習方法は略次の如きものであったと伝えられる。

即ちフランスのスポーツ新聞レキップの紙上に紹介せられた同国のメルボルン水泳チームの選手監督アルバン・ミンビュー氏の報告には次の如きことが記されている。

豪洲選手のオリンピック大会直前の2週間の練習方法は例えばヘンリックスの場合には毎回小休止を挟んで100米を59秒乃至1分で4回繰返して泳ぐ練習をする。次いで充分休んだ後50米を4回泳ぐが前の2回を27秒、後の二回を26秒で泳ぐ練習をした。つまりがむしゃらに泳ぐのではなくペースを覚えるのである。ローズの場合には、毎回充分の休みをとるが400米を4回泳ぎ始め3回は4分48秒位の通常速度で泳ぎ最後の1回を4分44秒で泳ぐ練習をする。次いで50米を16回泳ぐが、平均34秒で泳ぎ最後は27秒で泳ぐ練習をする。即ち相当疲労した時に所望の速度で泳げねばならないのである。ミンビューによればメルボルン・オリンピックの1,500米の決勝の最後の100でローズを追いかけた山中は、ローズの右のごとき練習をしていなかったのではないかと語っている。

こうした練習法その他についてはメルボルン・オリンピックの日本水泳チームの監督の人々によって近々単行本として報告せられると思うのであるが、現在迄に知ら

れた最善の練習方法というものは水連としては十分に之を研究して、地方の泳手養成に当る人々の参考に供しなければならない。

### 4. 其の他の一般重要事項

ローズは肉食主義者であると伝えられるが、肉食と菜食の水泳に及ぼす影響、その他泳法練習法以外のことで泳力向上に役立つものは余すところなく研究をなすべきである。又技術優秀なりとも体力之に伴わされば如何とも致し難い次第であるから、体力の向上充実を計る手段についての研究も亦ゆるがせにはできない。

FINAの規約によれば世界記録のための記録会においてはペースメイキングは禁止せられているが、逆に言って禁止されている丈に記録樹立のためにはペースメイキングが有効であると思われるが、上述の如きヘンリックス、ローズの練習をなす場合にプールにペースメイキングの施設を作ることにも亦必要ではないかと考えられる

先年私がスイスのチューリッヒを訪れた時、市営の50米室内温水プールで泳いだことがあるが、このプールには底のコースラインの代りに一尺おきに電灯が設備されて居り、必要ある場合は機械装置によって、ネオンサインの如く点滅し、例えば100米を1分で泳ぐ場合、泳手が電灯を追って泳げば所期のタイムで泳げる様な装置がしてあった。スイスの如く余り水泳の強くない国においてすら、このようないいプールを持っていることを知って私は強い感銘を受けた。オリンピックに勝たんとするならば日本もこうした施設を持つべきである。

### 5. 組織の確立

立法論として見る時は現在の水連規約は運動団体の規約としては立派なもので簡にし要を得ている。

然し乍ら、過去においてN.S.R.又はこの規約の運用を誤って居った節々が見える。之は戦後の混乱期に逸早く再建をせねばならない水連としては、時間的に経済的に比較的余裕のある限られた少数の人々によって運営せざるを得なかったという事情に基くもので、必らずしも当事者の責任ということではできない。しかも之等有能練達の士が殆んど全部水連経営の第一線から勇退せられた今日、水連の進むべき道は多数の人々の少量の勤労奉仕によって運営できる組織を作ることとせねばならない。通常の勤務先の仕事を通常に勤めながら水連の仕事のできるように組織化するに非れば水連永遠の策は立てられない。アマチュア団体役員のプロ化は厳に排撃せられねばならない。私は代議員会において規約改正を公約した



が、この改正は委員会の組織を整備することと、会長、専務理事、理事会のこの組織のなかに地方の加盟団体の責任と支持を如何なる形式において盛り込むかにある。具体的に言って後者は現在行はれていることを成文化することにある。されば私の所謂規約の改正は委員会に重点が指向せられることとなる。

## 6. 財政の確立

本年は日米大会とかオリンピックというような特別事業がなく、連盟の平年度の会計の見当のつけ易い時である。この年の水連の総支出は700万円、総収入は500万円、差引200万円の赤字を見込まねばならない。この数字は今年の代議員会の承認を経た数字であって、連盟会計の在るが儘の姿である。この赤字200万円の埋め方について色々な無理が生じたことは連盟の過去の歴史の証明するところである。さればここに最低2,500万円ぐらいの財源を得て、この経常赤字を何の心配もなく支出できるならば水連の基礎磐石というべきである。

水連の顧問以下の関係各位によってこれ位の財源を得て、財団法人の認可が得られることが望ましい。之は私

の単なる夢に過ぎないが、なんとかしてこれを実現する様に努力したい。又連盟会計をガラス張りにして事業の重要度に応じた支出を考えねばならない。顧問以下本部各役員を始め、加盟団体の役員諸兄、並に全国の水泳人の皆様の御協力を切に希望してやまない。

## 7. 結 語

一日にして成らざるは豈にローマのみではない。ロサンゼルス、ベルリンの偉業の蔭には日本の水泳人の10数年に亘る努力があった。豪洲のメルボルン大会の制覇にはロンドン大会以来8年の苦節があったのである。来るべきローマ大会への水連の準備は、組織の確立、科学的研究の達成、財政の確立、中央地方の相互連絡の強化等を真剣に検討してその実を挙げなければならない。言誠に抽象的であるが之を具体化することこそ水連今後の課題である。

日本における凡ての水泳人、水泳に関心を寄せらるる人々の御協力御支援を切に乞い願う次第である。

(32. 4. 30 稿)

(35頁よりの続き)

	ゲ ッ ツ	(南巫)
c) 国際競泳委員任命		
議 長	ジョンソン	(米)
副 議 長	グランヂ	(濠)
名誉主事	清 川	(日)
	ドシュマン	(仏)
	ベ ッ ケ ン	(伯)
	モ レ ラ	(巫)
	ルンストロム	(瑞)
	キタイエフ	(露)
	ブ レ イ ク	(南巫)
	ハ ウ ク	(加)
d) 国際シンクロ委員任命		
議 長	アンブルスト	(和)
名誉主事	オルスン	(米)
	串 田	(日)

の他は各国に問い合せて決めることとした。

- e) I. O. C. の代表は会長と名誉主事に決めた。
- f) 世界記録 長水路となったためその基準を決める要あり。競泳委員会の案を下記小委員会で検討決定することとした。

サルフォース  
安 部  
バ イ ヤ ー

尚長水路は50米又は55ヤードだけとなったので100碼を廃止して110碼とし、全部ゴールは壁面タッチによることを決定した。ジョンソンは一生懸命反対したけれども、これで米国の伝統的種目100碼は消滅して了った。

又1760碼は1650碼に改められた。

- g) 次回理事会は大体1957年6月初旬、リオデジヤネイロで開くこととしたが、これはブラジル水連60年祭があって各国一流水球チームを招待する競技会があるので、F I N A 理事をも招待するという話なのでその招待を確認して最終決定することとなった。若しリオデジヤネイロでなければユーゴのセグレーブで、8月に行われる国際水球大会を機に其処で理事会を開くことになった。

- 9) 12月9日 世界記録小委員会開催、別紙の如く標準を決定更に必要あれば訂正の上公表することとした。

以 上

# 第16回 オリンピック水上競技報告

総監督 小池 礼三 女子監督 根上 博  
競泳コーチ 太田 光雄 飛込コーチ 小柳 富男  
マネージャー 古橋 広之進 水球視察員 鷗 田 武

## 本競技までの練習

### 1. 代表団の強化

9月10日の学生選手権を最後にして代表選手が全員決定当日発表された。

短距離 谷 詔 (早大OB)  
古賀 学 (早大)  
鈴木 弘 (日大OB)  
中長距離 野田 芳郎 (明大)  
野々下 耕嗣 (中大)  
青木 行義 (日大)  
山中 毅 (輪島高)  
八木 清三郎 (日大)  
平泳 古川 勝 (日大)  
吉村 昌弘 (日大)  
バタフライ 石本 隆 (日大)  
背泳 長谷 景治 (早大)  
二宮 英雄 (慶大)  
富田 一雄 (三潞高)  
800リレー要員  
清水 健 (立大)  
古川 徹 (宮之城高)

(以上16名)

シーズンオフのオリンピック参加のため、新設された別府市温泉プールに合宿を求めて10月10日東京を発って11日別府市の合宿所、三銀荘に入る。

別府市営プールは室内50メートル9コースの立派なプールで、水温は豊富な温泉を利用してあるために、つねに24度のオリンピック・プールと同じ水温を容易に調整できる優秀なものである。

宿舎は三井銀行の特別の厚意により寮を無償で借用、プールより歩いて3分位の静かな住宅地にある独立家屋で、実にいい環境の中で合宿できた。

食事は寮の管理人のほかに料理人を雇って献立を研

究、練習の強弱によってそのカロリー量を計算して1日約5,000カロリーを摂取するようにした。

練習はシーズンオフのため、事前に医学方面からの参考(資料)意見を伺い、そのうえにコーチング・スタッフの研究によって意見をまとめて実施計画を定めた。

合宿練習は出発(日本出発11月14日)前の1ヵ月間とし、選手達はこの合宿に入る前の約1ヵ月間は各自休養と水に浸ることによって筋肉が休止状態にならないよう注意しておいた。しかしこの間の天候は不順であって実際には各選手とも本当に水にちょっと入る程度になってしまっ、合宿に集合した際は各自の夏の最盛期における体重よりも一貫匁以上肥えている状況であった。

合宿練習は計画通り1ヵ月を3分して、前の10日間を準備期間、中の10日を強化練習と出場種目の練習、終りの10日間を調整というように分割して行った。

しかし実際には前記の通り各選手とも、気候が秋で食欲、睡眠ともに旺盛のため相当の強度の練習にも関わらず、体重がオーバー気味で、調子の戻るのが遅れたためスケジュールの変更をして行った。

◎合宿における日課。

起床	7.00	直ちに10分間体操
朝食	8.00	
午前練習	9.30	
中食	12.00	
休養		
午後練習	3.30	
	6.00	
夕食	7.00	
就寝	9.30	

### 2. 第1期練習(10月12日~10月21日)

シーズンが終ってからの水に対する感覚が薄れているので、この期間に取戻すべくあまりきばらないで長い距離をシッカリ泳ぐことに主眼をおいて練習を開始する。

泳ぎはじめてから3日間位はやはり皆相当ギコチない泳ぎをしていた。この間は1日、午前、午後とも5,000

メートル位泳いだ。

4日目頃からは水にも慣れて泳ぎも自分のものを取戻して来た。天候も秋とはいえ、水泳にはあまり適した時季でないので、練習場は申し分ないが、風邪、耳の故障など相續いて出て来たが大したことはない。

この期間には特に東京から吉田勝平氏に来て貰って固くなった筋肉をほぐす意味からも朝と、各練習の前に約15分から20分間位の相当きつい体操を取入れた。このため泳ぎと体操で筋肉の痛みを訴える者が多かったが、調子を戻すためにも相当有効であった。

食事は皆非常に旺盛なる食欲を示し、毎日少しずつ体重が増加して行く。

この頃から腕のみの練習をも入れて行く、6日目から泳ぎに多少のスピードを加えて行くためにダッシュを少し行った。あまりスプリントのある泳ぎは見られなかったが、泳ぎは注意通り大きな泳ぎをしているので、大いに希望が持てた。

練習の量を少しずつ増して1日6,000メートル位になる。参考記録も計時してみると山中、青木、谷、石本等、割合好調、山中1500 18:45。

各地からも練習参観、激励等受けていよいよ練習も本格化して行くとともに、選手達もオリンピック選手であるという自覚に基づいて活気をおびた練習態度となる。

この期の終り頃には、一応調子は出揃ったようであるが、長距離の八木、野々下は出遅れ、古賀、鈴木、古川(勝)のベテラン連中は慎重に調子を調整しているといった感じ。

22日の午後には第1期練習の成果をみるためにレース・コースを計時する。

短距離	鈴木	100m	58.6
	谷	"	57.3
	古賀	"	57.8
	古川(徹)	200m	2:15.6
平泳	古川(勝)	200m	2:40.1
	吉村	"	2:43.0
バタフライ	石本	"	2:21.6
背泳	長谷	100m	1:08.4
	富田	"	1:07.4
	二宮	"	1:09.2
中距離	野々下	400m	4:47.0
	野田		4:50.0
	山中	1000m	12:16.0(途中800: 9.44.1)
	青木		12:34.7
	八木		13:06.9

(清水病気にて休養)

この結果の通り大体自己の最高に近い処まで戻ってき

た。この計時の終了後予定通り別府市郊外の湯布院という処へ一泊の小旅行をする。今まで10日間練習練習で明暮れていたもので、選手達は開放された善びに今までの疲れも消えたようで23日午後合宿に帰る。

### 3. 第2期練習(10月24日→11月7日)(15日間)

この期間も最初の予定では10日間であったが、外電によって伝えられるように外国選手の好記録に刺戟されて、さらに高い記録を要求されたこと、まだ調子が出遅れている者もあったので、予定を変更して15日間の練習期間となった。この期間の特色としては、インターバル練習に重点をおいて猛練習を行ったことと、3日間練習しては1日(或いは状況によって半日)の休養を採り入れたことである。

体重の方は栄養もよく睡眠もよくとれるので肥えたままで一応定着した模様のカーブを画いている。

気候も大分低くなって来て日中は割合暖いが朝晩ぐっと冷えるようになって、気分的には最良のコンディションとまでいかないが、プールの中は水温は依然として24°に調節してあるので、練習に入っしまえば夏と変りない。

調子が出遅れていた長谷、野々下あたりが後半相当泳げるようになってきたので、チームとしての調子は揃ってきた。しかし長距離の八木がまだ本調子でない。山中はずっと好調で順調にタイムも伸びてきて400mを4分34秒で泳ぐようになり400mへの自信はいよいよ深まってきたが、1500mの方はペースの点では未だしの感がある。

29日いよいよ個人エントリー送付の日が来たので、中間で疲労の最中であつたが、レース・コースの計時をする。

短距離	谷	100m	56.9
	鈴木	"	58.7
	古賀	"	57.7
	清水	200m	2:13.1
	古川(徹)	"	2:17.4
中距離	野田	300m	3:32.8
	野々下	"	3:35.2
	山中	800m	9:38.3
	八木	"	10:19.6
バタフライ	石本	200m	2:22.1
平泳	古川(勝)	"	2:38.2
背泳	長谷	100m	1:07.9
	二宮		1:09.2
	富田		1:07.1

(青木、吉村、耳の故障で休養)

この結果、個人エントリーを次のごとく定める。

100m 自由形	鈴木 弘 谷 訥 古賀 学
400m 自由形	山中 毅 野田 芳郎 野々下 耕嗣
1,500m 自由形	山中 毅 青木 行義 八木 清三郎
100m 背 泳	長谷 景治 富田 一雄 二宮 英雄
200m 平 泳	古川 勝 吉村 昌弘
200m バタフライ	石本 隆
800 リレーメンバー	清水 健 古川 徹

11月1日から今まで合宿の食事は洋食中心であったが、ここらで気分転換の意味で和食に変える。練習も距離を少し短かくしてスピード中心にするために、いよいよインターバルを短かくして強い練習にして行ったので、大分疲労してきた様子。

#### 11月6日 レースコース計時

短 距 離	鈴木	100m	57.7
	谷	"	56.6
	古賀	"	57.5
	古川(徹)	200m	2:12.8
中 距 離	山中	400m	4:32.8
	野田	"	4:47.6
	野々下	"	4:46.6
	八木	1000m	12:44.1
	青木	"	12:36.7
背 泳	長谷	100m	1:06.6
	富田	"	1:06.6
	二宮	"	1:08.6
平 泳	古川(勝)	200m	2:37.2
	吉村	200m	2:40.2

もう一息というところまで来たが、オリンピックの入賞を目標にして、さらに頑張る。

#### 4. 第3期練習(11月9~11日)

予定を変更して調整期間を少なくしたのは、別府を出発してメルボルンに到着する間水に入られない期間が約5日間あるので、ぎりぎりまで泳ぐために変更した。

練習が軽くなるともう練習が終ったような気になるので、これを充分注意しながらぐっと練習を落して飛行機旅行による疲労と練習の疲労が蓄積されないようにした

この期間で山中の1500m総仕上のため10日ペース・メーカーを付けて計時し、ついに18分17秒8の好記録を物にし、1500mに対してもローズ、フリーと戦える足がかりを握ったことは大きな収穫であった。

以上3期に分けて強化合宿を行い、各種の有利な環境に、恵まれてじっくりと落付いた練習ができ、メルボルンで大会の空気の中に入れば、持てる力を充分発揮できる自信を持てるようになって、11日午後の船で別府に別れを告げた。

11月15日夜9時頃メルボルンに到着して直ちに宿舎に入り、16日は晩プール見学のみで泳ぎがなかった。

17日からいよいよメルボルンでの最後の仕上の練習に入る。

練習プールは先発した古橋氏の定めて呉れたメルボルン大学の25mプール(室内)を予備として、大会本部の練習用プールであるニュー・オリンピック・プールとリッチモンド・プールの3本建で練習できたので、他の外国選手より練習状況は有利だった。

しかし練習時間が割当てで非常に少ないので、その練習の割振には相当の苦勞をした。

11月29日の最初のレースまでには大体13日間あるので、22日の入場式を境にして、前半をプールと水に慣れることに主眼をおき、23日から順次調子を上げて行ってそのままレースに入るというスケジュールのもとに実施した。

前半は時間の都合を見て主に長い距離を泳いで泳ぎを取戻すような練習をした。選手は約5日間泳いでおらず、最初の2日間位は泳ぎにくいようであったが3日目頃より直ぐ別府合宿位の調子には戻ったが、練習も連日つめかける大観衆のために、各選手ともに多少あがり気味である。時々計時するが調子は上々、ただし天候が不順のため、なかなか飛躍的な好調さにはならない。

22日の入場式は練習を休んで参加したが、この入場式では各人も非常に疲労が見られた。

23日からはレースが9日間にわたって行われるので、その順に従って重点的な練習を行い、後半のレースになる平泳、長距離陣は長い距離を、短距離、背泳、バタは早くトップ・コンディションにするべく、短かい距離にして調子を盛り上げて行った。(太田記)

## 競技会の経過

### 1. 100米自由形

ボートやマラソンなどの健斗はあったとはいえ、陸上競技の全面的な不振は、後半にレースを控えているわれわれにとってはあんまり良い材料ではなかった。それで

も陸上その他前半の不振を、体操、レスリング、水泳などでなんとか取り戻そうという決意でレースに臨んだのである。最初100メートルの自由形はオリンピック競泳のトップのレースであるだけに、たとえ予選とはいえ各選手とも非常にあがっていた様子であった。それでも日本の3選手は無事予選を通過したが、この時の予選でオーストラリアのヘンリックス選手の見せた余裕のある泳ぎ振りは、決勝を待たずして圧倒的な強みを思わせるに十分であった。準決勝に臨む日本の選手の調子は信用がおけるのは谷1人というところで、古賀は調子整わず、鈴木もすでに峠を越していたが、それでも多くの希望をもって少なくとも2人、よく行けば3人とも決勝に進出せしめようと思っていたが、ふたを開けてみると、谷1人のみ決勝に残るという結果になった。悪い場合はこの結果も止むを得ないと思っただけのもの、完全に出鼻をくじかれたことになった。この分なら決勝も多くは期待できないが、それだけに気を楽しんでやれば谷に56秒台も望めるからと思って、決勝に臨んだが、その結果は谷が第7位に終わった。文字通りオーストラリア勢に圧倒されたという以外に表現の仕方を見当らない。帰らないことではあるが、古賀がトップ・コンディションで谷と2人決勝に残り、アメリカの誰かがもう少し強く、もう少しオーストラリアに肉迫していたならば、あれほどひどい負け方はなかったと思うが、ここではオーストラリアの断然たる強さに敬意を表しておく以外にはない。

100メートルがだめだとなると、800メートル・リレーのメンバー4人のうち3人を短距離から予定していたので、そのメンバー構成に大きな支障を来し、その成果にも期待がかけられなくなってくるのである。

## 2. 200米 バタフライ

100メートル自由形と800メートル・リレーの間に200メートルバタフライのレースがあるので、ここで石本が優勝でもすればまた気分転換もできるだろうと思っていたが、バタフライの予選を通じて思ったことは、アメリカのヨルジックがはつきりコンスタントな強さを有していること、ハンガリーのツンベックが予想以上の強さを持っていることであった。石本としてはヨルジックに対する作戦は最初から飛び出して果敢なレースを挑む以外に方法はなく、本人もよくそのことを理解していて、まず最初の50をリードし100メートルでは肩一つ負け150メートルにかけてヨルジックを追い上げ175過ぎて刀折れ矢尽きたというレース経過で負けたが、当時の石本としてはよくあれだけの思いきったレースをやったと感心させられた一か八かの試合をやったそれが不成功に終わったにしては良く3位のツンベックをタッチで押えて2位になれたラッキーといわねばなるまい。日本を発つ前に

船酔いに端を発し、盲腸の疑いまであって絶食状態を2日も続け、それから30時間も飛行機に乗ってメルボルンに行った石本としては、あまりにもコンディションが悪る過ぎた。

## 3. 400米自由形と800米リレー

次の800メートル・リレーは400メートルのフラットレースと関連があって、予選を誰に泳がせるかに問題があったが、たとえ予選でもはじめてのレースはどうしてもあがるので400メートルのそれを予防するため、山中と野々下はリレーの予選を泳がせることに決定し、あとは谷とも1人誰かと苦心したが、一応鈴木を起用してみた。この結果400の山中、野々下を泳がせたことは、あとのレースのためにも成功であったが、鈴木が決勝に使えないことが判ったので、決勝にはチームだけの予選を行い、結局、古賀のトップにいちらの希望をかけることにした結果は、意外にも4着であった。3着以下に落ちることは考えず、誰かが良く泳げばアメリカと2位争いも考えていたのであるが、全く意外であった。結果から見ても仕方ないが、いやな後味は山中が200メートルをフラットレースに直して2分8秒位かかっていることである当時の山中としては2分5秒台で泳いでも不思議はなく、それで泳げば3位は間違いなかったが、リレーが4位になったことよりも、その調子で400をいかにするかということが問題になってきた。へキ頭の100メートルの惨敗以来なんとかぼん回をねらっている日本チームにとって、山中のリレーにおける不調は全く暗たんなるものであった。それでも本人には2分6秒内のラップタイムを思い込ませ、また一方、太田コーチが一時的に見失った泳ぎを思い出させることに成功したので、野々下の急に上げてきた好調と相俟って、400メートルのレースは日本水泳チームによく活気をみなぎらせる模様を呈してきた。レースはまずグリーンが飛び出し山中これに続き、ローズは悠々迫らず機を見ており、200メートルを2分11秒で過ぎ、250より300にかけてローズは泳ぎに力を入れ300で山中をはなし、そのまま400メートルまでの間にジリジリ差を開き優勝した。山中もグリーンを押えの日本新記録で堂々2位になった。山中の力泳は惜しくも1位にはなれなかったが、われわれにはよくやってくれたという満足感を与えてくれた。それにも増して、あのローズの沈着さ、スタミナの配合、スプリントの良さ、泳ぎ全体の良さ、まさに絶品といわねばならない。山中の2位を残念がるよりローズの優勝を贅えたくなった一戦ではあった。沈み勝ちな水泳チームにも2位ではあったが、今後大いにやるその気分をこのレースが与えてくれたことは確かである。一般には忘れ勝ちであるが、ここで特に注意を向けたいことは、野々下が



よく世界の強豪（ボトウ、オストランド、ダンカン、ワードロップ、ウールシー等）を破って決勝に進出して7位になったことは、地味な存在であったが、大いに賞賛に値する。

#### 4. 100米 背 泳

オリンピックのレースは期間が長すぎるのが選手には気の毒である。水泳は後半にあるので、そのまたあとにレースがある者などはレースに対して待ちくたびれることがあり、また心理的に参ってしまうこともある。400メートルで一応氣勢が上ったとしたら、そのまま矢継ぎ早に次のレースがあれば良いのだが、大体1日1種目目で400の次は日本の最も不得手とする背泳で、この種目は良くて決勝進出、悪くて準決落ちと思っていたが、結果は長谷、富田とも1分6秒5の同タイムが4人で、うち1人が決勝に進み、日本2人は準決で諦めなければならなかった。今一段階進歩していれば、決勝でも良いところに行けたが残念だった。

#### 5. 200米 平 泳

いよいよ待望の200メートル平泳であるが、実のところレース前の古川の調子はあんまり良くなかった。本人は勿論のこと私達も、他の選手も絶対的と思っていた200メートル平泳すら駄目かと不安を持ったことは確かに一時はあった。ただ吉村が徐に調子を上げてきたので古川に万一のことがあってもひょっとすると吉村がフォローしてくれるのではないかとの希望はあった。予選をやってみるとデンマークのグライエが強かったが、古川はこれを押えて記録も2分36秒1で私達が考えていたより良い記録で、この分なら心配は要らないという状態になり、本人も決勝になればまだ頑張れるという自信が生れてきたようであった。吉村も2分38秒合で調子が良く、平泳2人来たことは成功だったことをはっきり物語っていた。決勝では古川が勝つことに対しての不安は既に消えた。ただ予選で調子良く泳いだグライエがオーバーペースで失敗したのに反し、ソ連のユニセフが非常に良く最後まで古川に追っていたが、これもレース経過としては古川がやがて引き離すことは明らかなような泳ぎ振りで150過ぎからはっきり古川の勝は決り、ただゴールの時コースを非常に曲ったことだけが唯一の心配だった吉村もラストほんとに少しのところを驚異的に頑張る、それまで明らかに2位にいたユニセフを負かし、1位、2位を確保したことは平泳成功の価値を非常に高めた。少なくとも一つは金メダルをと、それをやってくれたのであるから嬉しいことではあったが、それよりも先にきた気持は、古川が長い間優勝候補であって、もしこれが駄目だったらと思い、本人のためにまあ良かった。これでやれやれという気持が先に来た。本人も日の丸を仰い

だ時より、ゴールして勝てたと思った時が一番うれしかったといっていたそうだが、その気持に偽りは無いと思う。なんとしても一つだけは金メダルが取れた、このことによって後の1,500メートルに何か良く作用してくれればと思っても見た。

#### 6. 1500米 自由形

1,500メートルは予選において400メートルのときと同様、ローズ、山中と一緒に泳ぎ、記録は18分4秒という好記録を出したが、そのさきグリーンが17分51秒合の世界記録を出したので、各国ともオーストラリアはローズ、日本は山中、アメリカはグリーンとそれぞれ優勝を決めていたようであった。まずグリーン先頭に立ち山中がこれに続く、ローズは今までのようにそれほど水をあけないで、びたり腰の辺についていつもより用心深いレース振りだった。山中としては必ずグリーンから離れず、これにつくという作戦、戦前の作戦としてはこれ以外考えられなかった。しかし結果的にはこれが命取りになった。800メートルまでは1分12秒平均のペースが、グリーンが予選の時とは反対にこの時からペースが1分13秒に落ち、それが1,000まで200メートル続いたのである。ローズは丁度800メートルのところまで前者2人に追いついたところで、前の2人が俄かにペースが落ちたので、ここで労せずしてローズは約2身長位前に出ることができた。これが貴重なる優勝への幸運であった。山中は1,200から1,300の間にグリーンをようやく振り離れたが、その時は既に大分前にローズがいた、あと200メートルでローズを追込み、特にラストの追込みは物凄く、誰一人座って見ているものはなかった。しかしどんなことをしても100の間では抜くことのできないだけ、2人の間にはなれ過ぎていた。山中は、もっと早く気がついていれば抜けたと語っていたが、それはもっと早くグリーンを振り切ることが必要であった。ローズの1,500メートルの優勝は400のそれよりは遙かにラッキーといわねばならない。あれだけの上り調子にありながら、優勝できなかった山中は、誠に残念だったが、しかし、前のあの好記録を出しながら3位に甘んじなければならなかったグリーンのこと考えなくてはならない。大げさでなく水泳においてはまさに世紀の大レースであった。今度のオリンピックは、陸上の10,000におけるグーツ・ピリーの接戦に始まり、ローズ、山中の一騎打に終わったといわれる位のものであって、メルボルンは勿論、オーストラリア全土と日本全部を湧かした大レースであった。山中のかげにかくれてこれも忘れられ勝ちの存在になっている青木の7位は、野々下とともに手薄とされていた日本の長距離陣のために良く決勝に進出して7位を占めたと思う。これを若い新人なり中堅のものが

やったならそれほどのこともないが、青木はこの前のオリンピックにも出場し、もはや盛りを過ぎたと思われていたが、たゆまない努力の結果、本人の最高記録で決勝に進出している。中長距離でヘルシンキのオリンピックに出て今度も決勝に残ったのは、ただフランスのポトウと日本の青木だけであった。

## 7. 競技会の運営

オリンピックにおける水泳競技の運営はマネージングコミティ（運営委員会）によって全て運営されることになっており、この運営委員のメンバーは、即ちFINA（国際水泳連盟）の理事がそのまま運営委員会になるとしてもよい位である。このFINAの理事の中では日本の安部輝太郎さんなどが一番水泳に関してくわしい知識をもっている程度で、その他の理事はあんまり水泳にくわしいとは思えないし、あまりにも年寄りが多過ぎるようだった。問題がない時はそれでも良いが、今度のようにドイツの平泳選手クラインが泳法上の見解で失格になったりするようになる。今少し水泳に対するオーソリティーがもっと沢山このメンバーの中に入っている必要がある。この問題は遂にFINAの副会長であった、アメリカのリッター氏の脱退にまで発展したのであるが、これなど水泳にくわしい人がいなさ過ぎることを暴露したようなものである。

豪洲における地元の役員は実によく立回っていた。時にわれわれにはあんまり役に忠実であるため、融通が利かなくて不愉快だとする方の感じ方の相違で、あとから考えるとそれ位一生懸命やっていたということになると思う。

ただ、これは競技会の前、或いは開催中の練習時間と場所のことであるが、この練習場所と時間が前日の夕方にならなければ決定しないので、われわれが明日の練習スケジュールを組むために非常に不便を感じた。これなどはそれほど大した仕事ではないと思われるので、誰かが専属でやれば容易にできるのにと考えたことがある。

競技会当時の選手の召集その他は割合スムーズに運行されていたが、ただレースが終わったあと選手がインタビュールームに連れて行かれてその帰りが30分も、長い時は1時間もかかることは迷惑だった。外国の選手はそれだけで終るから良いが、日本の選手はその後また日本人記者のために時間を作らなければならないので、この点レースが終ってから村に引上げるのが3時間もかかることがあった。

競技会の時にチーム役員の席がスタート台の斜め後に設けられていたことは不合理であった。ルールで一応抗議が認められているにもかかわらず、全ての泳者を完全に

見ることができないようなところに設けちことは事実上抗議を認めないにも等しいことである。

## 8. 新しい器具用具施設

水泳にはそれほど多くの器具、用具は必要とされないが、大きな意味でプールそのものがそれに該当するとして、今度のプールはロンドン大会以来2度目の室内プールである。プールそのものは立派にできていたが、なんといっても室内プールの必然性としてスペースが充分なかったことは事実である。このためスタート台が非常に狭く混雑していた。競泳プールと飛込プールの水面が異なっていたことは、室内プールであるだけに一寸奇異な感じを与えていた。室内プールのためどうしても観客席が少なく、収容人員5,500では日本などではとうてい納得できない数字であると思う。水泳の切符が少なく入手が難かしいので試合前の練習風景の見物に2シリングの入場料を取っても、なお満員になっていたなんて、今度のオリンピックが初めてである。プールの水温は24度は適当に思えた。これが25度でも良いと思う。コースロープが太いので、波が立たないので良かった。しかしターンのところではねり返りの波がきたのは、両方良いというわけに行かないが、これはオーバーフォローによって調節できると思う。

## 9. 大会を顧みて

今度のオリンピックの水泳を顧みて、先ずあげなければならぬことは、オーストラリアの水泳が圧倒的に強かったことである。男子競泳だけなら、かつて日本もロスアンゼルスで相当の成績を収めたが、今度のオーストラリアは女子を含めて強かったので、これは未だかつてどこの国も成し得なかった成功を収めたことになる。この成果の原因はどこにあるかということ、ヘルシンキオリンピックが終ったあとオーストラリアの水泳は次のオリンピックが自国のメルボルンで行われる機会を十分に活かして、各州ごとの組織を全国組織にまとめあげ、あらゆる焦点を今度のオリンピックに集中したこと、それから必然か偶然かは知らないが、良い素質をもった選手が今度のオリンピックの前に沢山でてきたことである。そしてそれらの選手のはげしいトレーニングが長期にわたって施され、それが殆んど無駄なく効果を発揮したということに他ならないと思う。オーストラリアの練習方法で参考にしなければならないことは、インターバル方法とか他にもあると思うが、一番大きな日本と違った点は3カ月も練習をする間に日本ではタイムを採る程度のもので対して、オーストラリアは所々に実際のレースを織り交ぜて練習の効果を発揮させると同時に、それを実

戦的に身につけさせるという方法をとったことである。地元の利ということも確かにあったことと思うが、あらゆる点でオリンピックに対する準備が世界のどの国にも優っていたことである。ある外国のコーチが「寒くて駄目だからローマでやり直した」なんていっていたが、これは負惜しみて、オーストラリアは強くして勝ったと思う。少なくとも日本はこの前提で今後を準備しなければならない。それにはターンを全面的にクイックターンにすること、インターバル練習方法をもっと研究して、これを日本式に消化して取り入れること、次のローマにおいて必要な年齢層を逆算してそれに該当するものをはっきり今後の強化対象にして徹底的にこれらの強化を計ることが最少限必要である。

### 10. 現地当該団体との接触状況

オーストラリア水泳連盟とは特にこれといって交渉を持ったことはない。ただ個人的には清川君、古橋君に度々この国を訪れているので、いろんな話ははずんだようである。その他は非公式ではあったが、オーストラリアのプロコーチを日本に招んでくれとか、或いは日米豪の3国対抗の話なども出たようだが、その後具体的に進んでいないようである。

I. F. いわゆる水泳の場合はF I N Aの総会であるが、これはオリンピックの前後2回会合が持たれたそのうちわれわれにとって主なものは、オリンピック後の総会における決議事項で、その主なものは平泳における潜水泳法の禁止である。その他にも水球、飛込のルール相当大巾な改正があった。人事の方では日本代表の安部理事がF I N Aの副会長に選ばれた。潜水泳法の禁止に関しては日本は別にこれといって態度をはっきりさせなかった。これは採用されなかったが、ハンガリーのライキ氏の発言した平泳はバタフライと分離して間もないので、今少し次のオリンピックまで静観するのがよいではないかといっていたが、私達もこの意見が潜水泳法に関する最も権威のある意見のように思えた。日本としては潜水泳法が禁止されても、それによって外国に対して不利の立場に立たされるほどということはなく、むしろ力よりも技術を必要とするオーソドックスのみの方が有利と考えられるふしもある。ただここ意外なのは、以前潜水泳法がない時でも禁止されていなかったスタートとターンの直後における潜水に対して、水中においては1回だけ許されるという制限が付せられることである。これはスタート技術の発達を阻害するとともにスピードを身上とする水泳競技からスピード感をそぐことになって平泳競技の興味は減殺されることは確かである。日本に

とって主な決議事項は以上である。今後の問題としては、日本から提案しておいたものは、前にも述べたようにオリンピックにおける運営委員会にもっと水泳の権威者を入れること、平泳の反則に対する見解をはっきりすること、チーム役員の席を全般的に水泳が見れる良い席に設けることなどの提案をしておいた。これは今後も書面をもって継続的にその他の提案と同時に進行する必要がある。(小池記)

## 男子競泳

### 競技の経過

[11月29日(木)]

100m 自由形(予選) 14.00

(2組)

4コース 古賀学 1着 57.7

(3組)

4コース 鈴木弘 3着 58.4

(4組)

6コース 谷 詔 2着 57.1

3名とも予選としてはまあまあの記録で準決勝に進出することができたが、豪州のヘンリックス、デヴィット、チャプマンの3人は群を抜いて強いようで余程頑張らないと3位以内はむづかしく思われた。谷が元気。

100m 自由形 準決勝 20.35

(1組)

3着 谷 詔 57.4

5着 鈴木弘 58.0

(2組)

6着 古賀学 59.1

準決勝では皆力一杯泳いで予想通りオーストラリア勢が圧倒的に強く1組の谷、鈴木ともスタートから遅れ、ターンでますます開かれてしまい、谷はかろうじて決勝進出、鈴木は落選2組の古賀も重い泳ぎで6着になり落選した。

日本選手は実力を持ちながら、大会の空気へのまれたか、試合から遠ざかっていたためか、なんとなく重々しい泳ぎである。

[11月30日(金)]

200m バタフライ 予選 14.00

(2組)

5コース 石本隆 1着 2:24.2

予選1組のヨルシク(アメリカ)が2:18.6の世界新を出した後2組で期待されたが、石本は出発以来体の調子悪く2分24秒に止った。しかし石本も楽な気分で泳いで

いたので、決勝での頑張りを期待した。

100m 自由形 決勝 19.55

7コース 谷 詔 7着 58.0

谷出足よく一線に進んだが 30m あたりですでにヘンリックス、デヴィットに約半身遅れ50ターンでは完全に1長身の差がついてしまう。ターン後よく頑張って2線でバターソン、ハンレイ（アメリカ）と競り合ったが、ゴール前崩れて遂に入賞を逸す。それにしても58.0のタイムは悪かった。

[12月1日(土)]

800m リレー 予選 14.00

(1組)

4コース	日本	鈴木	2:11.8	} 1着	8:37.9
		谷	2:08.8		
		野々下	2:10.3		
		山中	2:07.0		

100m 自由形で調子の悪かった古賀を除いて、新たに野々下を入れてオーダーを編成、スタートした。鈴木は依然として不調で2:11.8はブレーキ、谷以下はよく頑張って米チーム（2軍）を破って1着、短距離陣の不調でリレーの望みは薄くなったが、幸い山中、野々下が元気なので決勝に望みを託す。

200m バタフライ 決勝 20.55

3コース 石本 隆 2着 2:23.8

好調のヨルジク（アメリカ）を追ってスタートから大接戦150mまで一步譲らず肩を並べて頑張っていたが、150m ターン後ヨルジクは一気にスパートをかけて石本を抜き去る。これまで精一杯の善斗していた石本は、まったく力尽きて平常のラストの冴もなく、追い込んできたツンベク（ハンガリー）を危くおさえて2位となる。

体の不調で苦心した石本が、ここ一発の勝負を挑んで最後まで頑張り通して2位になったのはまったく頭が下る。バタフライの潰れた時は、見るもあわれに皆から抜き去られるのが常であるのに、これをこらえて最後のタッチまで持ちこたえたということは、彼の實力を物語るものである。

このレースの石本の頑張りを見て日本選手は大いに奮いたち、何とか豪州に抵抗せんと心に誓う。

400m 自由形 予選 21.15

(1経)

7コース 野々下 耕嗣 2着 4:37.4

(3組)

6コース 野田 芳郎 4着 4:49.9

(5組)

3コース 山中 毅 2着 4:31.8

1組の野々下は強豪の中でよく、好調の波に乗って自

己の最高記録を出して決勝出場の資格を得る。3組野田は最後まで調子出ず、遅れて4:49.9の悪いタイムで落選、5組に出場の山中は好敵手ローズとならんでスタート、よくリードを続けて好記録のラップで入り最後の25mで猛烈な競り合をしタッチの差で破れたが、日本新の4:31.8でローズに次ぐ好記録で決勝進出、決勝での両者の競り合の激しさを予想されることとなった。

山中は午後の800リレーの時にはあせって泳ぎが崩れたが、この400では見違えるほど立直り、すばらしい迫力のある泳ぎであった。

[12月2日(日)]

豪州の宗教上の習慣から日曜日はすべての競技は休みで、選手達は試合の重苦しい空気から離れて練習で過した。

[12月3日(月)]

800m リレー 決勝 20.00

4コース	日本	古賀	2:10.0	} 4着	8:36.6
		谷	2:08.5		
		野々下	2:10.5		
		山中	2:07.6		

決勝では鈴木を古賀に変えてスタート、不調のなかををよく頑張ったが、2:10.0で豪・米・ソ・伊に続いて5位で谷に引継ぐ、谷よく健闘したがスタートの差は依然縮め得ず、伊を抜いて4位で野々下に引継ぎ、野々下もよく敢闘するも差はますます開いて山中に渡す。アンカー山中、水しぶきを上げて追うが、あまり力み過ぎて彼本来の泳を忘れた感があり、空回りの状態で目前にいるソ連を遂に抜き得ず予想しなかった4着となる。短距離陣不調。リレー要員も全然頼りにならず、まったくオーダーの作成に苦心した。

200m 平泳 予選 20.30

(1組)

5コース 古川 勝 1着 2:36.1

(3組)

吉村 昌弘 1着 2:38.6

この種目ではやっと気を落付けて見る事ができたが、試合前から古川も絶好調とはいえず、どの位の記録が出るか見当がつかなかったが、2:36.1は一応思ったより古川自身よかったようでホッとした。吉村は非常に好調であったため自己の最高を出し、ともに決勝に進んだが、グライエ（デンマーク）が非常に強い潜水泳法で古川に続いているので油断はできない。

[12月4日(火)]

100m 背泳 予選 14.00

(2組)

5コース 富田 一雄 2着 1:06.4

(3組)

5コース 長谷景治 3着 1:06.4

(4組)

1コース 二宮英雄 6着 1:09.2

富田、長谷とも相当の記録で準決勝に進めたが、今大会の背泳のレベルがすでに1分02秒から3秒のところまで進歩してしまっているの、いかんともし難いといった感じ、二宮は悪い記録で予選で落ちる。

日本選手はサマーソートターンも外国選手に較べて非常に下手で見劣りがする。それにしても、このオリンピック・プールのターンの壁が滑るのに皆選手達が困っていた。

400m 自由形 決勝 19.30

5コース 山中毅 3着 4:30.4

1コース 野々下耕嗣 7着 4:38.2

ローズとグリーンにはさまれた山中はスタートからよく飛び出し100m 1:02.6でトップ。200mでは2:11.6でローズと同時、グリーンは少し遅れる。まったく伯仲のレース、山中はピッチングのある非常にあらあらしい力強い泳ぎ、グリーンはあばれ回ったような悪いフォーム、この三者三様の泳者がしのぎをけづつての競り合いだから、見ている方では面白いらしく物凄い観衆の叫び声、200過ぎるとグリーンは徐々に遅れて山中とローズの争いとなって、300のターンはローズが一瞬早い、ラップタイムローズ3分20秒5、山中3分21秒3、グリーン3分22秒4、いよいよ最後の100m必死に追う山中を冷静にスパートを掛けて少しずつ離して行くローズ、遂にラストでは3秒の差でローズの勝利に終って山中は2位、息づまるレースであった。ローズの計算されたような正確な泳ぎが、荒けづりの山中の馬力を制した勝負であった。負けた山中も表彰式には優勝者に劣らず賞賛されたのを見ても、いかにいいレースであったかがわかる。

野々下も1コースでよく頑張りが、7位に入ったのは予選の時と同様、自己最高記録を出して実力以上に戦った。今日の一戦でまた明るい希望が持てるようになった。

[12月5日(水)]

1,500m 自由形 予選 14.00

(1組)

4コース 山中毅 2着 18:04.3

(2組)

3コース 青木行義 2着 18:36.0

(4組)

3コース 八木清三郎 3着 18:57.3

1組山中は予選においても再びローズととなりのコースで、予選のため気分的には楽ながらもよく競り合って18:04.3の驚くべき記録(日本新)でいよいよ1,500mに

も自信を持って到った。

2組の青木はヘルシンキ・オリンピック出場のベテラン振り、よく自己の最高能力を発揮して、前回オリンピックの記録よりも30秒以上もの進歩で堂々決勝に進む健斗を見せた。

4組は午後8時から行われ、八木が出場してよく頑張ったが落選した。3組のグリーン(アメリカ)が17:52.9の驚異的世界新記録で泳ぎ、再びグリーン、ローズ、山中の三者の大レースになる可能性が強くなって尻上りに水泳の人氣が上ってきた。

100m 背泳 準決勝 9.40

(1組)

7コース 富田一雄 6着 1:06.5

(2組)

コース 長谷景治 6着 1:06.5

2人ともよく頑張ったが、実力が2段も違うので何とも仕方なく決勝出場のチャンスを失った。

[12月6日(木)]

200m 平泳 決勝 19.30

4コース 古川勝 2着 2:34.7

3コース 吉村昌弘 2着 2:36.7

2人とも平常通りのラップで潜水する。古川のとなりの5コースのグライエ(ソヴィエト)があまり勝負にこだわり過ぎて飛び過ぎ100m頃には崩れてしまう。ところがコースのユニチエフ(ソヴィエト)が意外に強く、最後まで古川を追った。吉村はラストまでは3位であったが、ラストよく潜ってタッチの差で2位になる手柄を樹てた。タイムも2:36.7の自己最高で入ったのは偉い。古川はさすが王者の貫録というか、グライエの飛び出しにも動ぜず自己のペースで金メダルを物にしたあたり200m平泳を自分の物とした。

[12月7日(金)]

1,500m 自由形 決勝

3コース 山中毅 2着 18:00.3

7コース 青木行義 7着 17:38.3

いよいよオリンピック・スケジュール最後でしかも最大のレースと目される1,500mのレースが来た。

前々日の予選の結果、グリーンを中央にして両横に3コース山中、5コースローズでスタートする。

戦前のわれわれの作戦としては、グリーンが最初から飛出して2人を振切る作戦に来るだろうから、山中は続く所までグリーンに随いて行き1,000m過ぎてグリーンが2人に追われて精神的に参って落ちて来たら、一気に抜いてローズと勝負という作戦を樹てた。この戦法はまったく図に当り、最初からグリーンが飛出す。山中これにピッタリついて800位まで行く、ローズは楽な気持ち



ブリーンの腰あたりについて追抜く時機をねらっている。案の定ブリーンは800あたりラップタイムが落ちて来た。この機を見たローズはすかさずブリーンを追い抜いてしまう。山中は依然としてラップの落ちたブリーンについたままであり、ローズの出たのに気がつかないようである。1,000ではローズが半長身2人をリードしてしまった。ここで勝負は定まったようなものであった。ブリーンはまったく疲れて遅れる。1,400あたりで山中もローズが2長身半もリードしているのを見ていよいよラストスパートを掛ける。物凄いラストスパートはみるみるうちにローズとの距離を縮めてきたが、遂にとらえることができず、1秒4の差でふたたび金メダルを逸す。しかしこの三者の大レースは今オリンピックの最大のレースであると賞賛された。

7コースを泳いだ青木選手もよく頑張りが5位を争っていたが、最後のタッチで敗れて7位になったのは惜しかった。

(木田記)

## 女子競泳

女子競泳は400メートル・リレーの要員として、神野眸(天理大)佐藤嬉子(天理大)島田節子(五条高)和田映子(五条高)大高幸子(伊都高)の5名が代表選手に選考された。女子競泳の記録は国内でも最近とみに上昇しており、諸外国では非常に躍進を遂げていることを考え合せると、派遣の基準記録がヘルシンキ大会の6位のものであっただけに、代表が決まってからオリンピックまでの2カ月間、5選手がリレーの入賞を目指し、固い決意をもって激しい練習に耐えて一段と自己の能力を向上させなければ、容易なことでは入賞できないことが明瞭であった。

そこで強化合宿の目標は、いかにしたならば、5選手の100メートルを現在の記録から少くとも1秒縮めさせることができるかにおかれた。また日本女子競泳選手が外国選手と競技する機会に恵まれないことから、外国の強豪と競技して経験を豊富にし、将来の女子競泳を一段と飛躍させたい。最大の目標である400メートル・リレーに悪影響をおよぼさないかぎりには、個人種目の100メートルと400メートル自由形にも出場させる方針で、練習の計画をたてた。男子競泳がメルボルンへの出発前後1カ月を国内で強化合宿をすることに決定しており、別府市に新設された室内50メートルプールを練習場とし、宿舍、給養等に万全の準備をしていた。女子競泳もこのプールを使い、男子競泳と一緒に練習することになり、

宿舍は大分県体協岡本会長の格別のお骨折りで藤家旅館が選ばれた。この旅館はプールにも男子選手の宿舍にも近く、閑静で小じんまりとして女子選手だけがお客といった、環境もよし、親身の世話と相まって練習の効果を高めることができた。特に給養の面ではオリンピック村の食事を考慮に入れて、洋風料理を多くしてもらい、毎日牛乳、ヨーグルトを、また週に2回か3回朝食にオートミル、卵料理、パン食をやってみた。この結果、カロリーは別に計算はしなかったが、果物以外間食を特に要求しなかったことで、まず十分であったことと思われた。

今度のメルボルン大会が、日本の水泳にとってはシーズン・オフの時期に当り、代表選手にとっては国内の1シーズンを通して激しく使った体や神経の休養期であった。いわゆる冬眠に入った初期であり、食欲の秋でもあった。強化合宿に入ってから相当量泳いでも夏の頃とは異なり、発汗作用はなし、睡眠も十分で、体重はむしろ僅少づつではあるが増加していった、選手自身は代表を目指して春から夏と明け暮れの猛練習や競技会の連続で、代表になれた今は安心感とこれから行くオリンピック大会に対する周囲の激励やら期待に、淡い不安が胸中にわき、また激しく行われるであろう1カ月間の強化合宿に対する心理的な圧迫があったり、指導するものにとってはいかにしたらホームシックにもかからず、十分な練習をさせることができるかに苦心を払わせられた。別府の強化合宿は10月11日から11月11日迄の1カ月間に行われた。練習場の別府室内プールは日本唯一の50メートルの室内プールで、寒さに向うこの季節の外気温に関係なく室内温度20、水温24度を保ち、快適な水の状態で練習を続けることができた。ただ練習量が積まれ、激しさが増すに従って、秋は深まり秋雨が降ったり、冷え冷えとした日が続き、オリンピックを目標にしながら、練習意欲の低下をさけることができなかった。このような季節に、激しい練習を続けることが、いかに精神面でも優れていなければならぬかを痛感させられた。1カ月の練習期間は略三等分し、最初の10日間は水に遠ざかっていた2週間の復調と泳ぎの矯正と量の練習を主とした、次ぎの10日間は練習の内容を強くし鍛練することとした。最後の10日間は各選手の調子を調整することを目標とする計画をたてて練習に入った。5名の選手についてシーズン中の練習方法や記録に関し一応の調査はしてあったので、練習に入ると同時に泳ぎを詳細に観察してみた。この結果、男の選手と比較し体質筋骨の相異は勿論あるが、肝心の泳法技術では男子選手の三流程度の技術であった。世界水泳界の第一線にある男子競泳に比し日本女子競泳が何故弱いか、水泳界不思議の一つとされてい

る。根源が見付かったような気がした。選手はこの泳ぎを作るための何年かの歳月を練習に送って作り出したもので一朝一夕には矯正できないものである。幾分でも矯正することが各選手にプラスになる面だけに限定し、欠点の矯正に努めた。自由形の選手にとって推進の原動力であり、最も大切な腕の掻き方、浮力と推進を助ける足の打ち方、軽快なピッチで泳ぐ事をさまたげる腰から下の深い折れ曲り等で、本人に欠点となっている点を意識させて、自ら泳ぎを完成することを心掛けさせた。

最初の10日間は1日量平均4,000メートル程度であったが、大高選手を除いては過去の練習に長い距離を続けて泳ぐ方法をとっていないらしく長い距離はなかなか苦痛のようであった。しかしよく耐えて練習に励んでくれた。この期間の終りに、神野、佐藤、大高選手等は一応夏の最盛期に近い記録を示し氣勢もあがったが、島田、和田の両選手は若干調子の出遅れがあった。またこの期間は吉田トレーナーの指導で、体の調子を整える入念な体操を行ったので、体を作り泳ぎの面でも量の補いをした。室内プールの使用状態は午前、午後2回で、僅か5名だけで単独に練習したのでは能率もあがらないことが明かなので、男子選手と一緒にいった。このため量、時間を男子選手の練習に合わせる結果となった。男子競泳のうち背泳は女子競泳とスピードや練習量が丁度同じ位であって、練習相手として好適であったが、女子選手は従来自己のライバルだけが目標であり、最もいいお手本になる自由形選手が泳いでいても、あまり研究も視察もしないし、長所のとり入れもしない。まったく近視眼的なもので、女子競泳の弱い一面を露呈していた。また女子競泳の選手一般は練習の時より競技会で記録が大きく飛躍するのが非常に多いので、練習に充分力を入れて泳がない傾向があった。これを是正すればさらに飛躍することを約束するものと大いに楽しみとした。第2期は量から質、すなわち練習内容を強くし、力の養成を心掛けてインターバル練習法を主とし、短かい距離を早い速度で繰返し練習をさせた。この結果、各人の泳ぎに力がでてきて、強い練習に耐えるようになってきた。しかし今一步自ら進んで鍛え抜く意欲には充分なものが感ぜられなかった。レース・コースの記録をとると、後半の苦しみを予測してか飛出しにスピードがにぶり、水に乗って快調なすべり出しができないで結局は後半のスピードも出ず記録的にも見るべきものがなかった。

第3期の調整には前半が速くなければいい記録も出ないことを認識させて、飛び出しを要求したが、なかなか思い通りにはいかず、当初の計算通り各人の調整はできず、第2期の連続がインターバルを主とした練習法で終った。このことはメルボルンでは利用できる室内プール

が少く、練習時間も少いことが予想されたので、国内の練習を十二分にして、メルボルンでは軽い練習で競技会に出ても実力を発揮できることを念願とし、方針の切換をした。いずれにせよ1カ月の練習は長かったし、気分的にも盛りりを欠き、ことに秋の深まってきたことは斗志をにぶらすものであった。選手は段々近づく大会を意識して、とにかく一生懸命に練習に励んだし、力強い泳ぎにはなってきた。ただ強化合宿に入ってから苦勞に苦勞を重ね、練習に努めた島田選手が全然泳ぎにも記録にも精彩を欠いたことと、好調を持続して大いに期待されていた大高選手が、1カ月間の練習も終りに近づいた、11月8日に慢性中耳炎を再発悪化させたことは大変な痛手となった。渡航手続や諸準備の健康診断の時に判明していたならば十分な注意と、医師の指導で練習することができて、急に苦しむこともなかったことと、極めて遺憾であった。今シーズンにおける5名の選手の最高記録の選考が行われた。国体競技の最高記録、および強化合宿中の各期の最高記録は次のようなものであった。

100m 自由形

	今シーズン最高(月日)	国体最高	強化合宿		
			第1期	第2期	第3期
神野	1.8.4(6~23)	1:9.5	1:8.8	1:8.8	1:8.9
佐藤	1.3.4(6~23)	1:10.1	1:6.8	1:6.7	1:11.5
島田	1.10.3(8~19)	—	1:12.7	1:13.1	1:18.6
和田	1.9.5(8~10)	—	1:11.5	1:10.3	1:9.6
大高	1.6.9(9~24)	1:9.9	1:11.8	1:11.8	1:10.6

400 m 自由形

和田	5.24 (8~19)	5:34.3	5:35.	5:34.6	5:31.6
大高	5.23.8(8~19)	—	5:27.	5:28.	—

11月11日午前中をもって終了した。国内における強化合宿も1カ月だけでは泳法の改造も満足にできず、記録も当初目指したほどの向上はなし得なかった。これは指導の拙劣であることも勿論原因の一つであったろうけれど、女子選手自体が男子選手と軽い練習量にも泳ぎにも同じような力を、技を示さない限り、筋骨には差があるとはいえ、世界の第一線に進出することは至難であることを感じさせられた。

羽田を14日出発し、メルボルンに到着したのは15日の夜であった。到着の翌16日は休養し、17日から競技会のための練習を開始した。使用した練習場は大会の行われるニュー・オリンピック・プールとリッチモンド・プール(55ヤード)の両室内プール、これと別にメルボルン大学のボールベア記念プール(25メートル)を借用して練習することにした、オリンピック・プールとリッチモンド・プールの方は共に1時間宛1日1回各国に割当てられ練習することができたが、プールの使用時間は

毎日不定で、午前と午後、午後と夜、午前と夜といった具合に、前日に場所、使用時刻の割当が発表されるので、練習計画も車の手配も前日の夕刻にならねば行動計画がたてられない不便さであった。メルボルンにおける大会前の練習方針は、開会式までと個々の競技日前とに区別して、開会式前は旅行の疲れを十分とることと、村の生活やプールに馴れ、オリンピックの雰囲気に入った泳ぎをこれに復させる、競技日前は各人の調子を整えさせて十分の態勢でレースに臨ませることであった。以上の方針で練習を開始してみると、まず気候が夏らしい気分がまったくしない。日本を発つ頃より寒いので気分的に萎縮していた。また外国へ出ることのまったく少ない女子競泳にとっては、メルボルンまでの大旅行をして、女子村に入れられ、身の回りの整理や、言語の不自由さ、食物の変化と生活環境の急変が選手には非常に気持の負担であった。1日2回の練習はバスの待合わせ、いずれのプールへも村から30分を要し、1時間の練習時間はコースを制限されて、つめかける各国選手の偉容や追かけられる時間に気分的に焦燥して落ち着いて練習もできない。オリンピック・プール、リッチモンド・プールの練習時間の組合せの悪いときにボールベア・プールを利用した。このプールは午後は毎日使用することが可能であったが、特別な配車が難かしいので、男子競泳と分れて練習することができず、少ないコースと僅かな使用時間を男子競泳に分けさせてまったく気の毒であった。毎日の生活とか、変るプール、諸豪の各国選手の練習振りに圧倒される劣等感など、女子競泳の場合まったく気分的な疲労が大きく復調に時間を必要とした。せめて夏らしく気温も高く暖かい太陽の下で十分練習することができれば、1カ月の国内の強化合宿の成果が大きく開花したことであったろう。オリンピック、リッチモンド両プールを転々として練習をしているうちに、不調の島田選手は体の不調で時々練習を休み、大高選手の中耳炎は依然として快方に向わず、練習以外に治療の仕事が増えて医務室通いをしなければならず、飲み薬の関係で往復のバスに酔って練習も十分できないし、だんだん迫ってくる大会に焦燥する有様であったが、とにかく神野を中心として一致した気持で練習を励んだので、遅々としてはあったが、調子をあげてきた。オリンピック村の一隅に女子村があり、男子村への女子選手の出入が自由であったので種々と批判があったが、食堂は一緒であったし、練習の打合せなど行動の連絡が便利であったし、大高選手の中耳炎の治療も女子村が離れていたら一層の難儀をし毎日の練習にも支障を来したことと思われた。開会式も終って大会気分も盛り、いよいよ各泳手の調子を整え競技に最高の調子を出して泳げるよう調整に入

た。選手は生活にもなれ、強豪との入交っての練習に気分的に押され、潑刺とした元気な泳ぎを示さず、国内競技会では感じたこともなかったであろう戸惑いや、圧迫感も、村でお互の競争相手と交歓しているうち、不自由な言語や人にもなれてきたため、神野選手は待望の1分7秒台を記録し、和田選手は400自由形にも自己最高記録を出し、100メートル自由形では1分8秒台を確実に泳ぎも見違えるほど安定して、競技会に臨む心構えも調子もでてきて一同の士気も大いになってきた。

26日、競技を前にしてオリンピック・プールで夜間の練習ではあったが、試みにレース・コースをやってみたが、それぞれ自信をもって競技に出られる安心感を得ることができた。試泳の結果は次の通り、

100m 自由形

	50m	100m
神野	31.8	1: 7.8
佐藤	32.3	1: 9.2
島田	32.8	1:12.6
昭田	32.4	1: 8.8
大高	33.4	1:11.0

400メートル自由形試泳の後に行う。

400m 自由形

和田	5:23.8
大高	5:27.5

女子競泳の初登場は29日夜の100メートル自由形予選であった。出場選手は神野、佐藤、島田の選手で、神野は国内競技会の最高記録が1分7秒8であった。佐藤は1分8秒4と1分8秒2。島田は1分10秒3と1分12秒6である。神野選手は予選通過はできなくともせめて1分7秒台の新境地に到達を希っており、他の人には自己記録の最高を目指して努力することを希望した。100自由形予選は5組で出場選手は35名であった。先陣を承わって島田選手が第2組に出場した。出場者6名で島田は好調ではなかった。しかしなかなか頑張る屋であり、徐々にあったが調子を取り戻しつつあったので健斗を期待した。オリンピック・プールは構造や運営の面から競技中はプール・サイドの整理が必要以上に厳重であった。女子選手とは選手控室の入口で別れると、競技終了して場外スタンドへ出てくるまでは、競技の直前やプール・サイドでは会うこともできないようになっていた。島田選手が第2組の選手に交って、女子係員の引率でスタート台に向って行くとき、役員の出入口で声をかけ激励したが、非常な緊張で僅かに顔を向けて行った。この組はジモンズ（米）を除けば十分せり合える相手である。各組とも記録でリードしてあるので、島田は1コース隣の2コースはボオー（仏）であった。スタートの号砲で各選手一斉に飛び込んだ、島田よく頑張ったが、緊

張のためか肩に力が入りすぎてぎこちなく、25メートルではシモンズを先頭とする一団にやや遅れ、50メートルの折返しでは32秒8であった。折返し後もこん身の力を振り絞って力泳するも、ついに及ばず6着に終る。1分11秒8であって自己最高には遠かった。

次いで第3組には7名の出場で佐藤選手が1コースにゲンゲ（ハンガリー）ロー（ニュージーランド）が強く出場選手中の最年少14歳のロサダ（比）が2コースであった、引卒されてスタート台に向うときは固くなって緊張のあまりか顔も蒼白となっていた。第2回アジア大会出場の経験もありベテランであるが、オリンピック競技ともなれば全然別のものであった。号砲に選手は一斉にスタートした。佐藤前半から重い泳ぎですべり出しも悪く、50メートルの折返しでは32秒4でパロン（メキシコ）フロスト（仏）と並んで、僅かにロサダ（比）に先んじていた。折返し後は力泳に次ぐ力泳で、ゴールに飛び込むいつもに似ず水に乗り切れず、悪戦苦斗の末、最後の10メートルではまったく進まなくなって、期待された自己新記録どころか1分10秒3、6着フィリピンのロサダ少女もいどころなしの1分13秒7と終って、実力を示し得なかった。つづく第4組には練習中1分7秒8の記録を出し自信をつけた神野が2コースに出場した。4コースのリーチ（豪）は特に強いが、他の5名は十分競争できる相手であり、日本記録とともに予選通過をねらって元気であった。スタート台でも日本の第1人者の貫禄十分で落ち着いてはおり、声援に突顔で応える余裕を示した。スタートからリーチ（豪）は強かったが、神野もまた第1線に伍して軽快によく水に乗って折返しに向って進んだが、31秒7のラップは好調の時と同じである。これなら7秒台は問題ないと大いに声援を送ったが、折返しからさらさらにあがるはずの軽快なピッチは見られず、だんだんと疲労が見え出しついに第1線から遅れ出した、後半の強さが全然見られずゴール、僅かにプレスリー（加）に勝って6着1分8秒8で終った。100自由形に出場した三選手の競技振りを見て、場の経験と力の相違には、日頃の実力さえも十分に発揮できないものであると感じさせられた。準決勝、決勝に進出する選手は女子選手とはいえ泳ぎに迫力があり、スピードも時計に示される以上に速いものが感じさせられた。日本内地の女子競技に感じられるひ弱さは、まったくなく、男子競泳と同様な激しいものであった。決勝に進出できる1分5.6秒は50メートルのラップは26秒から30秒であった。50メートルの記録で10何年振りやと30秒8にたどりついたばかりの日本女子競泳では相手の迫力だけでも縮み上がってしまうはずである。国内で神野、佐藤の出場する競泳で弱い相手はその威容に恐れおののく

と、時と処をかえたのにすぎない。萎縮しては必死の頑張りも気持だけで泳ぎ疲れ切ってしまう、あれだけの頑張りを国内ですれば新しい記録が生れたことであらう。体格に練習量やその激しさに、技術的に、全然現在の日本女子選手は及ばないことを思い知らされた。100メートル自由形の予選の結果、神野は23番目、佐藤は30番、島田は33番目であった。記録で区分すると1分2秒1台名、3秒台1名、4秒台1名、5秒台5名、6秒台3名、7秒台5名、8秒台10名、9秒台3名、10秒台3名、11秒、12秒、13秒、各1名であった。

#### 第2組の結果

1コース	島田（日）	1:11.8
2コース	ボウ（仏）	1:08.6
8コース	ヤンセン（独）	1:08.3
4コース	シモンズ（米）	1:06.5
5コース	エウアート（英）	1:08.8
6コース	ソッケ（ハンガリー）	1:08.0

#### 第3組の結果

1コース	佐藤（日）	1:10.3
2コース	ロサダ（比）	1:13.7
3コース	フロスト（仏）	1: 8.8
4コース	ゲンゲ（ハンガリー）	1:06.6
5コース	クロンプ（独）	1:07.7
6コース	スロー（新西蘭）	1:05.9
7コース	パロン（メキシコ）	1:09.5

#### 第4組の結果

1コース	プレスリー（加）	1:09.2
2コース	神野（日）	1:08.8
3コース	チョブソン（瑞）	1:07.3
4コース	リーチ（豪）	1:04.9
5コース	オールドック（ハンガリー）	1:06.2
6コース	ステフィン（独）	1:08.1
7コース	ロバーツ（南阿）	1:07.9

神野を中心に5名の選手が一致して励んできた目的の400メートル・リレーにせめて決勝進出しなればと、100メートル自由形予選に示された各国の選手の記録を基としてリレーに出場する10カ国のチームの能力を推定してみたが、どう計算しても我がチームは第10番目で、決勝進出するどころか、なんとかビリにならないことを希わねばならぬことになった。なんとしても組し易いと思われるフランスとイギリスに勝たねば、今日までの努力も水の泡である。しかもこの比較的楽にやれると思われこの両国チームは第1組であり、我方に第2組で優勝確実のオーストラリア・チームと400ヤードリレーに世界記録を樹立して意気盛んなカナダ・チームの2強豪の間にはさまれてのレースにますます不利な状態にお

かれて、運にも恵まれない有様であった。100メートルの予選で完膚なきまでたたかれて、自分の力をはっきり見せつけられたので、多少気分的に緩みも出ていた。出場者4名は神野、佐藤と最近調子をあげてきた和田と、今1名は誰れにすべきか、島田か大高かいずれをとるべきか大いに迷わされた。島田は頭痛でリレーの前日から練習を休み、ついに大高に決定を余儀なくされたが、中耳炎で悩み続ける大高を使うことは気の毒でもあった。しかし大高の勝負強さは期待できた。12月4日第2組の400メートル・リレーは2コース・ハンガリー、3コース・豪州、4コース・日本、5コース・カナダ、6コース・スエーデンでスタートは切られた。いずれも強豪揃いであり、リレーの後半で勢を盛り返すことのできる甘い相手ではない。したがってオーダーは神野、和田、佐藤、大高と強い順に配列し、なんとかして相手にくいついていく背水の陣を布い。万一にもスエーデンに勝てれば決勝進出はおろか、第7位は間違いない。大いにファイトを燃して力泳することを希った。第1泳者の神野はスタートよく、頑張っって折返し50メートルでは31秒5と好調で目標のスエーデン第1泳者を押えてハンガリーの第1泳者と競り合い、後半もよく水に乗り軽快にピッチも上り1分7秒8で和田に引継いだ。和田この日初出場であったが、力強く終始頑張っってスエーデンの第2泳者に競り抜かせず、第3泳者佐藤に引継ぐ、ラップ・タイムは1分8秒1、佐藤もまたよく健闘するもスエーデンの第3泳者は強く、ついにゴールでは1秒の差をつけられる。佐藤のラップ1分8秒6。アンカーの大高は劣勢挽回に必勝の頑張りを示したが、ついに第5位に落ち、4位のスエーデンとの差は5秒7と離された。タイム4分35秒8に終り、第1組、第2組の10カ国チームを合わせて第9位となり、ついに決勝進出の夢は破れ去った。第8位のイギリス・チームとの差は僅か1秒2である。各泳者がゴールに到達する直前、両隣の豪・加の泳者が引継ぎスタートして飛び込むことによって起きる大波に揺られ揺られてただようことがなければ、4名でこれ位の差はと思うが、これをいえば負け惜しみになる。ともあれ非公式であるが、神野は第1泳者として1分7秒8を競技会で記録し得たことと、リレーが日本の新記録であったことはせめてものなぐさめであった。島田が不調で苦しみ、大高また耳の治療と完全な状態で4名の選手を揃えられなかったことは、女子競泳のために不幸なことであった。こんな状態でありながら、入賞を目指した5名の選手の一一致した努力の結果は、健闘をこそ讃えその労苦をねぎらうべきである。今後の女子競技のためにはいい経験であった。

#### 400 m・リレー予選の各組の結果

#### 第1組の結果

1着	南アフリカ	4:26.8
2着	アメリカ	4:27.3
3着	ドイツ	4:27.5
4着	イギリス	4:34.6
5着	フランス	4:36.6

#### 第2組の結果

1着	オーストラリア	4:25.0
2着	ハンガリー	4:28.1
3着	カナダ	4:29.3
4着	スエーデン	4:30.1
5着	日本	4:35.8

女子競泳の最後の競技400メートル自由形予選は5日午後3時20分から行われた。出場者は26名で4組に分けられていた。和田選手は第3組の1コース、競技会前に予め気負って最初から飛び出せば、とにかく好調であるし、ペースを乱すから、100メートル過ぎてから頑張るよう注意を与えていた。しかし和田も決勝進出を目指し強引に飛び出して強豪と争ったので100メートルの折返しでは早くも疲れが見えて第5位となり、200メートルでは最後、300メートルでは幾分泳ぎも気持も安定したので盛り返したがスエーデンのワンパーにせまりつつゴールではタッチの差で及ばずついて7名中の7着、5分27秒2で終った。無謀な飛び出しをせずに行けば5分10秒台に進出できたものをと惜まれた。レース後スタートから無我無中で気が付いたらもうラストであったと述懐していた。大高は第4組に出場し、順当のすべり出して100メートルは第一線についての健闘で、これならばあるいはと淡い希望を抱かせたが、200を過ぎる頃から日頃の冴えは見られず、ずるずると後退しつつにゴールではまったく疲れ切って7着。5分28秒2とここで女子競泳の全部が終った。しかも一つの予選通過もなしに世界の強豪の前に屈してしまった。400メートル自由形予選の結果、和田は20位、大高は22位であった。

#### 400 m 自由形予選

#### 第3組の結果

1着	フレーザー(豪)	5:02.5
2着	ルーザー(米)	5:10.3
3着	セックリー(ハンガリー)	5:10.5
4着	ロバーツ(南阿)	5:16.8
5着	トーマス(仏)	5:23.9
6着	ワンパー(瑞)	5:27.0
7着	和田(日)	5:27.2

#### 第4組の結果

1着	クラブ(豪)	5:09.2
2着	グレイ(米)	5:16.7



3着	マイブラウ (南阿)	5:16.8
4着	ロ一 (新西蘭)	5:18.5
5着	キーワン (英)	5:3.6
6着	アランダ (墨)	5:24.2
7着	大高 (日)	5:28.7

女子競泳の全日程が終って、強化合宿以来を振り返って見ると、ああもこうもやってみたらと思われる事はたくさんある。しかし選手はとにかく一生懸命に最大の目的である400メートル・リレーの入賞を目指して精進したことは事実である。ただ過去おたがいの好敵手に勝つことのみで外国の強豪がどんなに強いかを知らなかった男子選手のレベルに到達することを目標に励む外国選手に、体格も体力も練習量や激しきで及ばなかったのだから、せめて技術でも優れていたら対等に勝負ができたがこれも劣っていた。今後はあらゆる機会をとらえて海外へ出て外国選手の實力に接し、場の経験を豊富にし、その土台の上に立って自己研磨することが、日本女子のレベルを高める唯一の道にあると思う。このことは競技者として世界の広さ高さを知らないと、井の中の蛙となって進歩も発展もなくなり田舎者となってしまふ。オリンピックに今後女子競泳が参加するためには、幾つもの山や谷を越えて新境地に達しないと難かしいが、もし参加できるとしたならば、今度こそ女子のコーチがシャペロンを同行しなければ練習に競技に選手が必要以上の神経を余分に使わねばならない。現地で求められるシャペロンは運動選手の生活を知らぬだけ苦勞が多く、御主人に気の毒なだけである。また今度のように練習に通うに不便な状態では、1日1回は村の近くにプールでもあって練習ができ、往復に疲勞し十分な調子をもって競技にのぞめないことのないようにありたい。女子競泳が今回の経験を生かして一段も二段も飛躍し世界の強豪の仲間入りできることを切望する。

(根上記)

## 飛 込 競 技

### 飛 込 の 経 過

飛込競技はつぎの日程によって挙行された。

男子飛板飛込予選

11月30日 午後2時45分  
(最初の3種目)

同 午後8時45分  
(後半の3種目)

男子飛板飛込決勝

12月1日 午後7時30分

女子飛板飛込予選

12月3日 午後2時

女子飛板飛込決勝

12月4日 午後7時55分

男子高飛込予選

12月5日 午後2時

(最初の3種目)

同 午後7時30分

(後半の3種目)

男子高飛込決勝

12月6日 午後8時50分

女子高飛込予選

12月6日 午後2時

女子高飛込決勝

12月7日 午後8時30分

以上の競技順序により、競技経過を述べる。

男子飛板飛込予選

予選順位	氏 名	国 名	得 点
1	Gapilla	J. メキシコ	90.24
2	Clotworthy	B. アメリカ	90.07
3	Whitten	G. アメリカ	89.20
4	Brener	R. ソヴェト	83.82
5	Harper	D. アメリカ	83.42
6	Oudalov	G. ソヴェト	83.06
7	Mund	G. チリ	80.54
8	Gerlach	J. ハンガリー	80.45
9	Botella	J. メキシコ	78.27
10	馬場	日 本	77.77
11	Patrick	W. カナダ	75.64
12	Kasakov	L. ソヴェト	74.68
13	Siak	F. ハンガリー	74.60
14	Pire	C. フランス	74.33
15	Vasenius	H. フィンランド	73.82
16	Tarsey	P.D. イギリス	72.65
17	Winther	A. オーストラリア	71.04
18	馬淵	日 本	70.82
19	MuCann	J. オーストラリア	69.18
20	Faulds	R. オーストラリア	68.84
21	Cann	R.E. イギリス	67.96
22	Ran an	Y. イスラエル	65.14
23	Ribeiro	T. ブラジル	62.07
24	Walsh	R. イギリス	52.21

以上の結果になり馬淵君は惜しくも予選に落選した。しかし予選6位から20位までの競技者は実力的には左程相異なると思われず、当日の調子次第で順位が入れ替るものと思われる。

馬場君もかなり失敗をしていたように見受けられたが10位で予選を通過した。

### 男子飛板飛込決勝

順位	氏名	国名	得点
1	Clotworthy B.	アメリカ	159.56
2	Harper D.	アメリカ	156.23
3	Capilla J.	メキシコ	150.69
4	Whitten G.	アメリカ	148.55
5	Oudalov G.	ソヴェト	140.64
6	Brener R.	ソヴェト	139.14
7	Mund G.	チリ	137.53
8	Gerlach J.	ハンガリー	136.08
9	Kasakov I.	ソヴェト	129.34
10	Patrick W.	カナダ	127.32
11	Botella J.	メキシコ	127.32
12	馬場	日本	126.87

以上の結果になり、馬場君は惜しくも12位となったが、実力的には5,6位の者となら技術的には見劣りするものではないと思われる。

### 女子飛板飛込予選

予選順位	氏名	国名	得点
1	McCormick P.	アメリカ	76.80
2	MacDonald I.N.	カナダ	73.25
3	Gilders B.	アメリカ	71.47
4	Stunyo J.	アメリカ	71.04
5	Tchoumitcheva V.	ソヴェト	65.42
6	津谷	日本	63.99
7	Long A.	イギリス	63.23
8	Hanson B.	スエーデン	62.81
9	Dluvass Z.	ソヴェト	62.12
10	Kroutova N.	ソヴェト	61.54
11	Darrigrand N.	フランス	60.48
12	Baidinger A.S.	スエーデン	60.30
13	McAulay B.	オーストラリア	60.19
14	Welsh C.I.	イギリス	59.45
15	Bartou R.	オーストラリア	58.50
16	弘世	日本	56.02
17	Howerd P.	オーストラリア	53.89

となり、弘世嬢は残念ながら予選に落つ。なお、同嬢は飛板飛込の後踏切前宙近り1回半(抱え形)練習中、不幸にも板に頭部を打ちつけ負傷し、そのため練習を10日間程休止したため調子が出ないまま敗れたものであった。

### 女子飛板飛込決勝

順位	氏名	国名	得点
1	McCormick P.	アメリカ	142.36

2	Stunyo J.	アメリカ	125.89
3	MacDonald I.M.	カナダ	121.40
4	Gilders B.	アメリカ	120.76
5	Tchoumitcheya V.	ソヴェト	118.50
6	Long A.	イギリス	107.61
7	Darrigrand N.	フランス	106.32
8	津谷	日本	103.12
9	Hanson B.	スエーデン	102.19
10	Kroutova Z.	ソヴェト	100.34
11	Dluvass Z.	ソヴェト	98.15
12	Baidinger A.S.	スエーデン	97.29

以上の結果になり、津谷嬢は惜しくも8位にとどまった。女子飛板飛込もなかなか接戦で1位のマコーミックは別として10位ぐらいまでは技術的な差は見受けられない。

### 男子高飛込予選

順位	氏名	国名	得点
1	Conner G.	アメリカ	80.24
2	Capilla J.	メキシコ	78.68
3	Garlach J.	ハンガリー	77.77
4	Tobian G.	アメリカ	76.77
5	Brener R.	ソヴェト	76.56
6	Farrel W.	アメリカ	75.07
7	Capilla A.	メキシコ	74.18
8	Tchatchba M.	ソヴェト	73.02
9	Siak F.	ハンガリー	72.85
10	馬場	日本	70.76
11	馬淵	日本	69.76
12	Botella J.	メキシコ	69.39
13	Galkine G.	ソヴェト	68.92
14	Tarsey P.D.	イギリス	68.34
15	Partrick W.	カナダ	67.71
16	Vasenius H.	フィンランド	66.63
17	Murphy F.	オーストラリア	66.29
18	Tully W.	オーストラリア	65.49
19	Mund G.	チリ	63.01
20	Walsh R.	イギリス	62.65
21	Cann R.E.	イギリス	60.08
22	Holmes B.	オーストラリア	58.01

以上の結果で馬淵、馬場両君とも予選にパスし決勝へ進出した。

### 男子高飛込決勝

順位	氏名	国名	得点
1	Capilla J.	メキシコ	152.74
2	Tobian G.	アメリカ	152.41
3	Conner R.	アメリカ	149.79

4	Gerlach	J.	ハンガリー	149.25
5	Brener	W.	ソヴェト	142.95
6	Farrel	W.	ソヴェト	139.12
7	Siak	F.	ハンガリー	138.83
8	Tchatchba	M.	ソヴェト	134.52
9	Capilla	A.	メキシコ	132.74
10	Botella	J.	メキシコ	125.45
11	馬場		日本	123.69
12	馬淵		日本	120.20

という結果に終わったが、この一戦と違って戦った日本選手のあせりが見えた競技であった。

**女子高飛込予選**

順位	氏名	国名	得点
1	Myers P.J.	アメリカ	52.96
2	Gorokhovekaia R.	ソヴェト	52.64
3	Conner T.	ソヴェト	52.19
4	McCormick P.	アメリカ	51.28
5	Irwin J.	アメリカ	50.81
6	Hansen B.	スエーデン	50.48
7	Darrigrand N.	フランス	50.02
8	Jigalova L.	ソヴェト	49.22
9	Long A.	イギリス	49.15
10	津谷	日本	48.45
11	Welsh C.	イギリス	46.55
12	弘世	日本	46.15
13	Ptarrhoter E.	オーストラリア	46.02
14	McAulay B.	オーストラリア	45.67
15	Barton R.	オーストラリア	41.95
16	Proenca D.	ブラジル	36.71
17	Laursen E.	デンマーク	35.39
18	Price A.	オーストラリア	35.28

上記の結果にて津谷、弘世両嬢は見事に予選を通過する。

**女子高飛込決勝**

順位	氏名	国名	得点
1	McCormick P.	アメリカ	84.85
2	Irwin J.	アメリカ	81.64
3	Myers P.	アメリカ	81.58
4	Darrigrand N.	フランス	78.80
5	Karakchians T.	ソヴェト	76.95
6	Jigalova L.	ソヴェト	76.40
7	Long A.	イギリス	76.15
8	Hanson B.	スエーデン	75.21
9	Gorokhovskaia R.	ソヴェト	73.84
10	津谷	日本	70.95
11	弘世	日本	69.71

12 Welsh C. イギリス 69.05  
となり、決勝にては10、11位となってしまったが、選手は少しあがり気味で落ち着きを失っていたように思われる。

**競技会の運営について**

競技会は主としてFINA飛込委員長のマトビエフ氏によってすべて英語によって行われ、審判長は氏と豪州の飛込委員長であるアランマッソ氏と交代しながら行われた。審判員は日本、アメリカ、ソヴェト、イギリス、ハンガリー、オーストラリア、南アフリカ等が1人宛選ばれた。

審判員の採点数は1冊の本になっており、0点より10点まで0.5点間隔の点が開いた頁の両面に書いており、それを開いて審判長の方に示すという方法のため、審判長の合図によって一斉に上げるべき採点板も故意に遅らそうと思えば可能な状態にあり、このため審判員の採点に多分に不正があるように見受けられ、競技会の後半に審判長からも再三、合図と同時に採点板を上げて貰いたいという注意がされる状態であった。

他に変わったことといえば、審判員のために記録員席の横に、競技中審判長が競技者の氏名、種目を通告するとともに、その種目の番号と形が、A、B、Cの符号とともに示されていたが、なんの効果もないように思われた。これは審判員で英語の判らないものに飛込番号で明示するという企図の下に行われたものだが無意味であった。

しかしこの大会で一番大きなミスは、男子高飛込予選と1,500メートル自由形予選を並行して行ったことだったと思う。

このことは競技終了後、各国審判員、コーチより指摘された。今後の国際競技には、この点についてはよく注意しなければならないと思う。(小柳記)

**代表選手役員が決定する迄**

第16回オリンピック大会に派遣する代表選手は、次の段階を経て決定された。

(1) 昭和30年11月の理事会でオリンピック強化合宿に参加する選手を決定した。

この人選はあくまでも若い選手を主体とした約60名でオリンピックの選考には直接関係しなかった。

(2) 昭和31年1月の全国代議会でメルボルン・オリンピックのコーチングスタッフを次の通り決定した。

ヘッドコーチ	小池 礼三
男子コーチ	太田 光雄
飛込コーチ	小柳 富雄
マネジャー	古橋 広之進

(注) 女子コーチ、水球視察員は都合で後日となった。なお当日のオリンピック選手選考には次の大会をあてることとした。

日本選手権兼オリンピック予選会

インターカレッジ、国体の成績も選考の対照とする。

(3) オリンピック候補強化合宿は約60人の選手を集めて、1月に東大プール、4月に別府温泉プールでそれぞれ行われた。なおこの間、女子競泳と男子飛込は男子の競泳とは別個に白浜温泉プールと大阪プールとで行われた。

(4) 第1回の選手選考は体協の人選のワク内を原則とし、日本選手権大会終了後神宮プール貴賓室で行われた。選手選考委員会は会長の推薦による各部門から選出されたメンバーによって構成され、公正な立場で選手の選考に当たった。当日の選考会は記録の不振から長びき、取敢えず傑出した次の選手のみを決定した。

短 距 離

鈴 木 弘  
谷 詔  
古 賀 学

背 泳

長 谷 景 治  
富 田 一 雄

平 泳

古 川 勝

バタフライ

石 本 隆

飛 込

男 子

馬 場 豊  
馬 淵 良

女 子

津 谷 鹿 乃 子  
弘 世 初 子

なお当大会の記録から推して今後選考が一層難しくなるという予想と、若い選手により多くのチャンスを与えるというところから、新たにオリンピック選手選考記録会を9月初旬に行うことに意見が一致し、実施することになった。

(5) 第2回選手選考委員会はオリンピック選手選考記録会の後、同じく神宮プール貴賓室で行われたが、結局残り選手の選考には時期が早過ぎるということで、インターカレッジ終了後に持越した。

(6) 第3回選手選考委員会はインターカレッジ終了後同じ神宮プールで行われたが、難航を続け結局次の者が選考追加された。

長 距 離

山 中 毅

野 田 芳 郎  
青 木 行 義  
八 木 清 三 郎  
野 々 下 耕 嗣

リレー要員

清 水 健  
古 川 徹

背 泳

二 宮 英 雄

平 泳

吉 村 昌 弘

(7) 女子競泳コーチおよび水球視察員は9月6日、9月13日の常務理事会にて決定した。

女子競泳コーチ 根 上 博  
水球視察員 鶴 田 武

(8) 第4回選手選考委員会は国体終了後甲子園球場貴賓室で行われた結果、さきに派遣を決定した女子400リレー・メンバーとして次の5人を選出した。

神 野 眸  
佐 藤 嬉 子  
和 田 映 子  
大 高 幸 子  
島 田 節 子

結局当初からの派遣予定人員通り

役 員 5人  
男 子 競 泳 16人  
女 子 " 5人  
男 女 飛 込 4人

の30人となった。なお水球視察員として1人が決定したわけである。いずれも人格、競技成績等がその対照となり、立派なチームの編成につとめた。(古橋記)

水 泳 チ ャ ム 日 誌

10月19日

古橋マネジャーは清川本部役員とともに先発隊としてカンタス機にてメルボルンへ発つ。

10月22日～11月5日

メルボルン到着と同時に清川本部役員のアシスタントとして、役員選手の受入準備をはじめ。

一方、この間練習プールの確保、豪州水泳界の状況視察を行い、水泳チームの受入れにも万全を期す。

11月6日

午前9時36分、日航機「藏王号」にて代表団第1陣はメルボルン市・エセンド空港のオリンピック・ターミナルに到着。

同機にて水泳飛込チーム5名も元気一杯到着。水泳チーム第1陣を迎えた古橋マネジャーは体協の事務から離れ、水泳チームの仕事に専念することとなった。

11月7日

飛込選手4名は小柳監督とともに、オリンピック・プールを見学、初練習に入った。

11月8日～11月14日

飛込選手は小柳監督のもとに連日午前、午後各1回の本格的な練習に励む。(オリンピック・プール)

この間、日本の飛込選手の人気は大したもの、各国チームとも驚異の目をみはる。

11月15日(曇天)

水泳チームの本隊24名は予定より遅れ、午後8時3分熱狂的な歓迎を受けて元気一杯到着した。直ちにオリンピック村に向い、夕食をすました後、部屋割にしたがって各家に到着した。誰も予想外の寒さに驚いた。

部屋割は次の通り。

- (男子) 家屋番号 183 古川勝, 吉村, 石本, 長谷, 富田, 二宮, 山中, 馬場, 馬淵  
" 185 小池, 太田, 根上, 小柳, 鴉田, 古橋  
" 187 鈴木, 古賀, 谷, 青木, 八木, 野々下, 清水, 野田, 古川(徹)
- (女子) 家屋番号 7 神野, 佐藤, 和田, 島田, 大高, 津谷, 弘世

家屋はどれも独立家で、風呂、洗面所、便所付で、一部屋2人ずつ入室した。取敢えず古橋マネジャーより簡単な生活上の注意、習慣等についての説明があった。

なお、女子は畑中、シャペロンの案内で女子村に入った。23時就寝、長途の旅の疲れもあってかぐっすり寝込んだ。

11月16日(晴, 時々雨)

8時0分 起床 } 1夜を明し旅の疲れも幾分癒えたか  
8時30分 朝食 } にみえるが、未だ抜けきらず休養とする。

午前10時より小池ヘッドコーチを中心に練習スケジュールの検討を重ねる。

(古橋マネジャーは小池ヘッドコーチと練習プール豪州水泳界に付ての報告を行った。)

午前11時30分より小池ヘッドコーチ報道関係特派員とのインタビューを行う。

午後3時より約1時間選手の希望もあってオリンピック・プールの見学に出かける。何日かぶりに水を見て気のはやる選手もいた。各選手ともプールの立派なのに驚く。水温、5メートルライン等の打合せをして引あげた。

夕食後8時よりプール見学の状況を加味して再度練習

の計画、方針を練る。

11月17日(曇, 時々晴)

起床 7時0分, 軽い体操で体の筋を伸ばす。小池ヘッドコーチより、今後の練習方針、健康上の注意があった。

朝食 7時30分, 朝だけは洋食にして欲しいとの希望があった。

午前、午後完全休養に努める。

午後5時30分夕食をすまし、到着第1回の練習をオリンピック・プールで行った。最初の練習とあって各国の報道人、水泳関係者の注目を集め、なかでも古川の潜水泳法は人気の焦点となった。全員張切って泳いだが、幾分旅の疲れがみえた。プールの感想は「泳ぎ良い」というのが圧倒的だった。谷, 古賀はノド, 大高は耳の故障でドクターの診察をうけた。なお弘世は練習中にあやまって飛板に頭をぶつけ4針縫う全治1週間の負傷。

11月18日

朝の体操後、ヘッドコーチより試合までのコンディションの持って行き方についての話しがあり、一同の精進を促す。

午前の練習は11時0分よりオリンピック・プールで1時間にわたり行った。FINAの時間の割当不備から6コースの割当が4コースしか使えず、今後のこともあるので直ちに抗議した。練習は相変わらず軽いものだった。

ギッパス監督はじめフィリップス氏(豪州)等と旧交を温む。

昼食後は練習時間の都合で午睡もできず、再び練習にのぞむ。

午後は試みとしてメルボルン大学のボールペア・プールに出かけた(このプールは練習プール不足を見込んで水泳チームとして特別に借受けたもの)25メートル、コースの美しいインドアプールで、水温16度はオリンピック・プールと同じコンディションで、このプールは今後のコンディションの調整に大いに役立つことと思われる。

建造後最初の日本選手使用とあって、当事者の喜び一しおで心よく協力してくれた。ビート板、休息用の椅子水温の調節等到れり尽せりだった。

11月19日(快晴)

午前の練習は10時から1時間リッチモンド・プールで行われた。(FINAの正式割当プールとしてオリンピック・プールと交互に割当てられた)55ヤード、9コースの古めかしい暗いプールで、なにか重苦しい感じがした。山中の調子は日を追うにつれて上昇し、ダークホースとして報道人の口にのぼりはじめた。

ソ連の水泳関係者と日本の練習方法について語り合う。

午後の練習はオリンピック・プールで3時から4時までで行ったが、日本選手の人気は相変わらずで、プールは練習を見学に来た観衆が埋まった。

公式スターターの合図でスタートの練習をはじめたが、従来の日本のスタート方式と変わらず、ただフライングの際の再スタートに幾分の相異点があった。

食事も連日の中華料理に幾分飽いてきたのか、洋食に切替える選手が目立った。

11月20日(晴)

飛込は練習量確保のために早朝からプールに出かけ、連日の激しい練習に励む。

競泳は1時から11時迄午前の練習、昨日に引続きスタートの練習をつむ。

11時より、小池ヘッドコーチ、太田コーチ、古橋マネージャーはプールに居残り、アメリカチームの練習を見学した。練習方法はさほど目新しいものもなく、グリーン、ヨーシックの好調が目につく。

午後は3時30分より5時30分までボールペアー・プールでみっちり練習をつんだ。

11月21日

いよいよオリンピックの開幕を明日に控えて村は落着かぬ風情である。

プールはまだオリンピックといった感じから程遠い。これからが練習の総仕上げである。

午前はリッチモンド、午後はオリンピック・プールとそれぞれ練習を行った。

午後1時30分より休憩所(試合前体を休めるため特別に1軒プールの近くの借りた)の下見分に出かけた。

11月22日(快晴)

待望久しかったオリンピックの日は遂にやってきた。気づかわれた天候は昨日とうって変わり、全くの快晴、風一つない初夏の空はこの日を心から祝していたようだ。

晴れのブレザーコートに身を包み、観衆の拍手の嵐にうずまった一時こそ、スポーツマンとしての最大の感激であり、一生涯忘れ得ない思い出となろう。

ヘルシンキを終えて苦斗の4年、汗と血のトレーニング我々はこの日のために斗ってきたのだ。

日の丸が一しほ目にしみる。

11月23日(晴天)

オリンピック競技第1日を迎え、行き交う選手にも緊張の色がみえてきた。

陸上には先陣として気の毒だが、なんとかして好成績をあげてもらいたい。しかし成績は予想外に、不振、前途多難を思わせる。ただ重量挙げの健斗に幾分元気づけられる。

水泳は別段変わったこともなく、午前、午後予定通りの

練習を行った。

小池ヘッドコーチは陸上の成績に左右されることなく、水泳独自の勝利の道を歩み続けるようにと選手全員を激励した。

11月24日(晴)

午前はリッチモンド、夜はオリンピック・プールで練習を行った。オリンピックの開会に刺戟されてか、選手の練習態度にはなにか緊張の色がみえはじめた。試合の日が近づくとつれて各国チームの監督の往来も激しくなる。

今日あたりから、報道陣の試合の予想がはじまったのか、入り変り、たち変り、種目別の予想を聞きにくる。古川の平泳と100のヘンリックスの氏名はどこかの国の監督もあげている。そのほか日本選手では山中の名がみられた。全般はやはり豪州選手の人気は圧倒的だった。

午後6時よりFINA役員招待をメンジース・ホテルで行った。

チームからは練習の都合で小池ヘッドコーチ、太田コーチは欠席、田畑、南部、清川、根上、小柳、織田、古橋が出席した。FINAはネグリー会長はじめ、フィリップス、リッター、キップス氏等いずれも夫妻で出席した。席上、真珠のネクタイ・ピン、クラブタイ各1個をプレゼントした。

11月25日(曇天)

練習は午後2時~3時リッチモンド、夜9時~10時オリンピック・プールが割当てられたが、リッチモンドのみは練習を行い、夜の練習は時間の都合と、選手の調子からみて中止した。選手の希望で、本日よりマッサージ(2人)を頼むことにした。

就寝 9時30分

11月26日(曇天)

午後の練習 2時から3時 リッチモンド・プール  
夜間の 7時から8時 オリンピック・プール  
リッチモンド・プールはボイラーの故障で水温が幾分低かった。

夜の練習割当は、決勝が夜間に行われることを加味して割当てられたもので、大いに役立った。

午前9時30分よりFINAの総会がメルボルン大学で行われ、南部、清川、小池、古橋が出席した。議題は主に西独からの提案であるプレストの問題が討議された。(出席33カ国)各国からの活発な意見がはかれたが、結論にいたらず散会した。

11月27日(晴)

12時から1時リッチモンド・プールの練習を終え昼食は町のレストラン、オリエンタルで済ました。久しぶりに村を離れていただいた昼食は気のせいもあってか、す

ばらしくおいしく感じた。

昼食後は午後の練習前の気晴らしに町を散歩した。日本の水泳選手とみるやサインを求める小供が殺到した。心よくサインを引受ける選手は、ここでも日豪親善の役割を果たした。

午後は3時30分から5時30分出までボールペアー・プールで練習を行った。

11月28日(晴 天)

朝の体操を終えて、小池ヘッドコーチより激励の言葉があった。

陸上の惜敗に日本村は静まりかえっている。しかし水泳チームは全員元気で張り切っている。

オリンピック・プールは試合前の整備もあって、割当時間は30分にけずられた。

リッチモンド・プールはいつもと変わらず6時より2時間日本チームのためにさかれた。

今日もまた選手は最後の仕上げに余念がない。選手の誰しもが勝利の夢を追って泳ぎつづけている。

いよいよ明日に迫ったレースでの活躍を心から期待する。7時45分より二宮君の誕生祝いが夕食を兼ねて日本食堂で行われ、25名が二宮君の将来の幸福と健康を祝った。この会があたかも水泳チームの幸先を祝うようで、いかにも盛大だった。

11月29日(曇, 晴, 時々雨)

いよいよオリンピック水泳競技の日がきた。

みんな決して好調とはいえないが、一致団結力の限りをつくして、期待に報いたい。

○男子100m自由形予選

古賀	2組 ①	57.7	入賞
鈴木	3組 ③	58.4	
谷	4組 ②	57.1	

○男子100m自由形準決勝

谷	1組 ③	57.4	入選
鈴木	" ⑤	58.0	失格
古賀	2組 ⑥	58.1	"

○女子100m自由形予選

島田	2組 ⑥	1:11.8	失格
佐藤	3組 ⑥	1:10.3	"
神野	4組 ⑥	1:8.8	"

男子は全員予選を通過したものの、必ずしも好調といえず、準決勝は苦しいレースとなった。ここで古賀、鈴木は早くも失格、谷のみが決勝に進出した。この両者の失格は日本チームにとって余りにも痛手だった。チームこそ谷の決勝での活躍を祈るのみ。女子は力の差が余りにも大きく惨敗した。

今日から試合の終るまでレスト・ハウスを使用、日本

食のサービスをうけた。

11月30日(晴)

○男子100m決勝

谷 ⑦ 58.0

○男子飛板飛込予選

馬場 (10) 入選  
馬淵 失格

100メートル決勝出場の谷は孤軍奮闘したが、我に利あらず敗れた。豪州の活躍はまったくすばらしかった。

○男子100mバタフライ予選

石本  
石本は予想通り予選を通過したが、泳ぎはあまりさえていなかった。

12月1日(晴)

○男子800リレー予選

日本(鈴木, 谷, 野々下, 山中) ① 8:37.9

よく健斗1位で予選を通過したものの、短距離陣の不調から決勝ではあまり多くを期待できそうにない。

○男子飛板飛込決勝

馬場 (12) 126.87

○男子200mバタフライ決勝

石本 ② 2:23.8

作戦通り前半の100メートルを飛ばしストップをきったが、後半力つきてヨーシックに敗れ、惜しくも第2位に降ったが、立派な斗いぶりだったと思う。

○男子400m自由形予選

野々下	1組 ②	4:37.4	入選
野田	3組 ④	4:49.9	失格
山中	5組 ②	4:31.8	入選

1組に出場の野々下はよく頑張っており自己の最高記録をマーク、入選した。

期待の山中は予想通り健斗で、ローズと大熱戦を演じ注目をあびた。

第1日の不振から脱して幾分調子も上向いてきた。このままの緊張でレースを運べばあるいは予想以上の好成績が得られるかも知れない。

12月2日(晴 天)

豪州の慣例によって、日曜日なのでオリンピックのレースは一切行われなかった。

しかし水泳チームは明日から引続き試合が行われるので、各人のスケジュールに従って休養する者、練習に励む者とに分れ、今後の試合に備えた。

12月3日(晴)

○女子飛板飛込予選

津谷 53.99 入選  
弘世 56.02 失格



○男子 800 m リレー決勝  
日本 (古賀, 谷, 野々下, 山中) ④ 8:36.6

○男子 200 メートル平泳予選  
古川 A組 ① 2:36.1 入選  
吉村 C組 ① 2:38.6 入選

800 メートル・リレーは必勝を目指して頑張ったが、力及ばず 4 着の不成績に甘んじた。100 メートル自由形の結果からして多くは望めなかったが、ソ連チームに敗れたのは意外だった。

待望の 200 メートルの平泳は古川の復調、吉村の力泳によって予選は見事通過したが、記録的にはあまりにもさびしく、それにもましてグライエの出現が気がかりになった。

12月 4 日

○男子 100 m 背泳予選  
富田 2組 ② 1:06.4 入選  
長谷 3組 ③ 1:06.3 "  
二宮 4組 ⑥ 1:09.2 失格

○女子 400 m リレー予選

日本 (神野, 和田, 佐藤, 大高)

女子競泳にとって唯一のチャンスであった 400 メートル・リレーも空しく敗れ去った。日本の女子の将来にはなすべき課題が山積みされている。甘い気持ちでオリンピックに出場することは禁物だと思う。

○男子 400 メートル自由形決勝

山中 ② 4:30.4  
野々下 ⑦ 4:38.2

山中はローズ, ブリーンと隣り合せてのコースで、終始熱戦を展開、一時は優勝を思わせる場面もあったが、ローズのスタミナとスプリントに 1 日の長があり、遂に及ばなかった。惜しい一戦だった。

○女子飛板飛込決勝

津谷 ⑧ 103.12 点

日本選手の飛込は大会前から人気の焦点で、多くの期待を集めていたが、インドアー・プールに不慣れなため、試合運びにむらがあり、惜しいところで入賞を逸した。

12月 5 日 (晴)

○男子高飛込予選

馬場 (10) 70.76 入選  
馬淵 (11) 69.76 "

○男子 1,500 m 自由形予選

山中 1組 ② 18:04.3 入選  
青木 2組 ② 18:36.0 "  
八木 4組 ③ 18:57.3 失格

○男子 100 m 背泳準決勝

富田 1組 ⑤ 1:06.5 失格  
長谷 2組 ⑥ 1:06.5 "

日本にとって有利な高飛込は、まず 2 人とも予選を通過、1,500 メートルは山中最初からコースと並び予想外の大記録で入選、400 メートル同様決勝での大活躍が期待された。山中の好成績に刺戟されたか、青木もまた自己の最高記録で決勝に進出した。ただ八木だけが不調から遂に脱しきれず、失格したのは惜しかった。

背泳は決勝への進出も夢ではなかったが、2 人とも今一步のところで敗れた。この種目は今後相当の勉強を重ねないと永遠に世界の一線から遅れそうだ。タイラー、モンクTONの泳ぎを学ぶべきだ。

12月 6 日 (晴)

○女子高飛込予選

津谷 48.45 入選  
弘世 46.15 "

○男子 200 m 平泳決勝

古川 ① 2:34.7  
吉村 ② 2:36.7

グライエはじめ飛び出し優勝をねらったが、さすがは古川、貫禄十分終始自己のペースで泳ぎ切り、宿望の大日章旗をメインマスト高くかかげてくれた。4 年間の苦闘ついにのみり、古川にしてはじめて「君が代」が奏せられた時には一同感激にふるえた。つづく吉村も 2 位にくだり込み、さながら日本デーの感があった。

○男子高飛込決勝

馬場 (11) 123.69  
馬淵 (12) 120.20

大いにチャンスのあった種目だったが、惜しいところで失敗をくり返し、11. 12 位の最下位に終わった。

12月 7 日 (晴)

○男子 1,500 m 自由形決勝

山中 ② 18:00.3  
青木 ⑦ 18:38.3

山中、ローズ、ブリーンの出場するこの種目は、今大会の最大の関心と呼んだ。

最初ブリーン飛出せば、ローズ、山中、懸命にこれを追う。3 人の力は全くの互角である。400, 600 を過ぎても 3 人の一線はくずれない。しかし、ついに 900 メートルを過ぎるころからブリーンと山中が遅れ、1,200 メートルあたりからブリーンは山中からさらに離れ、ほとんど勝負は決まったかのごとくに見えたが、1,300 メートルのターンをするや山中はローズを目ざして快心のライス・スパート、ローズとの距離を一身長までにつめたが遂にローズに名をなさしめた。山中にとってはまったくチャンスをのがしたレースで惜しまれた。

この1,500メートルをもってオリンピック水泳競技を全部終了した。

ヘルシンキで惨敗したその日からメルボルンでの必勝を期して、一致団結頑張りを続けてきた。この4年間は我々にとって全く苦しみ連続だった。その努力の甲斐があって予想通りの成績を収め得たことは喜ばしい、しかし冷静に考えてみれば、今回の成績は決して満足すべきものではない。

次はローマだ。メルボルンの貴重な体験をもとに、さらに一步前進しなくてはならない。お互に頑張ろう。

プールから帰って、ビールとにぎり飯でささやかなげざらいの会を開いた。勝った者、負けた者にとってもメルボルン大会は大きな収穫であったと思う。

12月8日(曇一時雨)

選手は連日の健闘で疲れ、朝ゆっくり寝こんだ。午前、午後とも自由時間で久しぶりの休養だった。夜はFINA主催 Intercontinental Jala がオリンピック・プールで行われた。例回のごとく大陸対抗リレーが人気をよんでスタンドは満員だった。各国とも出場者は自由で文字どおりのなごやかなカーニバルだった。

午後閉会式が主競技場で行われ、16日間にわたって燃えつづけた聖火は消えて、第16回メルボルン・オリンピック大会は終幕をつげた。

12月9日～12月13日

豪州は交通機関が非常に少いため、ほとんど動きがとれない。今回は特にオリンピックとあって何処も満員の始末である。当初の国内旅行、あるいは帰りを利用しての親善旅行をも計画したが、費用の点、それに足の問題で、残念ながらあきらめざるを得なかった。

そんなぐあいでも結局、11日にバスでのサイトシーニング1回のみで終わった。

この間水泳大会への招待は幾通となく豪州各地から寄せられたが、日程の都合でお断りした。

10日はFINAの会議がメルボルン大学で行われ、日本からは安部、清川、小池、太田、根上、鶴田、小柳、古橋が出席、正式に平泳、バタフライのスタート、ターニング直後の水中での一掻きが決定し、潜水泳法は禁止された。その他役員の変更があり、安部氏が副会長、清川氏がテクニカル・コミニティーの名誉幹事に決った。

12月14日～12月15日

いよいよメルボルン出発の日がきた。当地にきてから1カ月、今去るとなると何か名残り惜しい気がする。

多数の邦人、知り合いになった豪州人達の見送る中をメルボルン最後の日航機は発った。

ダーウィン、マニラを経て、15日1カ月ぶりに日本の土をふんだ。

飛行場では出発に劣らぬ盛大な出迎えをうけ、バスで解団式場東京体育館に向った。

なお水泳チームの解団式は、その後明治記念館で行われ、水入らずの1時間の後、四ッ谷祥平館に帰り家族、友人に迎えられて、長い合宿生活から別れていった。

(古橋記)

## 水 球

メルボルン大会の参加チームを御紹介致しますと、アメリカ、ソ連、ユーゴスラビヤ、ハンガリー、イギリス、ドイツ、イタリア、ルーマニア、シンガポール、オーストラリアの以上10チームでありました。

試合の方法は、この10チームをA・B・Cの三つのグループに分けまして、Aグループはユーゴスラビヤ、ソ連、ルーマニア、オーストラリアの4チームで、Bグループはハンガリー、アメリカ、イギリス、またCグループはイタリア、ドイツ、シンガポールの各3チームという組合せで、各グループごとにグループ・リーグ戦を行い、全チームが互いに試合をしまして、その各グループの上位2チームが決勝リーグ戦に進出することができ、6チームまた決勝リーグ戦を行うような方法をとっております。

ただし、この決勝リーグ戦でも各チームは互いに試合をするのですが、前のグループ・リーグ戦(つまり予選リーグ戦)ですでに試合をしたチームとは再び繰返して試合を行わず、そのときの勝敗の結果がそのまま決勝リーグ戦の結果として記録されるということです。そして勝利チームには2ポイント、引分けの場合には両チームに各々1ポイントづつを与え、その得点数で順位を定めております。またこれが同点の場合には得点数で決定する。つまり、この方法は、各チームに対して、得点数に100を乗じて、失点数で割って大別する。しかしもし得点数の方法でやってなお同点の場合は、新たに2チーム間において他日に試合を行い、勝敗を決定する。

なお、この試合は勝敗の定まるまで延長競技を行い、結果をただすようにしています。以上がメルボルン大会の水球競技の試合方法であります。

ではここで競技経過について、その結果を御紹介致しますと次の通りです。

A グループ

	ユーゴ	ソ連	ルーマニヤ	オーストラリア
ユーゴ	×	○	○	○
ソ連	●	×	○	○
ルーマニヤ	●	●	×	○
オーストラリア	●	●	●	×

B グループ

	ハンガリー	アメリカ	イギリス
ハンガリー	×	○	○
アメリカ	●	×	○
イギリス	●	●	×

C グループ

	イタリア	ドイツ	シンガポール
イタリア	×	○	○
ドイツ	●	×	○
シンガポール	●	●	×

11月28日

○ 2.00 p.m.

ルーマニヤ 4  $\left\{ \begin{matrix} 2\sim 1 \\ 2\sim 1 \end{matrix} \right\}$  2 オーストラリア

○ 3.00 p.m.

ドイツ 5  $\left\{ \begin{matrix} 2\sim 0 \\ 3\sim 1 \end{matrix} \right\}$  1 シンガポール

○ 7.30 p.m.

ソ連 2  $\left\{ \begin{matrix} 1\sim 2 \\ 1\sim 1 \end{matrix} \right\}$  3 ユーゴスラビヤ

○ 8.30 p.m.

アメリカ 5  $\left\{ \begin{matrix} 3\sim 3 \\ 2\sim 0 \end{matrix} \right\}$  3 イギリス

11月29日

○ 3.45 p.m.

ハンガリー 6  $\left\{ \begin{matrix} 4\sim 0 \\ 2\sim 1 \end{matrix} \right\}$  1 イギリス

○ 4.45 p.m.

イタリア 7  $\left\{ \begin{matrix} 3\sim 1 \\ 4\sim 0 \end{matrix} \right\}$  1 シンガポール

○ 9.15 p.m.

ソ連 4  $\left\{ \begin{matrix} 2\sim 1 \\ 2\sim 2 \end{matrix} \right\}$  3 ルーマニヤ

○ 10.15 p.m.

ユーゴスラビヤ 9  $\left\{ \begin{matrix} 4\sim 0 \\ 5\sim 1 \end{matrix} \right\}$  1 オーストラリア

11月30日

○ 10.30 a.m.

ユーゴ 3  $\left\{ \begin{matrix} 2\sim 2 \\ 1\sim 0 \end{matrix} \right\}$  2 ルーマニヤ

○ 11.30 a.m.

ハンガリー 6  $\left\{ \begin{matrix} 3\sim 1 \\ 3\sim 1 \end{matrix} \right\}$  2 アメリカ

○ 4.00 p.m.

ソ連 3  $\left\{ \begin{matrix} 3\sim 0 \\ 0\sim 0 \end{matrix} \right\}$  0 オーストラリア

○ 10.00 p.m.

イタリア 4  $\left\{ \begin{matrix} 1\sim 1 \\ 3\sim 1 \end{matrix} \right\}$  2 ドイツ

以上のごとくであり、

A グループは、ユーゴスラビヤ、ソ連

B グループは、ハンガリー、アメリカ

C グループはイタリア、ドイツ

と6チームが決勝リーグ戦に進出致しました。すなわち、

決勝リーグ戦

	ハンガリー	ユーゴ	ソ連	イタリア	アメリカ	ドイツ
ハンガリー	×	○	○	○	○	○
ユーゴ	●	×	○	○	○	分
ソ連	●	●	×	○	○	○
イタリア	●	●	●	×	○	○
アメリカ	●	●	●	●	×	○
ドイツ	●	分	●	●	●	×

12月1日

○ 2.40 p.m.

ソ連 3  $\left\{ \begin{matrix} 1\sim 1 \\ 2\sim 1 \end{matrix} \right\}$  2 イタリア

○ 10.40 p.m.

アメリカ 1  $\left\{ \begin{matrix} 0\sim 3 \\ 1\sim 2 \end{matrix} \right\}$  5 ユーゴ

12月3日

○ 4.50 p.m.

アメリカ 4  $\left\{ \begin{matrix} 1\sim 1 \\ 3\sim 2 \end{matrix} \right\}$  3 ドイツ

○ 9.30 p.m.

ハンガリー 4  $\left\{ \begin{matrix} 3\sim 0 \\ 1\sim 0 \end{matrix} \right\}$  0 イタリア

12月4日

○ 3.40 p.m.

ユーゴスラビア 2 {1~1} 2 ドイツ

○ 9.00

アメリカ 2 {1~1} 3 イタリア

12月5日

○ 4.30 p.m.

ソ連 3 {2~0} 1 アメリカ

○ 12.20 p.m.

ハンガリー 4 {2~0} 0 ドイツ

12月6日

○ 3.25 p.m.

ソ連 0 {0~2} 4 ハンガリー

○ 9.55 p.m.

ユーゴスラビア 2 {0~1} 1 イタリア

12月7日

○ 2.00 p.m.

ドイツ 4 {3~3} 6 ソ連

○ 9.20 p.m.

ユーゴスラビア 1 {0~2} 2 ハンガリー

予選リーグ戦の結果がスコアされるもの、

ユーゴスラビア 0~2 ソ連

ドイツ 2~4 イタリア

ハンガリー 6~2 アメリカ

次に 7, 8, 10位決定リーグ戦を見ますと

	イギリス	ルーマニア	オーストラリア	シンガポール
イギリス	×	○	○	○
ルーマニア	●	×	○	○
オーストラリア	●	●	×	○
シンガポール	●	●	●	×

12月9日

○ 4.25 p.m.

オーストラリア 3 {1~0} 2 シンガポール

○ 5.25 p.m.

ルーマニア 2 {1~2} 5 イギリス

12月7日

○ 3.00 p.m.

ルーマニア 15 {9~0} 1 シンガポール

○ 4.00 p.m.

イギリス 5 {2~0} 2 オーストラリア

○ 5.00 p.m.

シンガポール 1 {0~3} 7 イギリス

なお予選リーグ戦の結果がスコアされるもの

ルーマニア 4~2 オーストラリア

以上が全試合の結果であり

優勝 ハンガリー

2. ユーゴスラビア

3. ソ連

4. イタリア

5. アメリカ

6. ドイツ

7. イギリス

8. ルーマニア

9. オーストラリア

10. シンガポール

以上のような結果でありました。

では、ここでこれら全試合を通じての各国の水球の現状および動向について御説明申し上げますと、全般的にいえることは、ほとんどがバスケット方式に近いものになっており、ハーフラインの向う側で人がプレイをしており、攻撃側の1人位がハーフラインのわずか後方に位置を取ってボールの行きづまったような場合には、そこへボールを返してまた攻撃して行くといった具合です。しかし、防禦側がゴールキーパーを中心し約10ヤード位の円形をえがいたような形でマークを2メートル近くはなしてあり、突込みを押えているので、ただ単に動き回っても思うような所へは入って行けず、またやたらに突込んで行ってもいたずらに混み合うばかりで、思うように攻撃をすることができませんので、動きながら盛んにクロス・パスを交換しつつ相手を自分の方に引きつけ、ゴール前をできるだけひろげて、そこへ突込んで行っております。

なお大体のチームが、ゴール前には、やはり、フローティング・フォワードを置いておりますが、これはいままでのような意味のフローティング・フォワードではなく、前に申しましたように、マークを2メートル位はな

して円形のような状態でドリブルを押えている関係上、シュート圏内に入るためのチャンスメーカーとして、これを使用しております。

勿論チャンスがあれば、どんどんシュートはしておりますが、だいたいパス、マシンの価値が大きいようです。しかしこのフローティング・フォワードからの得点は、全試合を通じて誠に少く、相手のしつようなタックルのためシュートはできないような有様です。これを見ても半静止的な状態でプレイをするということはほとんど不可能であるといつてよいと思います。

また攻撃側はボールを非常に大切に取扱い、チャンスができるまで決してシュートせず、シュート圏内までボールを持って行っても、無理をせず、駄目な場合には必ず後方へボールを戻し、また前へ進めるといった誠に慎重な攻撃ぶりです。そのうえスタミナの消耗を考えて、普通に動いているときは左程のスピードをださず、相手につかまれない程度のスピードで泳いでおり、チャンス・メーカーとして動く場合が、チャンスとなった時には出足を利用して鋭く泳いでおります。

これは相手方のペースを乱すとともに、無駄なスタミナを消耗することなく、非常に合理的な動き方だと思います。

次に速攻方法について申しますと、攻防転換、つまり、相手方のボールを途中でカットするか、シュートをゴールキーパーが阻止するかのチャンスを利用して、素早い判断でタイムリーに飛び出して一番前に飛び出して一番前に飛び出して行った者へ、ロング・パスを送って相手方の防禦体勢のととのわなに攻撃をするといった方法です。しかしこの場合にはほとんど全員が動き、攻防ところをかえる時の混乱を利用して相手より1人でも多く、飛びだしてノーマークを作り、それを利用してゴール前でボールを回しゴール・キーパーを左右に振って攻撃をしております。

また、フリー・スローは最高度に利用しており、ゴール前では素早くスローを行い、得点のチャンスとしております。

次に防禦方法について申し上げますと、前にも少し述べましたごとく、マークはだいたい2メートル位はなしておりますが、あくまでマン・ツー・マン方法のマークであり、原則としてマン・ツー・マン方式であります。つまり、シュート圏外ではマークをはなして、良い位置へのタイムリーな突込みを押えておりますが、シュート圏内(5~6ヤード)においては水あきをなくし、ガッチリと相手方をマークしております。そしてボールのない相手には、フローティング・フォワードに対してもまた動いている相手に対しても、アウト・サイドにマーク

しており、ボールをカットできる体勢を取っており、動いている相手に対しては、これをゴールに対してサイドへ押すようにし、ゴール・キーパーの守備範囲をせばめまたフローティング・フォワードに対してはインサイド・マークで相手にタックルして、これをつぶすかカット体勢をとって、ワンサイドを完全に守っております。しかしボールがくるまではやはりアウトサイドマークでパスされたボールをカットする体勢をとり、カットするか競り合いに持って行くかしてボールを獲得するような方法をとっております。

また退水者が出て五分五分の均衡が破れ、攻撃側より小人数で防禦する場合には、ゾーン・デフェンスを使用しております。この体形はほとんど全部が前列2人、後列3人といった配置をとっており、前列の2人はボールに鋭くタックルに行き、ボールをサイドに回すようにし、サイドの2人はボールにタックルせず、位置を取って一方をあけて、ゴール・キーパーにこれを防禦させ、逆サイドはボールが自分のいる場所から他に移るまである程度体をうかして、片手でこれを防ぎ、逆サイドにシュートさせないようにしており、真中の1人はフローティング・フォワードをマークするようにしております。

ここで彼らのとっておりますゾーン・デフェンスの攻撃方法についていえば、やはり盛んに、クロス・パスを行い、ある時は早く、ある時はおそくパスを行い、相手を動揺させ、またボールを持った者がシュート・モーションを起して相手を十分自分の方に引きつけ逆サイドを拡げて、そこへ早いパスを送って、コーナーへシュートを決めるか、ゾーン・デフェンスの真中に入って行って動きながら相手をけんせいして、フローティングにパスして、ゴール・キーパーの逆をついて攻撃しています。

以上がほとんどのチームに共通した、ゲームの動向であります。

では次に試合を通じて非常に印象に残ったことを御紹介致しますと、

- (1) コンビネーションの良いこと
- (2) タイミングの良いこと
- (3) ボールを非常に大切に取扱うこと
- (4) 試合中全員が頭をあげて泳ぎ、フィールド全体を良く見て泳いでいること

などで、要約すれば水球を完全にマスターしており、無駄のないプレイを行なっております。これは聞くところによりますと、どのチームでも水球歴の永い人達ばかりで10~15年選手といった人達で固めている点、また国内試合も盛んで、大体90~100試合程度を年間に消化している点を考え合せますと、ゲーム・センスが非常にすぐれているのはうなずけることです。

また次に基本的なもののすなわち、

- (1) ボール・ワークの非常にすぐれていること、つまり、正確なパスワーク、遠投力のすぐれていること、ハンドリングの良いこと、及びスナップの強いことなど。
- (2) すぐれた浮力をもち、いかなるタックルにも沈むことなく、手足を十分に活用して浮きをとっていること。
- (3) 泳体力のすぐれていること、つまり、身長は6尺以上 25〜6貫といったところで、泳力も大体61〜62秒位の程度です。

以上を総合致しますと、基礎的な技術を実に正確にマスターしており、それを基盤として、高度のフォーメーションを組立てているといった感じを強く受けました。

ではここでこれに対する対答として、日本の水球の今後の方向を考えてみますと、やはり徹底的に動いてプレイをするということにつきると思われまゝ。なぜならば半静止的な状態で彼らごとき大きな連中を向うにまわして、ぶつかり合ったのでは、体力差からくるハンディキャップはさげられないものと思われまゝ。しかしこれが動いていれば、つかまれたり、押えられたりすることも少く、プレイも楽にできると思われまゝし、また泳力に対しては彼らに劣らないところまでもって行くことができるので、左程の圧迫感をうけずにプレイができますと思われまゝ。ですから当然今後の日本の素材にも泳体力というものが一番重要不可欠な要素として取り上げねばならないと思われまゝ。前述のごとく動く水球になってきますと、今までのような職能分担的な考え方、すなわちフォワードは攻撃を受けもち、バックは防禦一点ばりであるというようなことではなく、どこかのポジションでもプレイのできる、オールランダーのプレイヤーをもち、スピードのある鋭い泳ぎと、良くコントロールされたボールワークが必要となってくるわけですね。しかし現在の彼らの水球は従来行なわれていた方式のフローティング・システムの水球の進歩の極点においてこの殻を打研って生れでてきたものであり、その特徴は機動性であり、組織性であり総多性が強く要求されているので従来行なわれたフローティング・システムの個人技術の巧みさ、強さがなくてはこれをこなすことができないと確信いたします。ですから基礎技術の向上をはかることが先決問題であると思われまゝ。

次にゲーム・センスの養成の問題ですが、これは試合数を増加して、その試合を通じて学び取るべきものだと思います。現在のような最高の20試合程度で満足することなく、公式試合に頼ることなくどんどん練習試合なりオープン・ゲームなどをどんどんふやして行き、年間少

くても50試合程度は消化するようにして行かねばならないと思われまゝ。そして、このゲームを通して、ゲーム・センスの養成と、コンビネーションを確立する必要があります。また、現在のようにシーズンが1年の約半分まで終り、次のシーズンを待っているようなことでは問題にならないと思われまゝ。インドア・プールがないため、インドア・シーズンを持つことが不可能であります。だからといって冬の間を練習することなく無為に送っていることが進歩の度合いをおくらせているようにも思われまゝ。しかしこの間にも陸での練習方法もあり、またバスケットやバドミントンをやることによってボールを常に手からはなさず、こういった水球に近いような陸上のゲームをやることによって、ゲームセンス、及びコンビネーションの助長にも益があり、またハンドリングの一助ともなることを大いに考える必要があります。そしてどこまでも国内的な物を考えず常に対外的な見地になって大いに飛躍して行かねばならないと思われまゝ。

(鶴田記)

○競泳中パンツがとれたら失格かどうかと言う問題が実際に英国で起ったが、種々議論の末失格でないことになったらしい。競泳には規定の水着又はパンツを着用しなくてはならないから厳格な意味から言うとならぬ英国の場合は反則になる。日本でも此の様な問題が起ったことがあるらしいが不問に符されているらしい。ターンでひと休みして、しめ直した事実はある。何れにしても選手は競技にのぞんで自分の服装を点検(?)をする必要があるかも知れない。

○外人がのんびりしているのか、日本人がこまか過ぎるのか分らないが、メルボルンのオリンピックプールは公称50米だが実際は8.5ミリ短かいそうである。日本だったら大問題になる所だが、真相は此のプールはヤードとして作られ、それを50米にして使うために作った、臨時的端壁がうまく出来てなかったためだそう。

FINA総会で此のことが取り上げられたとき、フランス代表のルモアン氏が「50米に対して10ミリ程度の誤差は認めてもよいだろう」の一言に誰も異議なく認められたが、此の事件のそもその起りは我が代表の安倍さんが「オーストラリアの選手は此のプールで物凄い記録を出したそうだがプールが短いのぢやないか」と笑談を飛ばしたところ、それぢや計ってみようと言うことになって始めて短いことが分ったのだそう。此の位の「のんびり」さがないとオリンピックのような大競技会はとてもやれないらしい。

# F.I.N.A. 関係報告

安部 輝太郎

1) 11月15日 到着早々F I N A幹部との折衝を開始したが、予定されていたホテル・オーストラリアでなく、小生丈はオリンピック村に泊ったのでこの点大会が了る迄何彼と不便が多かった。着いて早速豪洲のフィリップスに電話して「一体君ん所の選手達には何か乗り移ったんだい」と聞いたが「別に如何ということはない」というので、「馬鹿にタイムが良いかプールはホントに50米あるのかね?」と野次ったら「嘘だと思ふなら君自分で測って見るよ」と答えたが後日実際に少し短かったことが判ったのは飛んだマグレ当りであった。

各種目競技の予定時間表が作成発表され、大体その通りに行われたのは今回が始めてであった。尤も日本側が散々ヤイヤイ言ったからの事であったが。

練習時間割が翌日の分を前日の夕方であれば出来なかった事は練習時間割が翌日の分を前日の夕方であれば出来なかった事はチームに取って大変不便であった。之は今後少く共2日前の分を発表させなくてはならぬ。

2) 11月20日 第1回の国際競泳専門委員会を開いたが、スペインのモレラは今回不参で、ハンガリーのライキは来てはいたが動乱で家族の生死も不明で放心状態にあって出席せず、尙日取を急に一日繰上げたのに連絡不十分のためフランスのデシュマンに通知が届かず、その為出席者は米国のジョンリンと小生、豪洲のグランヂと南亜のゲッツとで定数の5名に達せず、問題をハランダ。これは他の専門委員会でも同様な困難が感じられたので後の総会で総数8名を10名に増員することとした。

議長ジョンソンが如何と脱線が多く、仲々議事がマツマラぬキライがあった。

一応各国からの提案に対して、委員会としての答申を作成し、直後これにデシュマンの賛否意見並にモレラの書面回答を付してどうやら格好を付けた次第であったがジョンソンの主張した長短両世界記録は後に総会で否決を喰ったし、平泳のスタート零掻き説も敗れたし、オリンピックにメドレー・リレーや4×100米リレーを入れると案も理事会で握りつぶされるし、ジョンソンの主張が事毎に敗れたのは見るも気の毒であった。

この委員会にシンクロのオルセン伯母ちやんが乗り込み、是非国際シンクロ委員会を作る様努力して欲しいと

懇請あり、これ丈はジョンソンの面子が立つことになった。

## 3) 11月23日 理事会開催

A) 前回議事録確認書、型の如き議事を了り、大会の実行委員会兼上訴審判には理事会がそのまま当ることとし、(これは後に総会の承認を得た)大会役員としてはネグリ会長の許に、レフェリーはザルフォア(瑞典)デラヴ(白耳義)が交替で当ることとし、審判主任はフィリップスが人間審判、リッター(米)が機械審判の其の主任を努め、計時員主任は小生とジョンソンが当ることとなった。

尙ターニング審判主任はグランヂ(豪洲)、飛込審判長はマトヴィエフ(英国)、水球はスコット(英国)で他は豪洲側が当った。続いて各専門委員会の答申案に対する審議に入ったがこれらも後に総会に於て最終決定を見ているので茲では一応省くことにする。(尙この会で認められたオリンピック前の世界記録は別表通りである。)

オリンピックプールの長さに付いて質問した処、実測値は南側に於て49,9906米北側に於て49,9924とあり、測定は1/100吋迄読みを取りそれを1呎=0.30479449米にして換算した由であるが、こんな測定法や測定値では日本では公認プールとして認められないとやってや

12月8日夜のF I N A , G A L Aには例によってアジア関係委員を小生が引請けさせられた。

## 4) 11月26日 総会第1日開催

例によって型の如き議事進行であったが理事会議事録採択に当り、プレスト、バタフライ兩種目に次のオリンピックから各3名エントリーを許され度しとI.D.C.に要求することを決議した。

一部水球審判員をF I N Aの負担で今日招請したことに付き質問も出たが結局理事会の措置は承認された。これもF I N A財政が比較的豊かであるからである。加盟会費のA B C級別差等を廃すべしという意見も出たが現状維持と決定した。

今次大会に関し、実行委員数を少し増したらどうか(パキスタン)今後競泳池を飛込池との水面は同一高さとするべきである。又競泳プールの両側には $\frac{1}{2}$ 米の空地を設



けるべきである（西独）等の意見も出たが、今度のプールが短いのをどがするかという問題が出たが、結局このまま認めるよう他にないということに決定。フィリップスから55ヤードのプールに木のブロックを入れて米としたので、水でふくれて短くなったと釈明あり、今後はプールの長さに公称と実測とのトレランスを設けるべきである。（ジョンソン、安部、ルモアン）という事となった。

次にケニア、中共等の新加盟可決。

続いてルール改訂審議に入った。

A-1 「過去の会長は理事会の名誉会員とし、発言権はあるは投票権はないこととする。又現役理事に再選されぬこと」という米国の提案をリッターが撤回し、代りに理事会提出のA-2案を支持すると発言。（これは後にリッターがFINAを脱退する一つの原因となったものである）

A-2 理事会案は「過去の会長は現役理事と同様の権限を以て理事会メンバーたること」というのであった。即ち米国案A-1では、現副会長デラウヴ（白）の如きは名誉会員にはなるか投票権は失うというのに対し、A-2案では投票権を持ってしかも終身メンバーとして落選の恐れがなくなるのでその実質的な開き委絶大である。

スコット（英）から「名誉主事、名誉会計、会長は共に絶対中立であるべきだから、当該国代議員でないこと」という修正案が出たが反対にポーランドの如きは却って自国の利害を忘れさせぬ方が良いといい出す有様で、結局理事会案が可決。スコットの修正案緊急動議の扱いを受け採択に至らなかった。

A-3 国際シンクロ委員会の設立は賛成43、反対14、棄権9で可決された。（日本賛成）

A-4 「政府その他公共団体から供与を受けて基本泳法を教へることはアマチュア資格に抵触しない」という碼典の提案は大討論を巻き起し、チエコ、ルーマニア両国代表にはI.O.C.もおって共に反対、結局票決に入り、賛成30、反対37、棄権1で否決された。（日本反対）

A-5 理事会提案のFINA憲法修正案は可決された。但しシンクロをも加へることとした。

A-6 帰化してから3年その国に住まねばオリンピック出場権が得られなかったのは、1年に改められた。

S-1 着順とタイムが逆に出た時は記録された実際の総合計タイムの平均値を両者のタイムとすることになった。

S-2 平泳の潜水中のストロークは手足共スタート及びターンの一擡に限るという西独の提案は、之亦議論百出したが決定迄少し待たうという説も出た時、会長が「飯の後迄待たう」といって午後を持ち越された。

潜水禁止に小生が賛意を表したので、ソ聯は意外だったと驚いていた。

午後の票決では反対はジョンソン外1名で西独案が可決された。

S-3 同様バタフライと凡て腕のリカバリーは水の「上」という事に決定した。然し足は潜水中何回キックしても構はない。

尚序に平泳に手足共「左右対象」にストロークせよという小生年来の主張も可決された。又ターン及びゴールの両手は「同一水平面上でタッチする」ことに決められた。

S-4 西独提案のバタフライではドルフィンでも蛙キックでも、混合しても良いというのは勿論否決された。序にフィリップスから「ドルフィンストローク」と改称すべきだ、蝶々なんて水泳に関係無いぢやないかという説が出たが、これはそれぢやこの次「カンガルーキック」なんてのが出来たら又名称を代える気か？ 魚の名が良いなら「飛魚ストローク」ぢやどうだと小生との間に応酬、結局改名はせぬことになった。

S-5 背泳スタートで、足は水面下に位置、オーバーフローに立っては不可という西独提案は可決。

S-6 スペインの世界記録に関する案は否決。

S-7 同じくスペインの50米自由形の世界記録を認めようという案も否決された。

次にI.O.C.提案に至る飛込規則修正案の審議に入ったが、第9項以下を丸飲みすることとなった。これは別途飛込委員会の方へ流しておく事とする。

続いて今大会に用いるオメガリッター判定機のデモンストレーションあり。人間審判及びタイマーを予備として並用する条件の下に機構判定を公式に認めることになった。

次には世界記録に関し、競泳専門委員会の長水路、短水路の二本建案と、理事会案である長水路一本建案との間に論戦展開、小生は理事として理事会案を作らせた本人であり、又一方これ一本槍では危い、又元の様に長短両水路ゴチャ交ぜに帰る恐れがあるというので専門委員会ではジョンソンの二本建案に賛成しているので、仲々立場がデリケートで発言にも苦心を要したが、「ドチラでも良いから要はゴチャ交ぜだけは止める」と強調。結局大勢は長水路一本建に圧倒的多数で決定を見た。

それを見越して日本は米国と共に二本建案に賛成して置いたのだが、誠に変な話で、結果は日本に取っては思う壺だが米国に取っては泣いても泣き切れない痛手となった。

競泳、飛込、水球（それにシンクロも）の各委員会は定員を10名とし、5名の出席を以て成立を認めることとした。

ニュージーランド案でオリンピックの背泳を他の特殊種目同様200米とする件は提案時期が遅かったので単に説明を聞くだけに止まった。

水球委員会提案は一部を除き丸呑みにしようという意見も多かったが結局12月8日の総会第2日に持ち越された。

最後にオリンピック関係に入り。

O.G.—1 今回理事会が決定した様に今後も必要に応じて水球審判員をFINAの負担で招請する件は一部に反対もあったが可決された。

O.G.—2 スペイン提案の男女50自由形を入れるという件は簡単に否決。

O.G.—3 ペルー案のシンクロを入れるというのも同様否決された。

5) 12月3日 夜の平泳予選では盛んにオミットが続出し、遂に独乙のクラインも一着に入り乍ら足首のアオリの故にオミットされ、問題を起した。その時のレフェリーはデラヴ（白）で、フィリップスと2人で「あれは不可ん」と息巻いていた。小生は8コース側を歩いて途中審判を兼務していたが、確かにクラインの足は片方が足の裏で蹴り出すのに対して、片方は足の甲で水をハタイており、ヘルシンキの時も問題になったのだが、膝迄がアホリ足というのではなく、非常に際度い泳ぎではあったが、現行規則からいえば果してこれを反則として失格せしめる丈の規則に明文がない事も事実である。独乙から抗議が出て、翌朝上訴審判会議が持たれたのだが、この時又連絡の不備で小生はこれに出席していなかった、この会議では5対3票でクラインは失格と決ってしまった、処が納らないのはリッターで、自他共に許した次期会長候補であったが「そんな不公平な判定をする様な連中とは席を共に出来ぬ。俺はFINAを辞める」と頑張り、小生にこの決定を覆すことに協力を求めた。その一つの論拠は今年6月FINAの理事会で「現行規則は不備なので、メルボルンでは平泳は成る可く大目に見やう」と申し合せたことに反するというのであった。確か

にそういう申し合せはしたので小生も極力再考方会長に考慮を求めたが、FINAとして見れば既に現場でレフェリーが判定を下し、更に翌朝上訴審判会議でそれを再確認している手前遂に方針を変へやうとしなかった。この結果、後にリッターとデラヴその他との間に正面衝突となり、リッターは遂に憤然としてFINAを去るという態事を捲き起すこととなった。

尙この4日朝国際競泳専門委員会で長水路世界記録の標準を作成したが、これは後に相当手を加へねばならなかった。どうもジョンソンが議長ではこういう数字的な事は手際よくマトマラないので弱る。

濠洲のタイラーの背泳ターンが問題になったのも4日の事で監視を厳重にさせたら、5日の準決の時から普通のターンに切り替えて了った。

6) 12月7日 上訴審判委員会兼理事会が開かれた。

a) 米国チームの提訴で、ソ聯とハンガリーの飛込審判が不公平で且つレフェリーの笛が鳴ってもグズグズとして他の審判の点数を見てから自分の点を出すのは規則違反であるというのだ。

レフェリーを招致して事情聴取したが、点の後出しは寧ろ米国の審判が初めたのだが、レフェリーの警告に米国は従ったがソ聯は最後迄従はなかった。然し現行規定では途中で飛込審判員を取り替えることは許されておらぬのでどうにもならぬとの事、又不公平という点では米国も対抗上相当なことをやって居るという。これでは仕様が無いので今後の飛込審判（7日夜が最後）に厳重警告するに止った。

b) 6日午後のソ聯対ハンガリーの水球戦が乱斗化したことに対し、FINAとして両チームに厳重戒告することとした。

c) 次で次期役員候補の選考に入らうとした処、リッターが「その話なら俺は御免蒙る」と席を立つので一同で引留めたが聞かず、却ってクラインの失格問題に関してのFINA特にデラヴの処置を非難した。新聞発表原稿を示して「俺は辞める」の一点張りで、デラヴ、ネグク会長、ルモアン（仏）と大激論の上退場して了った。頑迷ではあったが水泳に対する熱情では誰にも劣らぬ惜しい男だが、かうなっては最早如何ともなし難い。

そこで会長には古参副会長のデツリ（和）を推すこととし、理事会としては副会長とに、フィリップス、安部、ルモアン、ペルココ（伊）を推すことになった。ペルココの代りに現理事のピコネル（西）という意見もあり、ペルココはローマ大会の関係はあるが、FINAの慣習上一応理事を努めてからそれから副会長にするならすべきである、という説で

あったから結局ピコネルは理事に推薦しやうということになった、(後に8日の総会でピコネルは理事に落選して了ったのは気の毒であった。)

名誉主事、名誉会計は留任ということに方針を決めた。

7) 12月8日 総会第2日

この日は作戦上、小生と清川君に2人が日本代表として出た。

- a) 水球委員会の答申書に付き種々意見が出たが一致しないので逐条審議に入り、その詳細に関してはN.S.R.水球委員会の方へ流すが、一番問題になったゲームの開始、再開の件は、33対14票で現行法を変えて、得点の後は点を取られた方がセンターからゲームを開始することに決定。続いて開始とハーフタイム後の再開はどうするかという点では23対22票で、これは従来通りと決定した。共に日本の主張通りであった。
- b) 各専門委員会の議長、副議長、名誉主事は互選でなく、理事会が指名すること、という理事会案は可決された。
- c) 規則第55条に「競技者はゴムヒレその他速力又は耐久力を増す様な器具を用いてはならぬ」という項を加へて理事会も可決。
- d) 新ルールの適用時期は1957年5月1日とすること決定。
- e) FINA名誉役員としてハウプトマン(チェコ)リッター(米)を決定。
- f) 役員改選は下記の如く決定した。

会 長	デ ヴ リ ー (和)
副 会 長	フ イ リ ッ プ ス (濠)
	安 部 (日)
	ル モ ア ン (仏)
	ペ ル コ コ (伊)
名誉主事	サルフォース (瑞)
名誉会計	フ ザ ー ン (英)

以上万場一致

理 事	ジ ョ ン ソ ン (米)	40票
	ラ イ キ (洪)	38"
	バ イ エ ル (西独)	38"
	ヴェランヂ (伯)	35"
	フ イ ル ソ フ (ソ 聯)	34"

以上5名当選

	ゲ ッ ツ (南巫)	31票
	ピ コ ネ ル (西)	21"
	バシラリシヤイク	
	(ハギスタン)	10"

フェイヒト(東独) 9票  
以下4名落選

この他前会長として

ネ グ リ (巫)

デ ラ ー ヴ (白) の2名が加はる。

ドクニー(仏)前会長が在命だが老命で実際は出て来ない。

- g) 次回は1960年ローマとし、詳細日時は追而決定とす。
- h) 雑件に入り、次回オリンピックに対する要望等、我が清川君がN.S.R.の意を体してよく発言、好感を以て迎えられた。  
水球委員会からの提案による下記が可決された。  
イ) 各チームコーチは飛込審判員とせぬこと。  
ロ) 上訴審判はその認定によって不適當を考へられる審判員はこれを交代せしめることが出来る。斯る交代は各選手による一連の飛込みが終つた際に行うこと。  
ハ) オリンピックでは電気装置により、レフェリーがボタンを押せば各審判の採点が自動的に一斉に表示される様にして貰い度い。

8) 12月8日

総会終了後新理事会開催下記決定を見た。

a) 国際飛込委員任命

議 長	ヴァンデヴェン	(白)
副 議 長	ス ミ ス	(米)
名誉主事	マトヴィエフ	(英)
	モ ッ ト	(濠)
	マリスカル	(黒)
	ブ サ ー ル	(仏)
	マ イ ヤ ー	(澳)
	ダルマツソ	(伊)
	ブルーマンス	(独)
	エフイモヴァ	(露)

b) 国際水球委員任命

議 長	ツッカーマン	(瑞)
副 議 長	ポ リ ッ ク	(ユ)
名誉主事	ス コ ッ ト	(英)
	カ サ ロ ネ	(伊)
	デ ラ ヘ イ	(白)
	マ ホ ー ニ イ	(米)
	ラ イ キ	(洪)
	セ グ ラ	(巫)
	キステイシエ	(露)

(以下4頁に続く)

# オリンピック大会水上競技 綜合成績表

(F. I. N. A. 公式記録)

男子 100 m 自由形		5 G. パーク (加) 58.8		5 K. サントス (伯) 4:48.8	
予選1組		6 D. アラバニ (比) 60.2		6 U. バボール (比) 4:53.4	
1 J. ヘンリックス (豪) 57.3		7 ワン・シュイ・ミン(香港) 60.7		7 ワン・シュイ・ミン(香港) 5:02.0	
2 R. ハンレー (米) 57.8		準決勝1組		予選3組	
3 W. スチュアート(南阿) 59.2		1 J. ヘンリックス (豪) 55.7 (オ新)		1 J. ワードロップ (英) 4:39.8	
4 L. バランデイン(ソ連) 59.6		2 R. ハンレー (米) 56.9		2 A. プリスコー (南阿) 4:41.4	
5 H. ケーレル (独) 59.8		3 谷 詔 (日) 57.4		3 G. オネケア (米) 4:41.6	
6 K. カイコ (芬) 59.8		4 A. エミナン (仏) 58.0		4 H. ケーレル (独) 4:43.5	
7 A. ローレント (白) 60.7		5 鈴木 弘 (日) 58.0		5 H. ナスシヨン (インドネシア) 4:44.0	
予選2組		6 V. ソロキン (ソ連) 58.2		6 P. オストランド (瑞) 4:45.9	
1 古賀 学 (日) 57.7		7 P. プッチ (伊) 58.8		7 G. マルチネッツ(コロネビヤ) 4:51.4	
2 A. エミナン (仏) 58.0		8 C. ペデルソリ (伊) 59.0		8 P. マルチン(キューパ) 4:58.2	
3 V. ソロキン (ソ連) 58.6		準決勝2組		予選3組	
4 チュン・キン・マン(香港) 59.8		1 J. デービット (豪) 56.4		1 G. ブリーン (米) 4:35.7	
5 H. ブリーカー (独) 60.1		2 G. チャップマン (豪) 56.9		2 P. ダンカン (南阿) 4:46.7	
6 S. マルチネッツ(コロネビヤ) 60.2		3 L. パタソン (米) 57.1		3 K. カイコ (芬) 4:49.6	
7 P. ダンカン (南阿) 60.4		4 W. ウルジー (米) 58.0		4 野田 芳郎 (日) 4:49.9	
予選3組		5 G. ドベイ (洪) 58.1		5 G. モンセレー (仏) 4:52.6	
1 J. デーヴィット (豪) 57.2		6 古賀 学 (日) 58.1		予選4組	
2 P. プッチ (伊) 58.3		7 P. フェール (独) 58.6		1 G. ウインラム (豪) 4:34.5	
3 鈴木 弘 (日) 58.4		8 R. ロバーツ (英) 58.9		2 J. ボアトール (仏) 4:37.9	
4 P. フェール (独) 58.4		決勝		3 W. スレーター (加) 4:40.4	
5 K. ウィリアムス (英) 59.4		1 J. ヘンリックス (豪) 55.4 (オ新)		4 N. マッケチニー (英) 4:42.6	
6 D. フォード (南阿) 59.5		50……25.6		5 B. ニキチン (ソ連) 4:42.8	
7 S. パヂヤ (印) 61.6		2 J. デーヴィット (豪) 55.8		6 W. スチュアート(南阿) 4:43.0	
予選4組		3 G. チャップマン (豪) 56.7		7 B. サイラニ (比) 4:49.0	
1 L. パタソン (米) 56.8 (オ新)		4 L. パタソン (米) 57.2		予選4組	
2 谷 詔 (日) 57.1		5 R. ハンレー (米) 57.6		1 W. ローズ (豪) 4:31.7	
3 C. ペデルソリ (伊) 58.5		6 W. ウルジー (米) 57.6		2 山中 毅 (日) 4:31.8	
4 H. ラーラ (伯) 59.9		7 谷 詔 (日) 58.0		3 H. シローールド (独) 4:35.7	
5 H. マサティエウ(インドネシア) 60.1		8 A. エミナン (仏) 58.1		4 J. アッツ (洪) 4:47.6	
6 A. ジャニー (仏) 60:2		男子 400 m 自由形		5 J. コリノン (仏) 4:49.3	
予選5組		予選1組		決勝	
1 G. チャップマン (豪) 57.8		1 K. オハロラン (豪) 4:36.9		1 M. ローズ (豪) 4:27.3 (オ新)	
2 W. ウルジー (米) 58.2		2 野々下 耕嗣 (日) 4:37.4		1:03.1 2:11.6 3:20.5	
3 R. ロバーツ (英) 58.3		3 A. ロマニ (伊) 4:37.4		2 山中 毅 (日) 4:30.4	
4 G. ドベイ (洪) 58.5		4 W. ウルジー (米) 4:38.2		1:03.1 2:11.6 3:21.3	
				3 G. ブリーン (米) 4:32.5	
				1:02.6 2:12.0 3:22.4	

- 4 K. オハラロン (豪) 4:32.9  
1:05.4 2:14.2 3:24.1
- 5 K. ジョールド (独) 4:34.6  
1:03.5 2:14.4 3:26.3
- 6 G. ウインラム (豪) 4:34.6  
1:05.3 2:14.7 3:25.4
- 7 野々下耕嗣 (日) 4:38.2  
1:04.4 2:15.2 3:26.5
- 8 A. ロマニ (伊) 4:41.7  
1:04.6 2:15.6 3:29.4

男子 1500 m 自由形

予選1組

- 1 M. ローズ (豪) 18:04.1  
(オ新)
- 2 山中毅 (日) 18:04.3
- 3 W. スレーター (加) 18:51.6
- 4 G. モンセレー (仏) 19:17.4
- 5 G. ソルダス (洪) 19:44.2

予選2組

- 1 G. ウインラム (豪) 18:35.7
- 2 青木行義 (日) 18:36.0
- 3 G. オネケア (米) 19:13.8
- 4 P. ダンカン (南阿) 19:58.5
- 5 P. マーチン (キニ  
ーバ) 19:59.9

予選3組

- 1 G. ブリーン (米) 17:52.9  
(世新)
- 1:02.4 2:13.4 3:25.6 4:38.6
- 5:51.9 7:04.6 8:17.7 9:29.9
- 10:41.6 11:53.2 13:05.1 14:16.8
- 15:27.8 16:40.1

- 2 S. ザボルスキー (洪) 19:01.2
- 3 J. コリノン (仏) 19:10.8
- 4 B. サイラニ (比) 19:16.8
- 5 G. アンドロソフ(ソ連) 19:22.6
- 6 H. ライヒ (独) 19:28.6

予選

- 1 M. ガレットイ (豪) 18:27.4
- 2 J. ボアトー (仏) 18:46.6
- 3 八木清三郎 (日) 18:57.3
- 4 D. ラッドクリフ (米) 19:09.6

決勝

- 1 M. ローズ (豪) 17:58.9
- 2 山中毅 (日) 18:00.3
- 3 G. ブリーン (米) 18:08.2
- 4 M. ガレットイ (豪) 18:26.5
- 5 W. スレーター (加) 18:38.1
- 6 J. ボアトー (仏) 18:38.3
- 7 青木行義 (日) 18:38.3
- 8 G. ウインラム (豪) 19:06.2

男子 800 m リレー

予選1組

- 1 日本 8:37.9
- 鈴木 2:11.8
- 谷 2:08.8
- 野々下 2:10.3
- 山中 2:07.0

- 2 アメリカ 8:38.3
- ハンレー 2:08.7
- ジェコー 2:08.7
- タナベ 2:12.2
- コンノ 2:08.3

3 ドイツ 8:42.5

- ケーレル 2:11.7
- ライッヒ 2:12.0
- ジョールド 2:07.8
- ブリーカー 2:11.0

4 南アフリカ連邦 8:43.0

- スチュアート 2:09.6
- ブリスコー 2:08.7
- フオード 2:12.5
- ダンカン 2:12.2

5 イタリア 8:43.1

- ダンネリン 2:09.7
- ガレットイ 2:13.0
- エルミー 2:12.7
- ロマニ 2:07.7

予選2組

1 イギリス 8:39.1

- ウイリヤムス 2:11.7
- ロバーツ 2:13.1
- マッケチニー 2:06.6
- ワードロップ 2:07.7

2 ソビエト連邦 8:39.5

- ストルザノフ 2:11.6
- ニコライエフ 2:08.8
- ソロキン 2:10.4
- ニチキン 2:08.7

3 オーストラリア 8:40.2

- デービット 2:07.5
- チャップマン 2:08.4
- ハミルトン 2:15.4
- ガレットイ 2:08.9

4 フランス

- エミナン 2:11.6
- コリノン 2:13.4
- ジャニー 2:13.4
- ボアトー 2:18.1

5 ハンガリー 8:57.2

- ドベイ 2:12.8
- ソルダス 2:16.5
- ザボルスキー 2:14.7
- アッツ 2:13.2

1500 m 決勝途中時間

	ローズ	山中	グリーン	ガレットイ	スレーター	ボアトー	青木
100	1:04.8	1:05.1	1:04.5	1:06.9	1:09.9	1:06.9	1:07.1
200	2:14.7	2:15.4	2:14.6	2:19.4	2:25.4	2:22.9	2:19.9
300	3:27.3	3:27.5	3:27.1	3:31.8	3:40.7	3:33.9	3:33.6
400	4:39.6	4:39.9	4:39.6	4:45.3	4:55.5	4:48.5	4:48.8
500	5:52.2	5:52.8	5:52.4	5:59.1	6:10.6	6:04.1	6:04.6
600	7:05.8	7:05.3	7:05.2	7:12.6	7:25.9	7:20.0	7:20.4
700	8:18.8	8:18.8	8:18.3	8:26.7	8:40.6	8:35.8	8:36.4
800	9:31.8	9:31.6	9:31.8	9:40.9	9:55.2	9:51.4	9:52.5
900	10:43.7	10:45.0	10:44.6	10:55.7	11:10.2	11:06.8	11:08.9
1000	11:55.8	11:57.8	11:57.1	12:11.4	12:21.3	12:22.2	12:25.1
1100	13:08.0	13:10.6	13:10.9	13:26.9	13:40.4	13:38.4	13:40.8
1200	14:20.7	14:24.8	14:24.6	14:41.9	14:56.5	14:54.5	14:55.8
1300	15:34.0	15:38.1	15:39.3	15:58.1	16:12.2	16:10.6	16:11.0
1400	16:47.0	16:51.4	16:54.3	17:12.9	17:27.8	17:27.7	17:28.0
1500	17:58.9	18:00.3	18:08.2	18:26.5	18:38.1	18:38.3	18:38.3

6	フィリッピン	9:05.7
	アラバニ	2:15.9
	ロサダ	2:16.9
	サイラニ	2:15.5
	バボール	2:17.4

**決勝**

1	オーストラリア	8:23.6 (世新)
	オハロラン	2:06.8
	デーヴィット	2:06.4
	ローズ	2:06.0
	ヘンリックス	2:04.4
2	アメリカ	8:31.5
	ハンレー	2:08.0
	グリーン	2:07.7
	ウルジー	2:07.0
	コンノ	2:08.8
3	ソビエト連邦	8:34.7
	ソロキン	2:07.5
	ストルザノフ	2:11.5
	ニコライエフ	2:09.0
	ニキチン	2:06.7
4	日本	8:36.6
	古賀	2:10.0
	谷	2:08.5
	野々下	2:10.5
	山中	2:07.6
5	ドイツ	8:43.4
	ケーレル	2:10.3
	ライッヒ	2:12.1
	ジロールド	2:08.4
	ブリーカー	2:12.6
6	イギリス	8:45.2
	ウイリヤムス	2:11.4
	ロバーツ	2:13.8
	マッケチニー	2:11.6
	ワードロップ	2:08.4
7	イタリア	8:46.2
	ダンネリン	2:09.8
	ガレットイ	2:13.4
	エルミー	2:13.5
	ロマニ	2:09.5
8	南アフリカ連邦	8:49.5
	スチュアート	2:11.2
	ブリスコー	2:11.8
	フォード	2:13.6

ダンカン 2:12.9

**男子 200 m 平泳**

**予選1組**

1	古川勝	(日)	2:36.1
2	K. グレイエ	(丁)	2:36.4
3	F. ドサエフ	(ソ連)	2:43.9
4	L. コズマ	(白)	2:48.4
5	S. カーン	(印)	3:17.0
	O. モビグリア	(伯)	P. ナビウラ
	(比)	は反則失格	

**予選2組**

1	I. ザセダ	(ソ連)	2:40.1
2	T. ギャザコール	(豪)	2:40.2
3	M. サンギリー	(キユ一バ)	2:41.8
4	R. コーン	(ルクセンブルグ)	2:50.9
5	I. チボス	(洪)	3:18.7
	A. ゴメツ	(コロンビア)	クライ
	ン	(独)	は反則失格

**予選3組**

1	吉村昌弘	(日)	2:38.6
2	K. ユニチエフ	(ソ連)	2:41.2
3	H. ブルサール	(仏)	2:43.0
4	C. デスミット	(白)	2:43.5
5	C. ワークデン	(英)	2:47.1
6	R. ヒューズ	(米)	2:52.2
	R. ラサル	(パキスタン)	は反則失格

**決勝**

1	古川勝	(日)	2:34.7 100……1:13.3 (オ新)
2	吉村昌弘	(日)	2:36.7
3	K. ユニチエフ	(ソ連)	2:36.8
4	T. ギャザコール	(豪)	2:38.7
5	I. ザセダ	(ソ連)	2:39.0
6	K. グレイエ	(丁)	2:40.0
7	M. サンギリー	(キユ一バ)	2:42.0
	H. ブルサール	(仏)	は反則失格

**男子 200 m バタフライ**

**予選1組**

1	W. ヨルジック	(米)	2:18.6 (オ新)
2	J. マーシャル	(豪)	2:26.8
3	A. ポベスク	(ル)	2:29.9

4	R. ピロリー	(仏)	2:30.1
5	J. アッツ	(洪)	2:31.1
6	W. オカンボ	(墨)	2:41.4

**予選2組**

1	石本隆	(日)	2:24.2
2	B. ウイルキンソン	(豪)	2:27.2
3	E. リオス	(墨)	2:28.1
4	F. ネルソン	(米)	2:29.4
5	P. ナビウラ	(比)	3:03.2
6	S. カーン	(印)	3:06.3

**予選3組**

1	G. ツンペク	(洪)	2:23.3
2	H. ウエーベル	(独)	2:34.4
3	G. ンモンズ	(英)	2:35.7
4	A. ロサダ	(比)	2:43.5
5	G. パーク	(加)	2:47.2
6	S. ガーシ	(パキスタン)	2:48.0
7	S. フォング	(マレー)	2:56.0

**決勝**

1	W. ヨルジック	(米)	2:19.3 100……1:05.4
2	石本隆	(日)	2:23.8 100……1:05.9
3	G. ツンペク	(洪)	2:23.9
4	F. ネルソン	(米)	2:26.6
5	J. マーツヤル	(豪)	2:27.2
6	E. リオス	(墨)	2:27.3
7	R. ウイルキンソン	(豪)	2:29.7
8	A. ポベスク	(ル)	2:31.0

**男子 100 m 背泳**

**予選1組**

1	R. クリストフ	(仏)	1:04.2 (オ新)
2	J. ハイリス	(豪)	1:04.4
3	L. マギヤール	(洪)	1:06.1
4	A. ウイギンス	(米)	1:06.2
5	H. リグビー	(英)	1:06.9
6	A. ナジル	(パキスタン)	1:10.7

**予選2組**

1	G. サイクス	(英)	1:06.2
2	富田一雄	(日)	1:06.4
3	G. ボゾン	(仏)	1:06.4
4	E. ミールシユ	(独)	1:07.5
5	L. ハーリング	(新西)	1:07.5
6	P. カイコ	(比)	1:11.6



予選3組

- 1 C. タイラ (豪) 1:04.3
- 2 Y. オヤカワ (米) 1:05.2
- 3 長谷景二 (日) 1:06.3
- 4 W. ブロックウエー(英) 1:07.7
- 5 F. ゴンカルベス (伯) 1:07.9
- 6 C. ミンマン (香港) 1:14.0

予選4組

- 1 J. モンクトン (豪) 1:03.4 (オ新)
- 2 F. マッキニー (米) 1:06.0
- 3 D. ファイフェル (独) 1:06.7
- 4 L. パチック (チェコ) 1:09.9
- 5 G. コアノー (仏) 1:07.5
- 6 二宮英雄 (日) 1:09.2
- 7 H. リム (マレー) 1:12.4

再レース

- 1 E. ミールシュ (独) 1:06.3
- 2 G. コアノー (仏) 1:07.7
- 3 L. ハーリング (新西) 1:07.7

準決勝1組

- 1 J. モンクトン (豪) 1:04.1
- 2 D. タイラ (豪) 1:04.8
- 3 Y. オヤカワ (米) 1:05.0
- 4 C. サイクス (英) 1:06.5
- 5 富田一雄 (日) 1:06.5
- 6 D. ファイフェル (独) 1:07.6
- 7 L. マギヤール (洪) 1:07.6
- 8 L. パチック (チェコ) 1:07.9

準決勝2組

- 1 R. クリストフ (仏) 1:04.6
- 2 J. ハイリス (豪) 1:05.0
- 3 F. マッキニー (米) 1:05.3
- 4 A. ウイギンス (米) 1:06.4
- 5 G. ボゾン (仏) 1:06.5
- 6 長谷景二 (日) 1:06.5
- 7 E. ミールシュ (独) 1:06.6
- 8 H. リグビー (英) 1:07.6

決勝

- 1 D. タイラ (豪) 1:02.2 (オ新)
- 2 J. モンクトン (豪) 1:03.2
- 3 F. マッキニー (米) 1:04.5
- 4 R. クリストフ (仏) 1:04.9
- 5 J. ハイリス (豪) 1:05.0
- 6 G. サイクス (英) 1:05.6

- 7 Y. ウイギンス (米) 1:05.8
- 8 Y. オヤカワ (米) 1:06.9

女子 100 m 自由形

予選1組

- 1 L. クラップ (豪) 1:03.4 (世新)
- 2 J. ロサザ (米) 1:05.5
- 3 H. スチュワート (豪) 1:07.1
- 4 J. マイバー (南ア) 1:07.1
- 5 A. ヘルストローム(瑞) 1:08.5
- 6 I. スウィード (白) 1:08.9
- 7 W. グリフィン (新西蘭) 1:10.4
- 8 M. ノースロップ(ケニヤ) 1:12.8

予選2組

- 1 N. シモンズ (米) 1:06.5
- 2 K. ツオーケ (洪) 1:08.0
- 3 K. ヤンセン (独) 1:08.3
- 4 O. ヴォー (仏) 1:08.6
- 5 F. エワート (英) 1:08.8
- 6 島田節子 (日) 1:11.8

予選3組

- 1 M. D. ロー (新西) 1:05.9
- 2 V. ギエンゲ (洪) 1:06.6
- 3 B. クロンブ (独) 1:07.7
- 4 H. フロスト (仏) 1:08.8
- 5 B. L. バロン (墨) 1:09.5
- 9 佐藤嬉子 (日) 1:10.3
- 7 G. ロサダ (比) 1:13.7

予選4組

- 1 F. リーチ (豪) 1:04.7
- 2 S. オルドック (洪) 1:06.5
- 3 K. ヨブソン (瑞) 1:07.3
- 4 S. ロバーツ (南ア) 1:07.9
- 5 C. ステファン (独) 1:08.1
- 6 神野眸 (日) 1:08.8
- 7 G. プリストリー (加) 1:09.2

予選5組

- 1 D. フレーザー (豪) 1:02.4 (オ新)
- 2 N. マイバー (南ア) 1:05.1
- 3 V. グラント (加) 1:05.1
- 4 S. マン (米) 1:05.4
- 5 F. ホグベン (英) 1:08.5
- 6 G. サンドロー (仏) 1:09.9
- 7 S. リブナー (イスラエル) 1:10.3

準決勝1組

- 1 D. フレーザー (豪) 1:03.0
- 2 F. リーチ (豪) 1:05.2
- 3 J. ロサザ (米) 1:05.9
- 4 N. マイバー (南ア) 1:06.0
- 5 V. ギエンゲ (洪) 1:06.4
- 6 S. オルドック (洪) 1:06.9
- 7 H. スチュワート (加) 1:06.9
- 8 B. クロンブ (独) 1:07.9

準決勝2組

- 1 L. クラップ (豪) 1:03.1
- 2 M. V. ロー (新西) 1:05.3
- 3 V. グラント (加) 1:05.5
- 4 S. マン (米) 1:05.5
- 5 N. シモンズ (米) 1:06.1
- 6 K. ヨブソン (瑞) 1:06.1
- 7 S. ロバーツ (南ア) 1:06.6
- 8 J. E. マイバー (南ア) 1:06.7

決勝

- 1 D. フレーザー (豪) 1:02.0 (世新)
- 2 L. クラップ (豪) 1:02.3
- 3 F. リーチ (豪) 1:05.1
- 4 J. ロサザ (米) 1:05.2
- 5 V. グラント (加) 1:05.4
- 6 S. マン (米) 1:05.6
- 7 M. V. ロー (新西) 1:05.6
- 8 N. A. マイバー (南ア) 1:05.8

女子 400 m 自由形

予選1組

- 1 V. ギエンゲ (洪) 5:14.2  
1:09.8 2:30.0 3:52.5
- 2 H. フロスト (仏) 5:14.4  
1:12.3 2:30.6 3:51.4
- 3 K. ラルソン (瑞) 5:18.3
- 4 B. ウィットル (加) 5:21.7
- 5 W. グリフィン (新西) 5:31.0
- 6 G. ロサダ (比) 5:34.2

予選2組

- 1 M. シュリーバー (米) 5:07.6  
1:11.2 2:30.0 3:49.5(オ新)
- 2 S. モーガン (豪) 5:07.8  
1:10.2 2:29.8 3.50\*9
- 3 I. キュンツェル (独) 5:20.8
- 4 G. プリストリー (加) 5:27.5
- 5 A. ヘルストローム(瑞) 5:29.2
- 6 V. ガドナー (仏) 5:29.7

予選3組

- 1 D. フレーザー (豪) 5:02.5  
1:08.9 2:26.0 3:44.6(オ新)
- 2 S. ルースカ (米) 5:10.3  
1:11.7 2:30.3 3:50.1
- 3 R. セッケリー (豪) 5:10.5
- 4 S. ロバーツ (南ア) 5:16.7
- 5 C. トーマス (仏) 5:23.9
- 6 B. ワングベルグ (瑞) 5:27.0
- 7 和田 映子 (日) 5:27.2

予選4組

- 1 L. クラップ (豪) 5:00.2  
1:09.6 2:25.8 3:42.6(オ新)
- 2 D. ゲレーイ (米) 5:16.7
- 3 Z. マイバー (南ア) 5:16.8
- 4 M. D. ロー (新西) 5:18.5
- 5 M. ガーワン (英) 5:23.6
- 6 G. アランダ (墨) 5:24.2
- 7 大高 幸子 (日) 5:28.7

決勝

- 1 L. クラップ (豪) 4:54.6  
1:06.9 2:20.8 3:36.7(オ新)
- 2 D. フレーザー (豪) 5:02.5  
1:06.9 2:21.3 3:40.2
- 3 S. ルースカ (米) 5:07.1  
1:09.2 2:28.3 3:47.9
- 4 M. シュリーダー (米) 5:12.9
- 5 R. セッケリー (洪) 5:14.2
- 6 S. モーガン (豪) 5:14.3
- 7 H. フロスト (仏) 5:15.4
- 8 V. ギエンゲ (洪) 5:21.0

女子 400 m リレー

予選1組

- 1 南アフリカ 4:26.8  
J. マイバー 1:07.3  
S. ロバーツ 1:06.5  
M. アバーナシー 1:08.2  
H. マイバー 1:04.8
- 2 アメリカ 4:27.3  
B. ブルーイ 1:07.9  
N. シモンズ 1:05.5  
K. クナップ 1:08.2  
N. シュリーパー 1:05.7
- 3 ドイツ 4:27.5  
I. キュツエル 1:07.6  
H. ハーゼ 1:05.5  
K. ヤンセン 1:07.0  
B. クロンプ 1:07.4

- 4 イギリス 4:34.6  
F. ホグベン 1:08.3  
M. グリバン 1:08.6  
F. エワート 1:09.3  
J. グリンハム 1:07.4
- 5 フランス 4:36.6  
O. ヴォー 1:08.4  
V. ガバナー 1:10.4  
G. センドラー 1:10.6  
H. フロスト 1:07.2

予選2組

- 1 オーストラリア 4:25.0  
(オ新)  
G. ギブソン 1:06.4  
S. モーガン 1:05.4  
E. フレーザー 1:07.3  
F. リーチ 1:05.9
- 2 ハンガリー 4:28.1  
J. テメヌ 1:07.1  
M. リトメリツキ 1:07.1  
K. ツオーケ 1:07.0  
V. ギエンゲ 1:06.9
- 3 カナダ 4:29.3  
V. グラント 1:06.7  
G. プリストリー 1:07.7  
S. バーバー 1:08.1  
H. スチュワート 1:06.8
- 4 スウェーデン 4:30.1  
A. ヘルストローム 1:08.3  
B. ワングベルグ 1:07.7  
K. ラルソン 1:07.4  
K. ヨブソン 1:06.7
- 5 日本 4:35.8  
神野 眸 1:07.8  
和田 映子 1:08.1  
佐藤 嬉子 1:08.8  
大高 幸子 1:11.3

決勝

- 1 オーストラリア 4:17.1  
(世新)  
D. フレーザー 1:04.0  
G. リーチ 1:05.3  
S. モーガン 1:04.7  
L. クラップ 1:03.1
- 2 アメリカ 4:19.2  
S. ルースカ 1:06.3  
S. マン 1:06.3

- N. シモンズ 1:04.6  
J. ロサザ 1:04.4
- 3 南アフリカ 4:25.7  
N. マイバー 1:07.7  
S. ロバーツ 1:05.3  
M. アバーナシー 1:08.0  
J. マイバー 1:04.7
- 4 ドイツ 4:26.1  
I. キュツエル 1:07.7  
H. ハーゼ 1:06.7  
K. ヤンセン 1:05.7  
B. クロンプ 1:07.1
- 5 カナダ 4:28.3  
H. スイトフート 1:07.1  
G. プリストリー 1:07.1  
S. バーバー 1:07.5  
V. グラント 1:06.6
- 6 スウェーデン 4:30.0  
A. ヘルストローム 1:08.8  
B. ワングベルグ 1:07.7  
A. ラルソン 1:07.4  
K. ヨブソン 1:06.1
- 7 ハンガリー 4:31.1  
M. リトメリツキ 1:09.9  
K. ツオーケ 1:06.7  
J. テメヌ 1:06.7  
V. ギエンゲ 1:07.8
- 8 イギリス 4:35.8  
F. ホグベン 1:08.8  
J. グリンハム 1:09.0  
M. ガードン 1:09.4  
F. エワート 1:08.6

女子 200m 平泳

予選1組

- 1 U. ハッペ (独) 2:54.1
- 2 K. キラーマン (洪) 2:54.6
- 3 P. ゴードン (英) 2:55.4
- 4 M. シヤーズ (米) 2:58.2
- 5 C. グーセンス (白) 3:00.5
- 6 E. ジンナロ (伊) 3:05.2

予選2組

- 1 E. セッケリー (洪) 2:55.8
- 2 V. イエリセビツク(チコエ) 2:56.0
- 3 M. テンエルセン (独) 2:57.5
- 4 C. ゴスデン (英) 2:58.2

- 5 J. ハンセン (丁) 2:59.8
- 6 E. ノヴァク (白) 3:02.7
- 7 B. エバンス (豪) 3:03.6
- 8 R. トビン (インドネシア) 3:14.2

**決勝**

- 1 U. ハッペ (独) 2:53.1 (オ新)
- 2 E. セッケリー (洪) 2:54.8
- 3 M. テンエルセン (独) 2:55.1
- 4 V. イエリセビック (チェコ) 2:55.8
- 5 K. キラーマン (洪) 2:56:1
- 6 H. ゴードン (英) 2:56.7
- 7 M. シヤーズ (米) 2:51.2
- 8 C. ゴスデン (英) 2:59.2

**女子 100 m バタフライ**

**予選1組**

- 1 S. マン (米) 1:11.2 (オ新)
- 2 N. ラメイ (米) 1:13.4
- 3 S. バーバー (加) 1:16.2
- 4 M. スカピロ (チェコ) 1:17.7
- 5 M. ガイルス (豪) 1:19.4

**予選2組**

- 1 B. ベインブリッジ(豪) 1:14.4
- 2 M. シヤーズ (米) 1:15.1
- 3 M. リトメリッキ (洪) 1:15.2
- 4 B. ウイッタル (加) 1:16.9
- 5 J. ランゲナウ (独) 1:17.4
- 6 A. モートン (英) 1:17.7
- 7 O. ルシアン (仏) 1:19.8

**決勝**

- 1 S. マン (米) 1:11.0 (オ新)
- 2 N. ラメイ (米) 1:11.9
- 3 M. シヤーズ (米) 1:14.4
- 4 M. リトメリッキ (洪) 1:14.9
- 5 B. ベインブリッジ(豪) 1:15.2
- 6 J. ウイッタル (加) 1:17.4
- 7 S. バーバー (加) 1:17.9
- 8 S. バーバー (加) 1:18.4

**女子 100 m 背泳**

**予選1組**

- 1 J. グリンハム (英) 1:13.1 (オ新)
- 2 M. ボス (ルマニヤ) 1:15.8
- 3 L. クリポ (ソ連) 1:16.1
- 4 M. マルチノ (米) 1:16.2

- 5 E. ゲルナー (ポーランド) 1:16.2
- 6 P. シングルトン (豪) 1:17.0
- 7 L. フィッシャー (加) 1:17:5
- 8 G. センドラ (仏) 1:19.1

**予選2組**

- 1 K. コーン (米) 1:13.9
- 2 G. ベケット (豪) 1:14.8
- 3 J. ホイル (英) 1:15.0
- 4 E. パヨール (洪) 1:15.3
- 5 J. スチュワード (新西) 1:15.4
- 6 M. アバーネシー (南ア) 1:15.4
- 7 J. フオンギース (比) 1:20.0

**予選3組**

- 1 M. エドワーツ (英) 1:13.0 (オ新)
- 2 K. バーバー (加) 1:14.3
- 3 H. シュミット (独) 1:14.8
- 4 M. マーフィ (米) 1:14.8
- 5 P. ハンチングフィールド (豪) 1:16.0
- 6 P.M. ゴールド (新西) 1:17.5
- 7 J. テメス (洪) 1:17.6
- 8 M. バルトム (インドネシア) 1:21.7

**決勝**

- 1 J. グリンハム (英) 1:12.9 (オ新)
- 2 K. コーン (米) 1:12.9
- 3 M. エドワーツ (英) 1:13.1
- 4 H. シュミット (独) 1:13.4
- 5 M. マーフィ (米) 1:14.1
- 6 J. ホーブル (英) 1:14.3
- 7 S. バーバー (加) 1:14.7
- 8 G. ベケット (豪) 1:14.7

**水球**

**A グループ**

- ユーゴ 3-2 ソ連
- ユーゴ 3-2 ルーマニヤ
- ユーゴ 9-1 オーストラリア
- ソ連 4-3 ルーマニヤ
- ソ連 3-0 オーストラリア
- ルーマニヤ 4-2 オーストラリア

**B グループ**

- ハンガリー 6-2 アメリカ
- ハンガリー 6-1 イギリス
- アメリカ 5-3 イギリス

**C グループ**

- イタリア 4-2 ドイツ
- イタリア 7-1 シンガポール
- ドイツ 5-1 シンガポール

**得点**

**A グループ**

- 1 ユーゴ 6
- 2 ソ連 4
- 3 ルーマニヤ 2
- 4 オーストラリア 0

**B グループ**

- 1 ハンガリー 4
- 2 アメリカ 2
- 3 イギリス 0

**C グループ**

- 1 イタリア 4
- 2 ドイツ 2
- 3 シンガポール 0

**決勝**

**D グループ**

- ハンガリー 2-1 ユーゴ
- ハンガリー 4-0 ソ連
- ハンガリー 6-2 アメリカ
- ハンガリー 4-0 ドイツ
- ハンガリー 4-0 イタリア
- ソ連 3-1 アメリカ
- ソ連 6-4 ドイツ
- ソ連 3-2 イタリア
- ユーゴ 3-2 ソ連
- ユーゴ 5-1 アメリカ
- ユーゴ 2-1 イタリア
- アメリカ 4-3 ドイツ
- アメリカ 2-3 イタリア
- ドイツ 2-4 イタリア

**E グループ**

- イギリス 11-5 シンガポール
- イギリス 5-2 ルーマニヤ
- イギリス 5-2 ルーマニヤ
- シンガポール 1-15 ルーマニヤ
- シンガポール 2-3 オーストラリア
- ルーマニヤ 4-2 オーストラリア

**決勝順位**

- 1 ハンガリー
- 2 ユーゴスラビヤ
- 3 ソビエト連邦
- 4 イタリア
- 5 アメリカ
- 6 ドイツ
- 7 イギリス
- 8 ルーマニヤ
- 9 オーストラリア
- 10 シンガポール

(本記事中、途中時間はリレーを除き新聞雑誌等より転載した。飛込はオリンピック報告書に出ているから此所では省いた。失道)

# 競技規則の改正について

昭和31年12月メルボルンで開催されたF. I. N. A総会で競技規則が大分改正された。その中で差し当り必要なものを各専門委員会が検討して次のように決定した。

## 競 泳 規 則

競 泳 委 員 会

### 1. 着 順 と 時 計

競技に於て、計時員により正式に記録されたタイムが審判員の決定と一致せず、1着より2着の泳者のタイムの方が良い場合には、1着と2着の泳者のタイムは、1,2着の両者に記録された実際の総合計タイムの平均値を両者のタイムとする。

審判により決定された着順判定と一致しないタイムを発表することは許されない。

### 2. 通過による途中正式計時禁止

実際に端壁にタッチした際、正式に計時されたもののみを正式計時とする。

備考 ペナント、テープ類を使用して、その線を通じた時に計時した途中計時は正式計時として認めない。

### 3. 世界記録は50米又は55ヤードプールに於てのみ公認される。

### 4. 泳 法 の 改 正

改 正 現 行

<p>第8条 平 泳</p> <p>(A) 両手を前方へ一緒に出し、後方に同時に<u>しかも左右対称</u>に掻く。</p> <p>(D) 折返し又は競技の終結にて端壁にふれる時は両肩を水平にし両手を<u>同じ高さ</u>で同時につかなければならない。</p> <p>(F) 出発と折返しの際の一掻きと一蹴り以外は水面下を泳ぐことを禁止する。</p>	<p>年鑑 P 49</p> <p>(A) 両手を前方へ一緒に出し後方に同時に掻く。</p> <p>年鑑 P 50</p> <p>(D) 折返しにて端壁にふれる、或いは競技の終結にて端壁にふれる時は両手を以て同時にする。</p> <p>(追加)</p>
<p>第9条 背 泳</p> <p>(E) スタートの際足首(つまさきを含む)から下は水面下になくははいけない。なおオーバーローに足をかけてはいけない。</p>	<p>(追加)</p>
<p>第10条 バタフライ</p> <p>(A) 泳者は両腕を水面上を前方へ一緒に出し後方へ同時に掻く。</p> <p>(D) 折返しにて端壁にふれる時或いは競技終結にて端壁にふれる時は両手を以て同時に<u>同じ水平の高さ</u>です。</p>	<p>(A) 泳者が<u>水面上にある場合</u>、両腕は水面上を前方へ一緒に出し、後方へ同時に掻く</p> <p>(D) 折返しにて端壁にふれる時、或いは競技終結にて端壁にふれる時は両手を以て同時にする</p>

#### 〔注 意〕

1. F項の「水面下を泳ぐことを禁止する」とは「身体の一部が常に水面上に出ていなくてはならない」ということである。
2. F項の「一掻き一蹴り」の範囲は両腕を前方に出し、両足を真すぐに伸ばした姿勢を基準としていう。従って一掻きとは、腕を掻きこれを前方に伸ばした姿勢まで、一蹴りとは足を曲げこれを蹴って真すぐに伸ばした姿勢までをいう。
3. 平泳B項「両肩は水面と平行に」とは左右両肩が水平でなければならないとの意味であって、従来ややもすれば看過されて来たが今後はこれをもっと厳格に適用する。

# 水球規則

## 水球委員会

### 1. 改正規則 第6条(d) 帽子

交代者の帽子の番号は7に続き、8,9,10を使用するのを原則とする。ゴール・キーパーの交代の場合は、ゴール・キーパーの帽子を使用しなければならない。

### 2. 改正規則 第7条(b) 審判員

審判員は競技の絶対的統轄権を有する。審判員の権威は競技者がその競技のために競技場構内(スタンド、脱衣場を含まず)に到着した時より始まり、その競技を終って、換衣又は入浴のために競技場構内を去る時まで存続する。

### 3. 改正規則 第7条(1) 計時員

計時員の義務は第8条及び21条に規定された通り、競技の正確な正味時間に休憩時間をストップ・ウォッチによって計時記録することである。

### 4. 規則第7条に新節を附加 Q項の後に追加

ゴール・ジャッジは規則第11条に従い、競技者が各自のゴール線上に正しく位置している事を審判員に明示するため、赤旗を振らねばならない。而し競技の開始或は再開に関する効力は審判員の笛声によって発生する。

### 5. 規則第7条(n)に新条文を加える。 計時員

“第18条(k)に述べられたる場合を除き”

### 6. 改正規則第10条(h) ゴール・キーパー

ゴール・キーパーが退水し、規則第10条(f)、或は20条(e)によって、その補充がなされていない場合に、ゴール・スローが与えられた時は最も近い防禦側競技者が、ゴール・スローを投じなければならない。この場合、ゴール・スローを投ずることに關しては、ゴール・キーパーに与えられた制限と特権が適用される。その他の如何なる事情によっても、ゴールを守る他の競技者は、ゴール・キーパーの制限と特権を受けられるものではない。(14条(d)、18条(g)を参照)

### 7. 改正規則 第11条 開始

(a) 競技の開始又はハーフ・タイム後の再開(延長競技の場合も含む)の時に於ては、競技者は自己のゴール・ラインに各々約一碼の間隔をとって位置し、且つ各ゴール・ポストより少くとも1碼はなれ(ゴール・ポストの間には2名以上入ることは許されない)審判員が両チームの用意が出来たのを確めた後に吹く合図の笛声を待つ。開始合図の笛声は一気に吹き、次いで審判員は直ちにボールを競技場の中央

に投じなければならない。

(b) 得点がなされた場合、得点しなかった方のチームの競技者は中央線後方の各自の範囲内の何処かに位置しなければならない。この場合再開するチームの一競技者は中央線上に位置をとらねばならない。そして審判員の笛声の合図により、中央にいる競技者は中央線後方にいる味方の競技者にすみやかにパスを投じなければならない。

(c) 規則に反した再開はやり直さなければならない。

(d) 開始又は再開がゴール・ラインから始まる場合には、競技者の身体の如何なる部分でも、ゴール・ラインより前に出ていることは許されない。又中央線上から始まる再開の場合には水面に在る競技者の体の如何なる部分も中央線より前に出ている事は許されない。

8. 改正規則 第14条(d)に附加、コーナー・スロー  
コーナー・スローが与えられた時、ゴール・キーパーが退水せられた場合には防禦側の他の競技者はゴール・ラインの位置に着くことを許される。然しゴール・キーパーの制限と特権は受けられない。

9. 改正規則 第15条(n) オーディナリー・ファウル  
チームが、相手方よりも数少い競技者しかいない場合でも、攻撃することなく不当にボールを保持し続ける如きは時間の浪費である。この場合には笛声の瞬間に反則が行なわれたものと考え、その際にボールを保持乃至支配していた競技者の近くにいた相手方競技者に、笛声の瞬間にボールのあった場所からフリー・スローが与えられねばならない。

### 10. 改正規則 第16条(k) フリー・スロー

若しニュートラル・スローが審判員がボールが一方のチームに有利になるような位置に落ちたと感じたならば、再びスローをやりなをさなければならない。

### 11. 改正規則 第17条(e) メジャー・ファウル

相手方を蹴り、或いはなぐったり、又はそのような意図で不適当な動作をとること。

### 12. 改正規則 第17条(e) メジャー・ファウル

4碼線内に於て、恐らく得点をさけさせると見られるような反則を犯すこと。

### 13. 改正規則 第17条(g) メジャー・ファウル

最も近い反対チームの競技者により、フリー・スローがなされる場合、それを攻撃する競技者は退水させられる。

### 14. 改正規則 第18条(b) ペナルティー・スロー

反則者は退水を命ぜられない。反則者に競技続行のためにも退水を命ずることがよいと思われる程、反則が重要でない場合である。

15. 改正規則 第18条(f) ペナルティー・スロー  
防禦側のゴール・キーパー又は第18条(g)による他の競技者以外の全競技者は、スローが行なわれるまで4碼線から出なければならぬと共に、ペナルティー・スローを投ずる競技者の1碼以内に近寄ってはならない。

16. 規則 第18条(g)から削除 ペナルティー・スロー  
“競技者が攻撃者である以外”

17. 規則 第18条(g)に新規則を附加

#### ペナルティー・スロー

ペナルティー・スローが与えられた際に、防禦側のゴール・キーパーが既に退水せられていた場合には、そのチームの別の競技者が、ゴール・ラインの上に位置をとることが許される。然し、ゴール・キーパーとしての制限と特権は認められない。

18. 規則 第18条(k)を削除 ペナルティー・スロー  
“計時員の笛声は瞬時に効力を有す。”

19. 改正規則 第18条(k) ペナルティー・スロー  
審判員が、ペナルティー・スローを与えるのと同時に、或いはペナルティー・スローの終らない内に計時員のハーフ・タイム、タイムアップ(延長競技を含む)の笛声合図があった場合にはそのペナルティー・スローは有効に行われなければならない。若しそのペナルティー・スローによって投ぜられたボールが、ゴール・ポスト、クロスバー、ゴール・キーパーに打当て得点とならなかった場合には、その瞬間に計時員の笛声は効力を発生する。

(a) 難易率の合計が制限された異群よりの選択飛

(b) 難易率の合計が制限のない異群よりの選択飛

3. 第3章(35)の(ニ)項8行目

「どの飛込に於ても体が板の端に触れた時は、その飛込が余りに近過ぎたという点に於て、各審判員は減点を行うべきである。」の次に以下の文を挿入する。

「亦競技者が板の脇へ動作を行った時は、各審判員は状況に従って減点を行うべきである。」

4. 同項11行目

「1度立ち直しを行った場合は2点を減点する。」と訂正(注)「台から手を離さない限り」の文を削除

5. 同項14行目

「2回目の立直しに失敗した時は、その飛込は全く失敗したものと認め0点を与える。」と訂正

(注)「……及び最初に平衡を失つて台より手を離れた時は」の文を削除

6. 第3章(35)の(ホ)項3行目

「但し「捻り」飛込の場合は腕を曲げてよい。」の文を削除。

7. 同項12行目

「……その程度により審判員は2点、乃至3点を減すべきである」の文を

「……審判員は1点乃至3点……」と訂正。

8. 第3章(35)の(リ)項文末に次の文章を追加する。

「亦もし両腕が頭上に残っているならばその飛込は満足なものと考えるべきではない。その様な飛込に対する最高の採点は4.5とすべきである。

9. 第5章(41)7行目

「……上面の傾斜は水平に対して5度を超えてはならない。」とあるを

「……1度を超えてはならない。」と訂正

10. 第5章(44) 全文を以下の如く訂正

「男女の飛板飛込競技種目は5つの規定種目と5つの異群よりの選択種目より成る。規定種目は次のものとする。

(1)前飛 (2)後飛 (3)前逆飛 (4)後踏切前飛 (5)前飛半回捻り、規定種目は伸型、蝦型、抱型の何づれによって行っても宜しい。競技者が16名以上の場合は、予選準決勝、決勝の競技を行うべきである。予選は第一群、第三群、第五群の規定飛と何れの群からでもよい、選択飛一種目に依り行う。予選により、得点上位16名が準決勝出場資格を得る。準決勝は16名の有資格者が第二群、第四群の規定飛ともう一つの選択飛に依り行う。準決勝により得点上位8名が決勝出場資格を得る。決勝は8名が残された選択飛3種目に依り行う。優勝者は行われた10種目の飛込の得点合計により決定

## 飛込規則

### 飛込委員会

☆昭和29年度水泳年鑑、第2編、飛込競技規則参照の事

1. 第1章(7)を以下の如く訂正

各飛込の前に審判長或は公式記録員により、その国の言葉により競技者の氏名及びその行おうとする飛込の名称を明瞭に通告しなければならない。その行う飛込の番号と型は競技者と審判員の両方より見える表示板に明示されるべきである。但し競技者が台或は板上に上る以前に通告してはならない。

2. 第1章(10)を以下の如く訂正

各飛込は各々次の二つの飛込より成る。

(1) 飛板飛込

(a) 規定された異群よりの選択飛(規定飛)

(b) 制限のない異群よりの選択飛

(2) 高飛込



される。

11. 第5章(49) 3行目

「競技者が12名以上の場合は制限選択6種目で予選を行い、上位12名を残して自由選択4種目で決勝を行う。」とあるを以下の如く訂正。

「競技者が16名以上の場合は予選、準決勝、決勝の競技を行うべきである。予選は制限選択飛4種目により行う。予選により得点上位16名が準決勝出場資格を得る。準決勝は16名の有資格者が、残りの制限選択飛2種目と自由選択飛1種目により行う。準決勝により得点上位8名が決勝出場資格を得る。決勝は8名が残りの自由選択飛3種目により行う。優勝者は以上行われた10種目の飛込の得点合計により決定される。」

12. 第5章(42)(43)は次の如く改訂

飛板の先端の中央より下した垂直線から計られる水減の最少限の深さは次の如くする。

	1 米	3 米
水の深さ	3.0 "	3.5 "
前方の距離	5.3 "	6.2 "

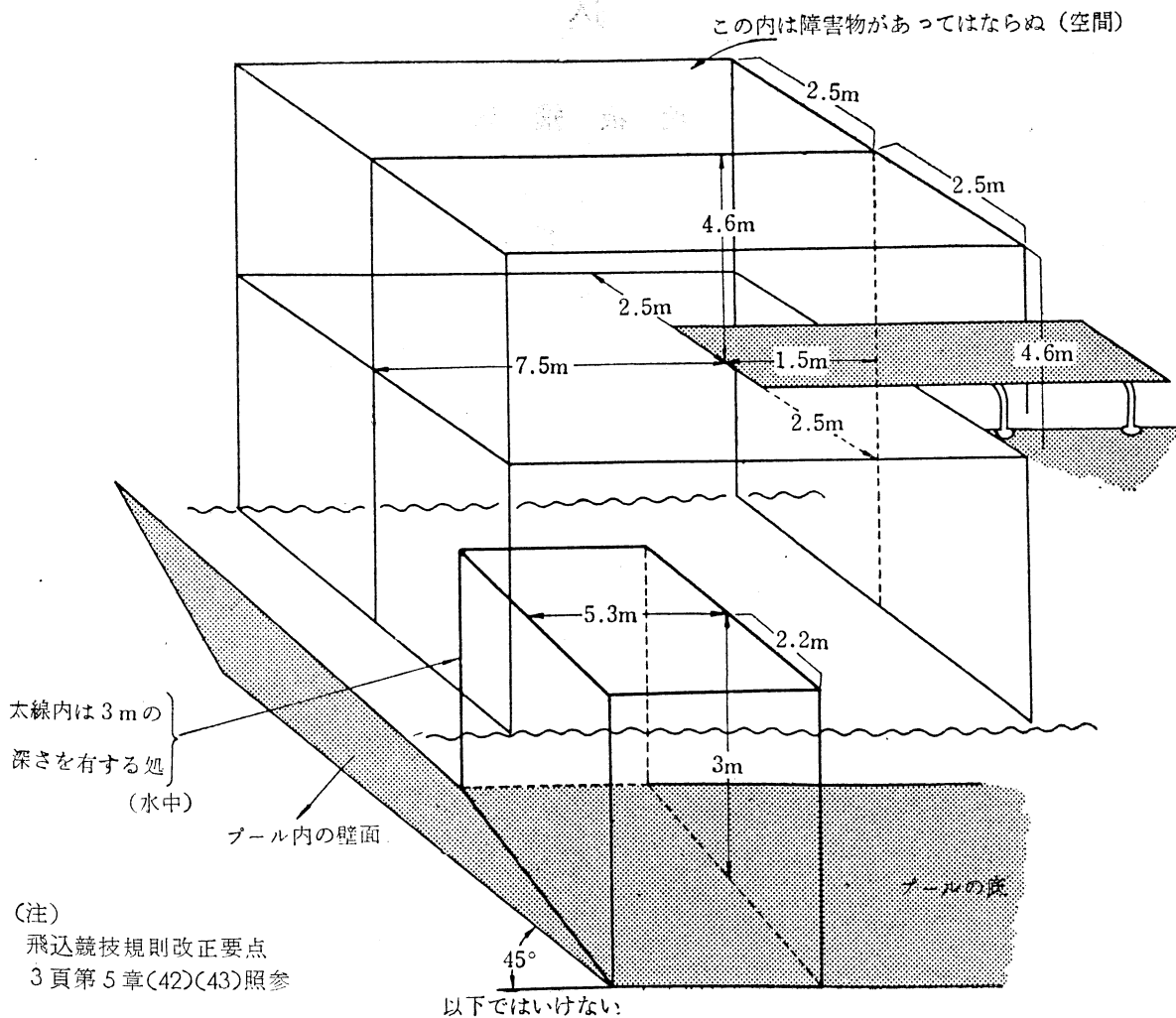
後方の距離  
両側の距離  
標準ナシ  
2.2 米  
標準ナシ  
2.7 米  
最少限の地域の外側で深さを減じて行く様にプールの底面が造られている時、その角度は水平面より如何なる場合でも45度を越えてはならない。  
亦、障害物が取除かれる最少限の地域は、前と同様に測定して次の如くである。

	1 米	3 米
プールの後方の壁への距離	1.5 "	1.5 "
プールの前方の壁への距離	7.5 "	9.0 "
隣接する台の中央への距離	2.5 "	3.5 "
上方の梁、天井への距離	4.6 "	4.6 "

13. 第5章(46)(48)の改訂部分

10米の飛込台は少くとも6米の長さを持つ事を必要とする。亦10米台の先端はその真下の台よりは0.75米以上突出していなければならない。高飛込台の先端の中央より下した垂直線から測られる水域の最少限の深さは次の如くする。

5 米	10 米
-----	------



(注)  
飛込競技規則改正要点  
3頁第5章(42)(43)参照

水の深さ	3.8 米	4.5 米
前方の距離	7.0 "	10.5 "
後方の距離	規準なし	規準なし
両側の距離	3.0 米	3.0 米

最少限の水域の外側で深さを減じて行く様にプールの底面が造られている時、その角度は水平面から如何なる場合でも45度を越えてはならない。

亦、障害物が取除かれる最少限の地域は前と同様に測定して次の如くとする。

	5 米	10 米
プール後方の壁への距離	1.5 "	1.5 "
プール前方の壁への距離	10.5 "	13.5 "
プール両側の壁への距離	3.8 "	4.5 "
隣接の板の中央との距離	2.5 "	2.5 "
上の梁、天井への距離	3.8 "	3.8 "

但し高飛込台は動揺しない堅固なものでなくてはならない。台の両側、及び後方は手摺を以て囲み、各台は階段を設備し使い易くすべきである。

備 考

1. 女子飛込種目の制限は全廃された。

(飛込表に於ける女子の制限削除)

2. 飛込表改訂

(a) 飛板飛込表より前立飛、後立飛を削除。

(b) 飛板飛込表に於ける踏切、立 (standing)、走 (running) の区別削除。

即ち立飛込 (standing dive) は飛板飛込表から削除される。従って唯一つの評価が飛込表に与えられる。競技者は立飛びか走り飛びか何れかの飛込を行う自由抉選権を持つ事が出来る。然し審判員は走り飛びか自ら予測される演技の高さや基準を心に留めておいて、立飛びに対して評点を与える様要求されている。

(c) 新飛込表B高飛込に於て第五群を捻り飛込とし、第六群を逆立飛込とする。

(d) 新種目及び難易率改訂

別紙飛込表 (A) (B) 参照

## 飛 込 表

### A 飛 板 飛 込 表

番号	名 称	1 米			3 米		
		伸	蝦	抱	伸	蝦	抱
<b>第 1 群 前 飛 込 (前踏切)</b>							
1	前 飛	1.4	1.3	1.2	1.6	1.4	1.3
2	前 宙 返 り 一 回	1.8	1.6	1.6	1.8	1.7	1.7
3	前 宙 返 り 一 回 半	—	1.7	1.6	2.1	1.6	1.6
4	前 宙 返 り 二 回	—	2.2	2.1	—	2.2	2.1
5	前 宙 返 り 二 回 半	—	2.4	2.2	—	2.3	2.1
6	前 宙 返 り 三 回	—	—	—	—	—	2.6
7	前 宙 返 り 三 回 半	—	—	—	—	—	2.7
8	前 途 中 宙 返 り 一 回	—	1.7	1.5	—	1.7	1.6
9	前 途 中 宙 返 り 一 回 半	—	1.9	1.8	—	1.8	1.7
<b>第 2 群 後 飛 込 (後踏切)</b>							
10	後 飛	1.6	1.6	1.6	1.7	1.7	1.7

番号	名 称	1 米			3 米		
		伸	蝦	抱	伸	蝦	抱
11	後 宙 返 り 一 回	1.7	1.6	1.5	1.6	1.7	1.5
12	後 宙 返 り 一 回 半	2.4	2.3	2.2	2.2	2.2	2.0
13	後 宙 返 り 二 回	—	2.3	2.2	2.4	2.2	2.0
14	後 宙 返 り 二 回 半	—	—	—	—	—	2.7
15	後 途 中 宙 返 り 一 回	—	—	1.7	—	—	1.6
16	後 途 中 宙 返 り 一 回 半	—	—	—	—	—	2.1
第 3 群 前 逆 飛 込							
17	前 逆 飛 込	1.7	1.7	1.7	1.9	1.9	1.7
18	前 逆 宙 返 り 一 回	2.0	1.8	1.4	1.9	1.7	1.5
19	前 逆 宙 返 り 一 回 半	—	2.4	2.2	2.6	2.4	2.2
20	前 逆 宙 返 り 二 回	—	—	2.2	—	2.4	2.2
21	前 逆 宙 返 り 二 回 半	—	—	—	—	—	2.8
22	前 逆 途 中 宙 返 り 一 回	—	—	1.7	—	—	1.6
23	前 逆 途 中 宙 返 り 一 回 半	—	—	—	—	—	2.4
第 4 群 後 踏 切 前 飛 込							
24	後 踏 切 前 飛 込	1.7	1.3	1.2	1.5	1.3	1.2
25	後 踏 切 前 宙 返 り 一 回	—	1.9	1.7	—	1.7	1.5
26	後 踏 切 前 宙 返 り 一 回 半	—	2.4	2.2	—	2.2	2.0
27	後 踏 切 前 宙 返 り 二 回	—	—	—	—	2.4	2.3
28	後 踏 切 前 宙 返 り 二 回 半	—	—	—	—	—	2.6
29	後 踏 切 前 途 中 宙 返 り 一 回	—	—	—	—	—	1.8
第 5 群 捻 り 飛 込							
30	前 飛 込 半 回 捻 り	1.8	1.7	—	1.9	1.8	—
31	前 飛 込 一 回 捻 り	2.0	2.1	—	2.0	2.1	—
32	前 宙 返 り 一 回 半 回 捻 り	1.8	1.5	—	1.9	1.7	—
33	前 宙 返 り 一 回 捻 り	—	2.0	—	—	2.0	—
34	前 宙 返 り 一 回 半 捻 り	—	2.1	2.0	—	2.0	1.9
35	前 宙 返 り 一 回 半 捻 り	—	2.2	—	—	2.1	—
36	前 宙 返 り 一 回 半 捻 り	—	2.7	—	—	2.4	—

番号	名	称	1 米			3 米			
			伸	蝦	抱	伸	蝦	抱	
37	後	飛	半回捻り	1.7	2.0	—	1.6	1.9	—
38	後	飛	一回捻り	2.1	—	—	2.0	—	—
39	後	宙返り一回	半回捻り	1.7	1.7	—	1.8	1.8	—
40	後	宙返り一回	一回捻り	—	1.9	—	2.0	2.0	—
41	後	宙返り一回	一回半捻り	—	2.1	—	2.1	2.1	—
42	後	飛半回捻つて	宙返り一回半	—	2.3	2.2	—	2.1	2.0
43	後	宙返り一回半	一回半捻り	—	2.6	—	—	2.4	—
44	後	宙返り一回半	二回半捻り	—	—	—	—	2.7	—
45	前	逆飛	半回捻り	1.9	2.2	—	2.0	2.2	—
46	前	逆飛	一回捻り	2.3	—	—	2.2	—	—
47	前	逆飛半回捻つて	宙返り一回	—	2.0	1.9	—	2.1	2.0
48	前	逆宙返り一回	一回捻り	2.3	2.3	2.3	2.2	2.2	2.2
49	前	逆宙返り一回	一回半捻り	—	2.1	2.1	2.2	2.2	—
50	前	逆飛半回捻つて	宙返り一回半	—	2.2	2.1	—	2.2	2.1
51	前	逆宙返り一回半	一回半捻り	—	2.7	—	—	2.6	—
52	後	踏切前飛	半回捻り	2.1	1.8	—	2.0	1.8	—
53	後	踏切前飛	一回捻り	—	—	—	2.2	2.2	—
54	後	踏切前宙返り一回	半回捻り	—	1.9	1.9	—	2.0	2.0

B 高 飛 込 表

番号	名	称	踏切	5 米			10 米		
				伸	蝦	抱	伸	蝦	抱
第 1 群 前 飛 込 (前踏切)									
1	前	飛	立	1.3	1.2	1.2	1.4	1.3	1.3
			走	1.4	1.3	1.3	1.6	1.4	1.4
2	前	宙返り一回	立	—	1.4	1.4	1.7	1.6	1.6
			走	1.7	1.5	1.5	1.9	1.7	1.7
3	前	宙返り一回半	立	—	1.4	1.3	2.0	1.5	1.4
			走	—	1.5	1.4	2.0	1.6	1.5
4	前	宙返り二回	立	—	—	—	—	2.1	2.1
			走	—	2.0	1.9	2.6	2.3	2.3

番号	名 称	踏切	5 米			10 米			
			伸	蝦	抱	伸	蝦	抱	
5	前 宙 返 り	二 回 半	立	—	—	—	—	2.3	2.1
			走	—	2.1	1.9	—	2.2	2.0
6	前 宙 返 り	三 回 半	走	—	—	—	—	2.7	2.6
7	前 途 中 宙 返 り	一 回	立	—	1.6	1.5	—	1.7	1.6
			走	—	1.5	1.4	—	1.8	1.7
8	前 途 中 宙 返 り	一 回 半	立	—	1.8	1.7	—	1.8	1.6
			走	—	1.7	1.6	—	1.8	1.7
9	前 途 中 宙 返 り	二 回	立	—	—	—	—	—	2.4
			走	—	—	—	—	—	2.3
10	前 途 中 宙 返 り	二 回 半	走	—	—	—	—	—	2.4
11	前宙返り一回して、前途中宙返り	一 回 半	走	—	—	—	—	—	2.3
第 2 群 後 飛 込 (後踏切)									
12	後 飛	立	1.6	1.6	1.6	1.9	1.9	1.8	
13	後 宙 返 り	一 回	立	1.6	1.5	1.5	1.7	1.7	1.6
14	後 宙 返 り	一 回 半	立	—	1.9	1.8	2.3	2.2	2.1
15	後 宙 返 り	二 回	立	—	—	2.0	—	2.3	2.2
16	後 宙 返 り	二 回 半	立	—	—	—	—	2.6	2.5
17	後 途 中 宙 返 り	一 回	立	—	—	1.5	—	—	1.7
18	後 途 中 宙 返 り	一 回 半	立	—	—	—	—	—	2.2
第 3 群 前 逆 飛 込									
19	前 逆 飛	立	立	1.7	1.7	1.6	1.8	1.9	1.8
			走	1.6	1.6	1.6	2.0	2.0	1.9
20	前 逆 宙 返 り	一 回	立	1.7	1.5	1.3	2.0	1.6	1.5
			走	1.8	1.5	1.4	1.9	1.6	1.6
21	前 逆 宙 返 り	一 回 半	立	—	—	2.0	2.5	2.3	2.2
			走	—	2.2	1.9	2.3	2.2	2.1
22	前 逆 宙 返 り	二 回	立	—	—	—	—	2.3	2.2
			走	—	—	2.0	—	2.3	2.2
23	前 逆 宙 返 り	二 回 半	走	—	—	—	—	—	2.7
24	前 逆 途 中 宙 返 り	一 回	立	—	—	1.7	—	—	1.7
			走	—	—	1.6	—	—	1.7

25	前逆途中宙返り	一回半	立	—	—	—	—	—	2.3
			走	—	—	—	—	—	2.2
<b>第4群 後踏切前飛込</b>									
26	後踏切前飛		立	1.5	1.3	1.1	1.6	1.4	1.3
27	後踏切前宙返り	一回	立	—	1.6	1.5	—	1.7	1.7
28	後踏切前宙返り	一回半	立	—	1.7	1.6	—	1.8	1.6
29	後踏切前宙返り	二回	立	—	—	—	—	2.3	2.1
30	後踏切前宙返り	二回半	立	—	—	—	—	2.6	2.4
31	後踏切前途中宙返り	一回	立	—	—	—	—	—	1.8
32	後踏切前途中宙返り	一回半	立	—	—	—	—	—	2.0
<b>第5群 捻り飛込</b>									
33	前飛	一回捻り	立	—	—	—	1.9	—	—
			走	1.8	—	—	2.0	—	—
34	前宙返り一回半	一回捻り	立	—	—	—	—	2.2	—
			走	—	2.0	—	—	2.3	—
35	前宙返り一回半	二回捻り	(走)	—	—	—	—	2.6	—
36	後飛	半回捻り		1.6	—	—	1.7	—	—
37	後飛半回捻って	宙返り一回半		—	—	—	—	2.0	2.0
38	後宙返り一回半	一回半捻り		—	—	—	—	2.4	—
39	前逆飛	半回捻り	立	1.6	—	—	1.9	—	—
			走	1.7	—	—	2.0	—	—
40	前逆飛半回捻って	宙返り一回	(走)	—	1.9	1.9	—	2.2	2.2
41	前逆飛半回捻って	宙返り一回半	(走)	—	—	—	—	2.4	2.4
42	前逆宙返り一回半	一回半捻り	(走)	—	—	—	—	2.4	—
43	後踏切前飛	半回捻り		1.8	1.7	—	2.0	1.9	—
<b>第6群 逆立ち飛込</b>									
44	逆立ち飛			1.3	—	—	1.4	—	—
45	逆立ち倒れ飛			1.4	—	—	1.9	—	—
46	逆立ち宙返り			—	1.5	1.4	1.7	1.6	1.5
47	逆立ち2回宙返り			—	—	—	—	—	2.2
48	逆立ち中抜け飛			—	1.4	1.3	1.7	1.6	1.5
49	逆立ち中抜け後飛			—	—	2.0	—	2.3	2.1
50	逆立ち中抜け後宙返り一回			—	—	1.8	—	—	1.9

# 主なる大学の卒業生と新入生

昭和32年度東都大学主なる卒業生と新入生は次の通りである。

## ○日本大学 卒業生

後藤 暢	西日本新聞社	福岡	自由形
大野 司	ブリジストンタイヤ	"	"
青木 行義	"	"	"
猿渡 敬昭	東北工業	"	"
大石 竜一	ブリジストンタイヤ	福岡	平泳
戸上 雅雄	大丸デパート	"	"
安達 登利	富士測定機	東京	水球
水垣 憲治	東邦酒造	"	"

## 新入生

稲垣 初穂	宇和島東高	愛媛	自由形
石原 勝記	鹿本高	熊本	"
北畑 昌英	伊都高	和歌山	"
富田 一雄	三瀬高	福岡	背泳
渡辺 和夫	日大一高	東京	"
永井 正員	太田高	島根	平泳
宮下 宗重	橋本高	和歌山	"
大山 勝	法政二高	神奈川	"
増永 文昭	佐伯鶴城高	大分	バタフライ
河野 一郎	土佐高	高知	"
中島 貞夫	日大四高	東京	飛込

## ○早稲田大学 卒業生

山下 勝次	日本冶金	神奈川	自由形
清光 雄二	日産自動車	山梨	"
中沢 潔	報知新聞	東京	平泳
梶川 孝義	常磐炭鉱	"	"
小椋 晃吉	木村産業	東京	水球

## 新入生

山中 毅	輪島高	石川	自由形
小笠原勝司	国泰寺高	広島	"
猪又 寿	福岡中央高	福岡	バタフライ
二階 カズ	五条高	奈良	自由形

## ○中央大学 卒業生

浜島 明	大垣市役所	岐阜	自由形
粕谷 保	吉川KK	東京	"
井本 吉郎	東京電力	"	背泳
山本 修平	"	豊橋	バタフライ
田所善吾朗	"	高知	"

## 新入生

鈴木 国城	上野定制時高	東京	自由形
浜田 成亮	土佐高	福岡	"

守随 勝清	佐伯鶴城高	大分	自由形
三木 圭三	今治西高	愛媛	平泳
北川 健一	下田北高	静岡	"
井出口良二	出水高	鹿児島	"
開田 幸一	伝習館高	福岡	バタフライ
関 武久	柏崎商高	新潟	"
三石 忠雄	藏前工高	東京	飛込

## ○明治大学 卒業生

庄司 嘉宏	家業	千葉	自由形
足立 達	埼玉日産自動車	埼玉	"
東山 充	日刊工業新聞	"	バタフライ
藤沢 健二	独乙ハードメルタ社	東京	"

## 新入生

鳥山 忠良	宇和島南高	愛媛	背泳
俵口 頼康	明善高	福岡	バタフライ

## ○立教大学 卒業生

木村 正	日興証券	東京	自由形
谷内洋一郎	日本通運	"	背泳
南条 圭吾	日本精化加工	"	平泳
弘中 誠治	東洋ペアリング	"	"
田中 鉄也	平和相互銀行	東京	バタフライ

## 新入生

山口 安司	下田北高	静岡	自由形
村島吉太郎	五条高	奈良	平泳
河添 克也	鎮西高	熊本	バタフライ

## ○法政大学 卒業生

福岡 輝司	リツカーミシン	東京	自由形
西山 靖	日亜商会	"	"
平田 格二	日本電電公社	愛知	"

## 新入生

森江 重雄	観音寺一高	香川	自由形
戸上征支郎	山鹿高	熊本	"
小島 孟	法政二高	神奈川	平泳
米田 寅生	山鹿高	熊本	"

## ○慶応大学 卒業生

森 文太郎	東横百貨店	東京	自由形
山沢 隆一	日東無線	"	水球
西川 慎二	雪アイヌ	"	"
平野 延夫	日本電興	"	"
山本 建	朝日ビール	"	"

## 新入生

古川 徹	宮之城高	鹿児島	自由形
------	------	-----	-----



# 平泳 バタフライ…………… ……………の日本記録について

栗 村 中 丸

昨年メルボルンにおいて開催されたF I N Aの総会で平泳及びバタフライの潜水泳法禁止等の新規則が定められ、昭和32年5月1日より実施されることとなったことは既に周知のとおりである。

これに伴い潜水泳法により作られた従来の日本記録は棚上げとなって新発足することとなるが、常務理事会においては、当初この対策として平泳及びバタフライの日本標準記録を制定し、この記録を破った場合日本新記録として公認すべきではないかとの意見が打出され記録委員会に対し至急検討方指示があった次第である。そこで本委員会を開き種々協議した結果、標準記録をつくるにしても問題の性質上単に記録委員会だけで決定せず広く往年の名選手や最近のトップ・スイマー、或はシード校の監督、コーチ、高校の部長といった識者の意見をも徴し決定すべきであるとのことに意見の一致を見たので直ちにそれらの識者16氏に対しF I N Aの標準記録、従来の日本記録等を参考としてアンケート式に意見を求めた。その結果、3月末日までに14氏から回答が寄せられたので、これを基礎として下記のとおり記録委員会案をまとめた。

(男子)	100m 平 泳	1:13.0
	200m "	2:40.0
	100m バタフライ	1:02.0
	200m "	2:19.6
	400m メドレー・リレー	4:19.0
(女子)	100m 平 泳	1:27.0
	200m "	3:04.0
	100m バタフライ	1:18.6
	200m "	本年度最高記録
	400m メドレー・リレー	5:22.0

よって、この案を改めて4月上旬の常務理事会にかけ協議したところ、論議は一応振り出しに戻った形となり日本標準記録を設けるべきかどうか、本年度最高記録とするか、F I N Aの記録を標準とすべきか等主として原則的問題につき意見が続出し、結局競泳委員会(学生部会を含む)と協議し、同委員会の意向を十分とり入れるべきであると決定された。

そこで4月10日競泳委員会のメンバーに学生部会の諸君を交へ種々意見をたたかわした結果。

1. 標準記録は設けない。
2. F I N Aの記録を破ったものは世界新記録であり同時にそれは日本新記録として認める。
3. F I N Aの記録に達しない場合は年末に整理し、本年度の日本最高記録をもって、日本新記録とする。

との申合せに達した。よって、その結果を再度記録委員会にはかったところ、右の申合せを常務理事会で最終的に決定する場合は了承するが、本委員会としては、アンケート式により広く識者の意見を求め選手諸君の身になって慎重に考慮した上、本委員会案をつくったものであって、実際問題として男女共一定のスタンダードがなければこまろうし、特に女子の場合は現在のレベルを考慮した場合標準記録の設定は必要である感が深いものがあるので、一応常務理事会には、右の趣旨を説明した上その決定に俟つという結論に達した。

その結果、4月18日の常務理事会において、競泳委員会との協議結果及び記録委員会の協議事項につき詳細報告し、論議を重ねたところ、水泳連盟としては、前記の競泳委員会との申合せ案を採用するということに意見の一致を見た次第である。

## 連 盟 日 誌 (昭和31年度)

1月4日(水) 事務所開く	13日(金) 常務理事会
オリンピック競泳合宿練習会始る(東大プール)	14日(土) 学生実行委員会 飛込委員会
10日(火) "	16日(月) 学生水球委員会
終る	

水球小委員会

18日(水) 普及委員会

19日(木) 理事会

21日(土) 学生総務委員会

23日(月) 普及委員会

25日(水) 緊急常務理事会(体協会議室)

26日(木) 常務理事会

28日(土) 学生代表委員会

29日(日) 定例代議員会(丸ビル精養軒)

30日(月) 「水泳」誌 108, 109号発行

2月2日(木) 常務理事会

8日(水) 水球小委員会

9日(木) 編集委員会

11日(土) 飛込委員会

13日(月) 学生水球委員会

16日(木) 常務理事会

17日(金) 普及委員会

20日(月) シンクロ委員会

23日(木) 理事会

25日(土) 日本泳法研究会(伊東温泉プール)

26日(日) " ( " )

3月1日(木) 常務理事会

2日(金) シンクロ委員会

5日(月) スポーツ記者座談会  
サントス歓迎会

7日(水) 水球委員会

8日(木) 常務理事会  
飛込委員会

12日(月) 普及委員会

13日(火) 水球小委員会  
中学通信競技打合せ会(スエヒロ)

15日(木) 常務理事会

19日(月) 学生水球委員会

21日(水) 全国強化委員会(体協会議室)

22日(木) 理事会

24日(土) 水球小委員会

26日(月) 編集委員会

29日(木) 常務理事会  
6大学総務委員打合せ会

30日(土) 水球小委員会

4月1日(日) 女子競泳合宿練習会始る(白浜温泉プール)

2日(月) シンクロ講習会打合せ会

4日(水) シンクロ講習会始る(YWCAプール)

7日(土) " 終る( " )  
" 競技会 ( " )

編集委員会

9日(月) 普及委員会  
学生水球委員会

10日(火) 女子競泳合宿練習会終る

12日(木) 常務理事会  
強化常任委員会

13日(金) 栄養懇談会

16日(月) 水球合同練習会始る(東大プール)

17日(火) 強化常任委員会

19日(木) 理事会  
オリンピック強化飛込合宿練習会始る  
(大阪プール)

20日(金) 競泳合宿練習会打合せ会

23日(月) 普及小委員会  
競泳合宿練習会打合せ会

24日(火) 日本泳法競技会打合せ会

25日(水) 水球合同練習会終る  
民放との打合せ会

26日(木) 常務理事会

28日(土) オリンピック強化飛込合宿練習会終る  
" 競泳合宿練習会始る  
(別府室内プール)

30日(月) 学生実行委員会  
「水泳」110号発行

5月7日(月) オリンピック強化競泳合宿練習終る

8日(火) 三大学打合せ会

10日(木) 常務理事会

11日(金) 飛込委員会

14日(月) 強化常任委員会  
大学監督会議  
普及委員会

16日(水) 水球委員会

17日(木) 理事会

18日(金) 学生総務委員会  
神宮プール専門委員会

21日(月) 編集委員会

22日(火) 普及委員会  
早慶対抗メンバー交換会

23日(水) 水球委員会  
学生水球委員会  
三大学打合せ会

24日(木) 常務理事会

26日(土) 安部名誉主事FINA理事会(ローザンヌ)出席の為め出発  
関東学生水球リーグ戦始る(神宮プール)

27日(日) 長沢二郎選手帰国

- 30日(水) 三大学メンバー交換会
- 6月1日(金) 東日本医歯薬大会打合せ会
- 3日(日) 第28回早慶対抗水上競技大会(神宮プール)
- 4日(月) 普及委員会
- 5日(火) 勤労者大会打合せ会
- 6日(水) 東日本医歯薬大会打合せ会
- 7日(木) 常務理事会
- 10日(日) 第21回3大学対抗水上競技大会(神宮プール)
- 11日(月) 指導者講習会始る(東大プール)
- 12日(火) 飛込委員会
- 13日(水) 編集委員会
- 14日(木) 常務理事会
- 15日(金) 東日本医歯薬大会打合せ会  
指導者講習会終る  
指導者資格検定試験第1日(東大プール)
- 16日(土) " 第2日( " )
- 18日(月) シンクロ委員会  
安部氏FINA理事会より帰国
- 19日(火) オリンピック募金(大学)打合せ会
- 21日(木) 理事会
- 22日(金) 日大対中大競技会メンバー交換会
- 23日(土) オリンピックデー(体協)  
オリンピック代表懇談会(山の上ホテル)  
オリンピック街頭募金(東京駅)
- 24日(日) " ( " )
- 25日(月) 学生登録管理委員会  
日大対中大競技会打合せ会
- 26日(火) 飛込委員会
- 28日(木) 常務理事会
- 29日(金) 普及委員会
- 7月1日(日) 第1回日大対中大水上競技大会(神宮プール)  
オリンピック飛込第2次合宿練習会始る(大阪プール)
- 4日(水) 水球委員会
- 7日(土) 都水泳教室選考会(神宮プール)  
第2次飛込合宿練習会終る
- 8日(日) 東部理工科大学水上競技大会(東工大プール)
- 9日(月) 普及委員会
- 10日(火) 飛込委員会  
東部国公立メンバー交換会
- 12日(木) 常務理事会
- 14日(土) 東部国公立大学水上競技大会(一橋大プール)
- 15日(日) " ( " )  
東京都日本選手権予選会(神宮プール)  
東日本医歯薬大学水上競技大会(中大プール)
- 18日(水) 全国国公立水上競技大会(神宮プール)
- 19日(木) " ( " )
- 21日(土) 東京都高校選手権水上競技大会(神宮プール)
- 22日(日) " ( " )
- 23日(月) シンクロ講習会始る(国民体育館)
- 24日(火) 学生水球委員会
- 25日(水) 水泳教室始る(野沢, 天理, 久留米)  
アメリカ, シンクロチーム来朝(10名)  
清水康男理事比島へ
- 26日(木) 常務理事会
- 28日(土) シンクロ講習会終る  
中学通信競技打合せ会(朝日新聞社)  
東京勤労者水上競技大会(神宮プール)  
地域高校(北海道, 中部)
- 29日(日) " ( " )  
水泳教室終る
- 30日(月) 「水泳」111号発行  
普及委員会
- 31日(火) 水球委員会  
比島少年選手(5名)到着
- 8月1日(水) 飛込委員会
- 2日(木) 常務理事会
- 4日(土) 地域高校  
日米シンクロ, 日比交歓水上競技大会(大阪プール)
- 5日(日) " ( " )  
地域高校
- 6日(月) 記録委員会
- 7日(火) 比少年選手歓迎会(遊ぎり)
- 8日(水) 日米シンクロ交歓会(目白プール)  
水泳担当記者との懇談会(松坂)
- 9日(木) 理事会
- 10日(金) 日本選手権水上競技大会第1日(神宮プール・東伏見プール)
- 11日(土) " 第2日(神宮プール)  
定例代議員会(明治記念館)
- 12日(日) 日本選手権水上競技大会第3日(神宮プール)

13日(月) 米シクロ、比島少年離京  
普及委員会

14日(火) 学生水球委員会

15日(水) 日本泳法委員会  
日本学生打合せ会

16日(木) 国民皆泳、週間始る

17日(金) 日本高校選手権水上競技大会第1日(神宮プール)

18日(土) " 第2日( " )

19日(日) " 第3日( " )  
日本泳法競技大会(天理プール)

20日(月) 全国学童水泳大会(中央会場 杉並プール)  
第3次オリンピック選手飛込合宿練習会始る(大阪プール)

21日(火) 常務理事会  
編集委員会

22日(水) 国民皆泳週間終る  
水球委員会

23日(木) 常務理事会  
日大水球チーム香港遠征に出発  
関東学生水球トーナメント戦(神宮、日大プール)

24日(金) " ( " )

25日(土) 全国勤労者水上競技大会(天理プール)

26日(日) " ( " )  
全日本中学水泳通信競技大会(全国)

27日(月) 関東学生メンバー交換会

30日(木) 常務理事会

31日(金) 飛込委員会  
日大水球チーム香港より帰国

9月1日(土) 第3次飛込合宿終る  
関東学生選手権水上競技大会第1日(神宮プール)

2日(日) " 第2日( " )

3日(月) 日本学生大会メンバー交換会

5日(水) オリンピック選手選考記録会(神宮プール)

6日(木) 常務理事会

7日(金) 日本学生選手権水上競技大会第1日(神宮プール)

8日(土) " 第2日( " )  
オリンピック飛込記録会( " )

9日(日) " ( " )  
日本学生選手権水上競技大会第3日(神宮プール)

オリンピック代表決定

10日(月) 普及委員会

13日(木) 常務理事会

14日(金) 水球委員会

15日(土) 水球小委員会(丸ビル精養軒)

17日(月) 学生臨時総務委員会

18日(火) 水球委員会

20日(土) 理事会

22日(土) 水球合同練習会始る(東大プール)  
国民体育大会水上競技大会第1日(甲子園プール)

23日(日) " 第2日( " )  
臨時代議員会(甲子園食堂)

24日(月) 加盟団体長会議(吹田、朝日ビール集会所)  
国民体育大会水上競技大会第3日(甲子園プール)

25日(火) " 第4日( " )

28日(金) 水球委員会

29日(土) 水球合同練習会終る  
オリンピック街頭募金(東京駅)

30日(日) " ( " )

10月2日(火) 水泳懇談会(福田屋)

3日(水) 清川正二氏アメリカより帰国

4日(木) 常務理事会

6日(土) オリンピック代表集合合宿開始

7日(日) " 歓送会、結団式(光輪閣)  
臨時代議員会( " )

9日(火) オリンピック代表体協にて結団式(中大講堂)

10日(水) オリンピック代表合宿練習の為別府に出発  
水球委員会

11日(木) オリンピック代表 競技(別府室内プール)練習開始  
" 飛込(野沢温泉プール) "

15日(月) 編集委員会

16日(火) 水球委員会

17日(水) 普及委員会  
シクロ委員会

18日(木) 理事会  
審判測定器委員会(精養軒)

19日(金) 清川、古橋両氏準備の為メルボルンに出発

20日(土) 水泳座談会

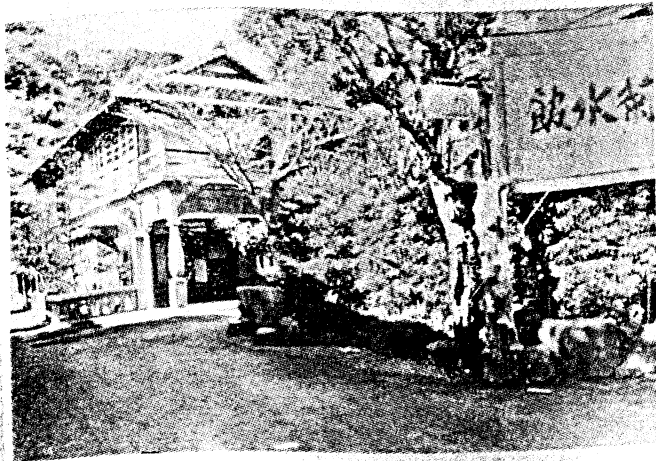
- |                             |                     |
|-----------------------------|---------------------|
| 25日 (木) 水球委員会               | 26日 (月) 臨時学生代表委員会   |
| 27日 (土) 水球小委員会              | 27日 (火) 「水泳読本」の会    |
| 30日 (火) 飛込委員会               | シンクロ委員会             |
| 31日 (水) 学生総務委員会             | 水球打合せ会              |
| 水球小委員会                      | 12月1日 (土) 飛込委員会     |
| 11月1日 (木) 常務理事会             | 5日 (水) 水球委員会        |
| 2日 (金) 飛込代表 野沢合宿より帰京        | 6日 (木) 常務理事会        |
| 4日 (日) " 5名メルボルンに向け羽田出発     | 10日 (月) 普及委員会       |
| 6日 (火) 水球小委員会               | 11日 (火) 水球委員会       |
| 12日 (月) 競泳代表別府合宿より帰京        | 12日 (水) 水球委員会       |
| 普及委員会                       | 13日 (木) 常務理事会       |
| 13日 (火) 学生実行委員会             | 記録委員会               |
| 水球委員会                       | 冬期水球会同練習会始る(錦糸町プール) |
| 14日 (火) 競泳代表26名メルボルンに向け羽田出発 | 14日 (金) 編集委員会       |
| 15日 (木) 理事会                 | 15日 (土) オリピック代表帰国   |
| 19日 (月) 学生総務委員会             | " 歓迎会及び報告会(明治記念館)   |
| 20日 (火) 水球打合せ会              | 18日 (火) 水球委員会       |
| " 「水泳」誌112号発行               | サミーリー氏来朝懇談会(精養軒)    |
| 21日 (水) シンクロ打合せ会            | 25日 (火) 理事会兼忘年会     |
| 編集, 記録委員会                   | 28日 (金) 冬期水球合同練習会終る |
| 22日 (木) 常務理事会               | 29日 (土) 事務所閉ム       |
| 学生水球委員会                     | 以上                  |

**編集後記** 10何年振りに又編集を命ぜられました。時たまたま田畑会長以下幹部の辞任等でゴタゴタし、何かとまごついて発行が遅れ甚だ申し訳ございません。前任者の川田さんが名編集長であっただけに私の最初からの黒星がひときわ目立つような感じがして気がひけます。本号はオリピック記事とそれに関係あるものを主としてまとめました。小池監督以下の報告書は体協でまとめたものを借用しました。今後読者各位の叱正をまって改善していきたいと思っておりますから、宜しく御指導下さい。(宍道)

**編 集 委 員** (アイウエオ順 ◎印委員長)

上野 徳太郎	川田 友之	金田 平八郎	金子 巍	菊地 章
串田 正夫	三枝 美貴子	志村 文一郎	島田 桃一郎	◎宍道 洋一
鈴木 祐一	高橋 静子	多治見 祐孝	中村 雅明	

日 本 水 泳 連 盟 機 関 雑 誌 <hr/> <b>水 泳</b> <hr/> 第 1 1 5 号	昭和 32 年 6 月 25 日 印 刷 昭和 32 年 6 月 30 日 発 行 日 本 水 泳 連 盟 編 集 兼 発 行 人 宍 道 洋 一 印 刷 所 株 式 会 社 成 島 印 刷 所 東 京 都 中 央 区 日 本 橋 本 石 町 3 の 4 電 話 日 本 橋 (24) 1701・6509・7082	<b>定 価</b> (年 4 回 発 行) 1 年 分 ¥300.- (予 約 申 込 者 に 限 り 頒 布) 1 ヶ 年 前 金 予 約 は 郵 送 料 不 要。 東 京 都 千 代 田 区 丸 ノ 内 2-2 丸 ビ ル 7 2 2 区 <b>日 本 水 泳 連 盟</b> 発 行 並 申 込 所 電 話 和 田 倉 (20) 3090・4885 番 振 替 口 座 東 京 5178 番
---	---	--



日本交通公社協定旅館

# 温泉旅館 水菊館

別館 温泉プール

静岡県南伊豆下津村河峰  
電話 川津浜 18・218・219番

温泉プール 屋外25米 5コース 深1.3米  
閑雅清爽 湯量豊富にして  
修学旅行水泳合宿団体に最適

施設 収容人員200名様

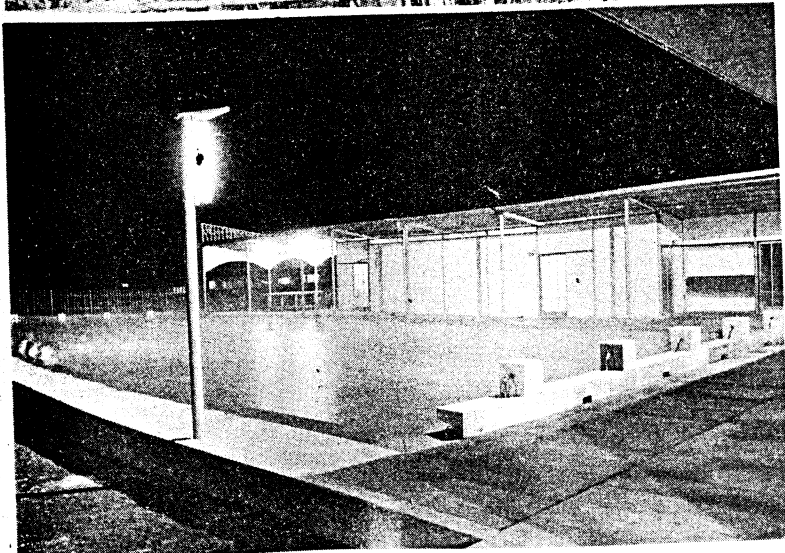
露天、内風呂、家族風呂、  
貸切、合せて大小12浴場  
舞台付大広間 ホール、テ  
レビ、ピンポン、麻雀

宿泊料 一般1000円ヨリ、団体800円  
ヨリ 学生400円ヨリ

案内所 東京 日本橋堀留町1の11  
みくに会  
TEL (66) 5766

名古屋 中区南大津通3の6  
TEL (24)4792

大阪 浪速区北日東町 138  
TEL(64)7664



競泳プール用

# 最新式循環濾過装置

設計 施行

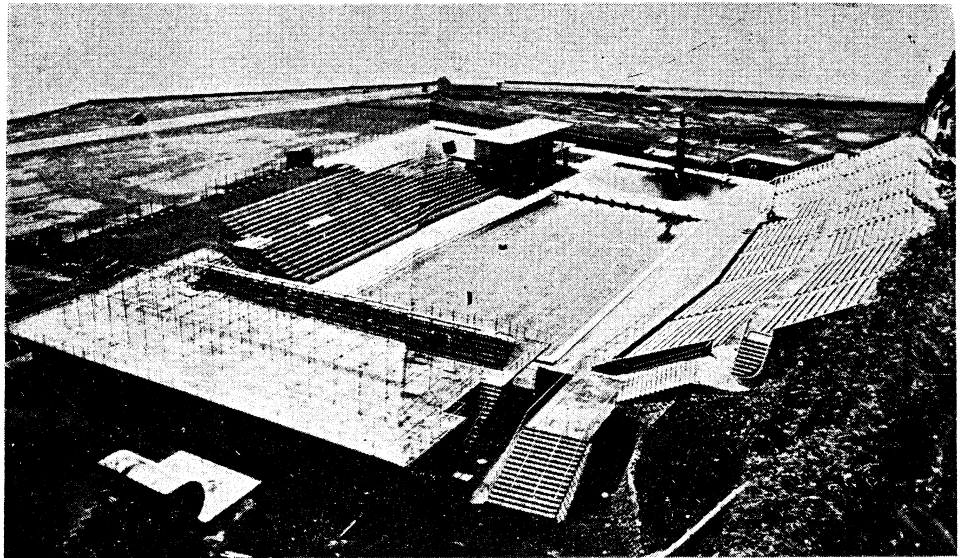
競泳 50 m 及 25 m プール、徒渉プール、娯楽プール、  
温泉プール、 戸外及室内プール、 浴場プール用  
塩素滅菌圧入式・硫酸銅比例圧入式・急速濾過循環式

循環浄化装置はこの建物の地下室

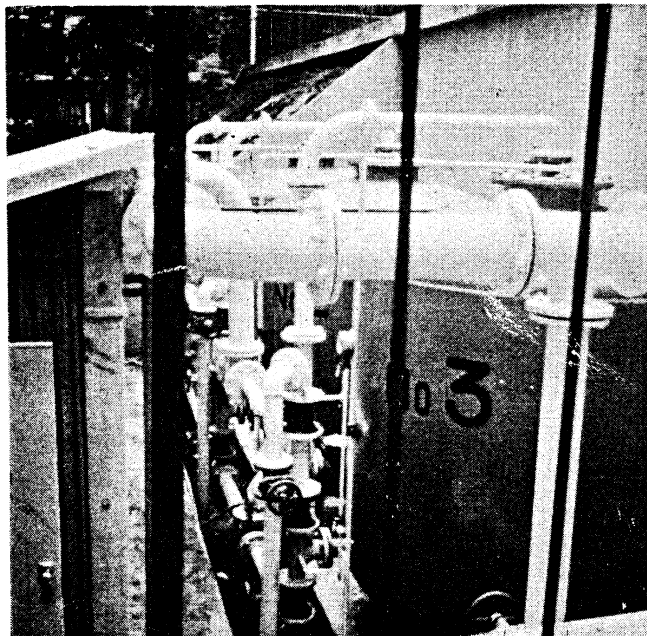
## 循環浄化要領

プール容量の循環換水は少くも24時中3回であります  
しかも薬品自動注入方式による急速濾過機を経て完全に滅菌し、且又アレルギーの発生を防止した完全な浄水が循環致します。

依つて水泳者は清澄な水の中で安全に快く泳げます。



50米競泳プール及び飛込プール



## 主要実績

- 鎌倉市営プール
- 立教プール
- 相模原米軍プール
- シヨソソ AB 白井プール
- 岐阜キャンプ米軍プール
- 白金小学校プール
- 九段高校プール
- 富士銀行 済美山プール
- 水戸県営プール
- 水産大学プール
- 仙台女子高校
- 第一銀行プール
- 第一生命プール
- 其他プール

## RATE OF FILTRATION

急速濾過機は内部濾床の最有効の型式でありまして、濾過率3ガロン/平方呎/分以上は許されません。一定時間運転後に一基づつ逆洗々滌が出来、且又内部表面洗滌も出来ます

# 東工業株式会社

本社 東京都港区芝白金台町2ノ34  
電話 白金 (44) 2161~4・9746  
工場 港区・目黒区

大阪 大阪市西区靱上通6ノ35  
営業所 電話 土佐堀 (44) 2657  
九州出張所 福岡市 古濃町 8  
電話 東 (2) 5507